

江戸名所圖會

十九

西垣文庫
文庫10
6556
19

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100



文庫10
6556
19

西漢文庫

三園稻荷社

小梅村田の中小あり

別當の天台宗延命寺と

号を神像ハ弘法大师の作トシテ

同大师の勧請よりとテ文和

年間ニ井寺の源慶僧都再興を慶長の頃迄

今地主を南の方小

あり一後此地又移セモ當社の内陣又英一蝶の畫ある牛若丸と

舞慶り半身の圖を掲ガ

五元集

牛鳴山の神前にて雨乞す

夕立や田をみらうとの神

宝晋寺
其角

社僧云元禄六年の夏大旱魃とあつて六月の七八日村民あつて神前より雨の祈願其角も當社より請ひ一人の中に白雲とあつて其角又請願の應答を乞ふすめられ農民もとるを連ねて當社の神前までさうして感應やうとしの日膏油

今も尚存

侍

あり

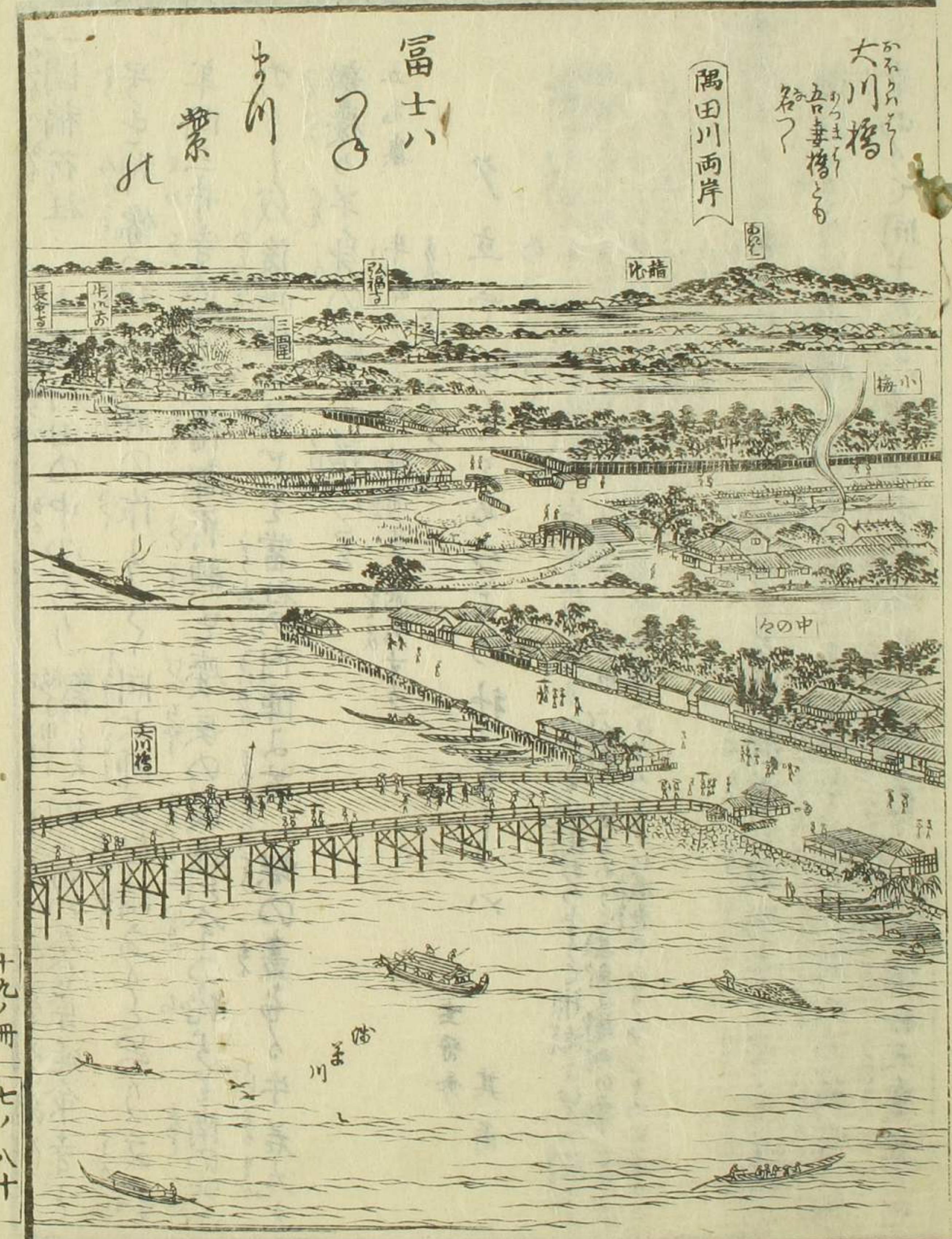
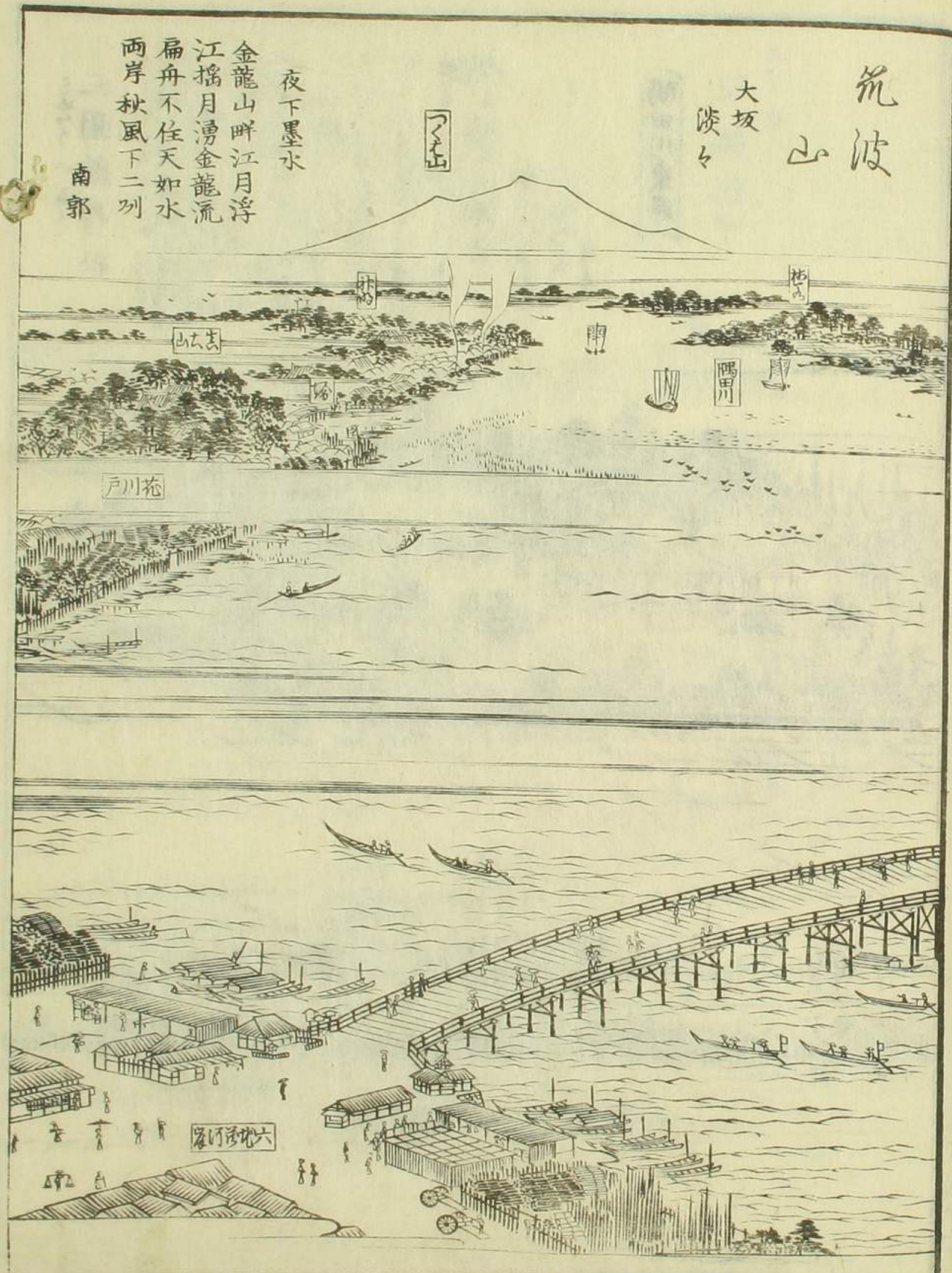
牛御前王子權現社

同所北の方より別當の最勝寺と号を牛鳴の

總鎮守として祭禮ハ陽年九月十六日北平所石原新町の旅所へ神

幸ゆて同十五日小歸輿を祭神素盞烏尊

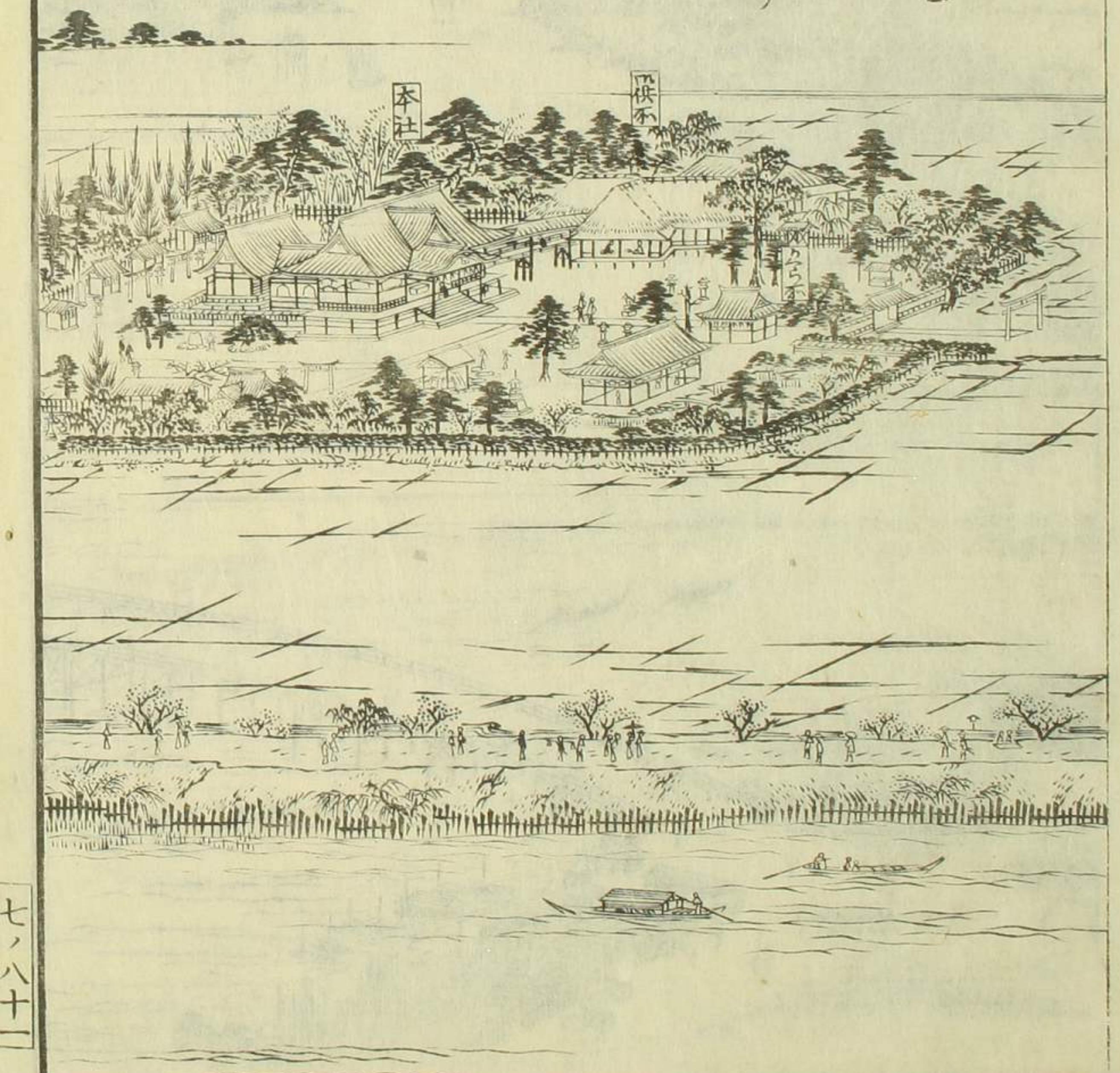
と稱て清和天皇第七



二園稻荷社

え縁の頃西社の境内
一老嫗あり奈波の徒
神佛をさう時この
老嫗田面よりひ拍掌
一つの狛(くわい)ともあく
それを食ふ老嫗立
めらをさし後
狛もさくととろり
吹き記せ其角
くへりと
いふる

隅田川東岸



五元集

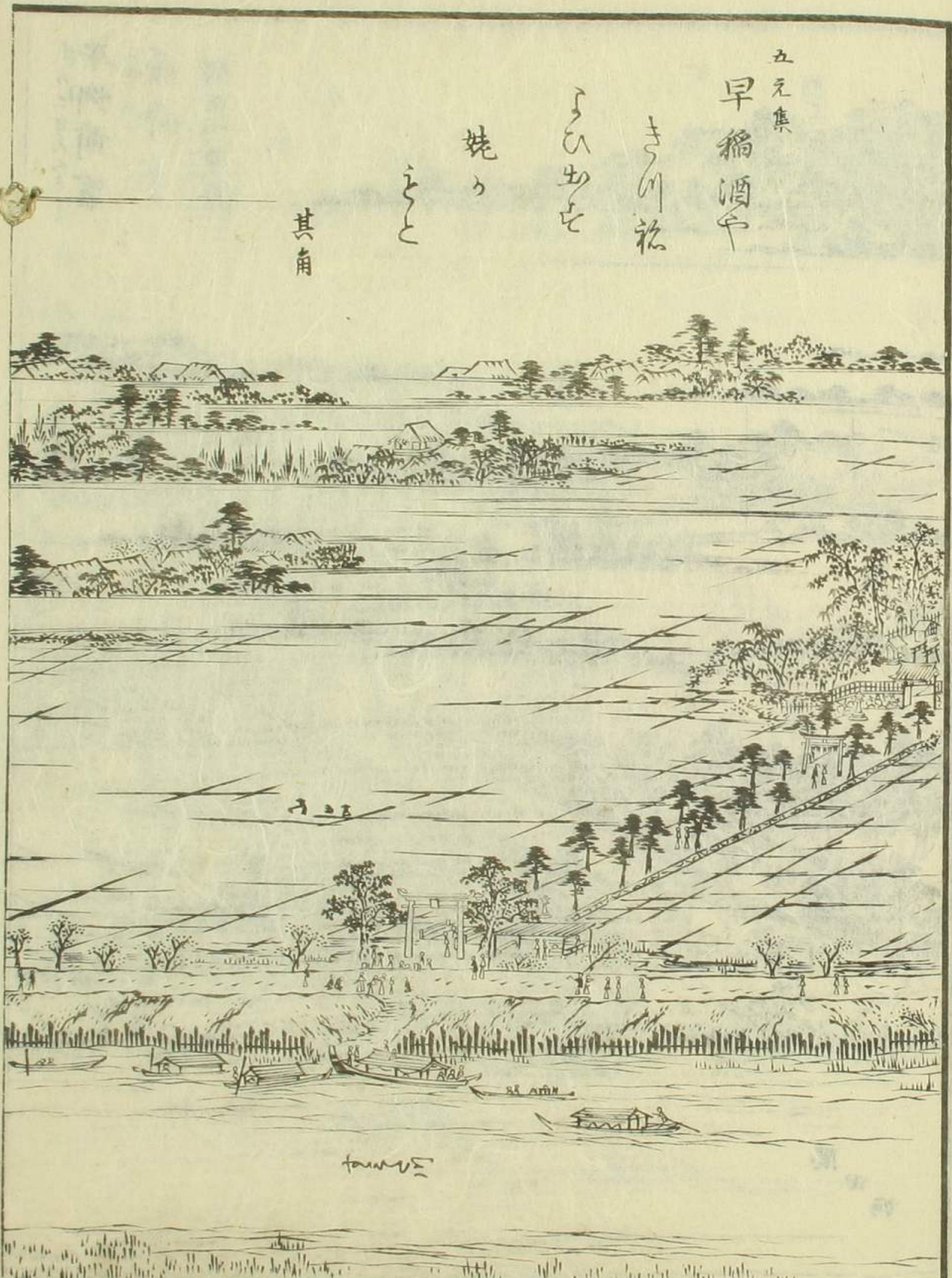
早稲田

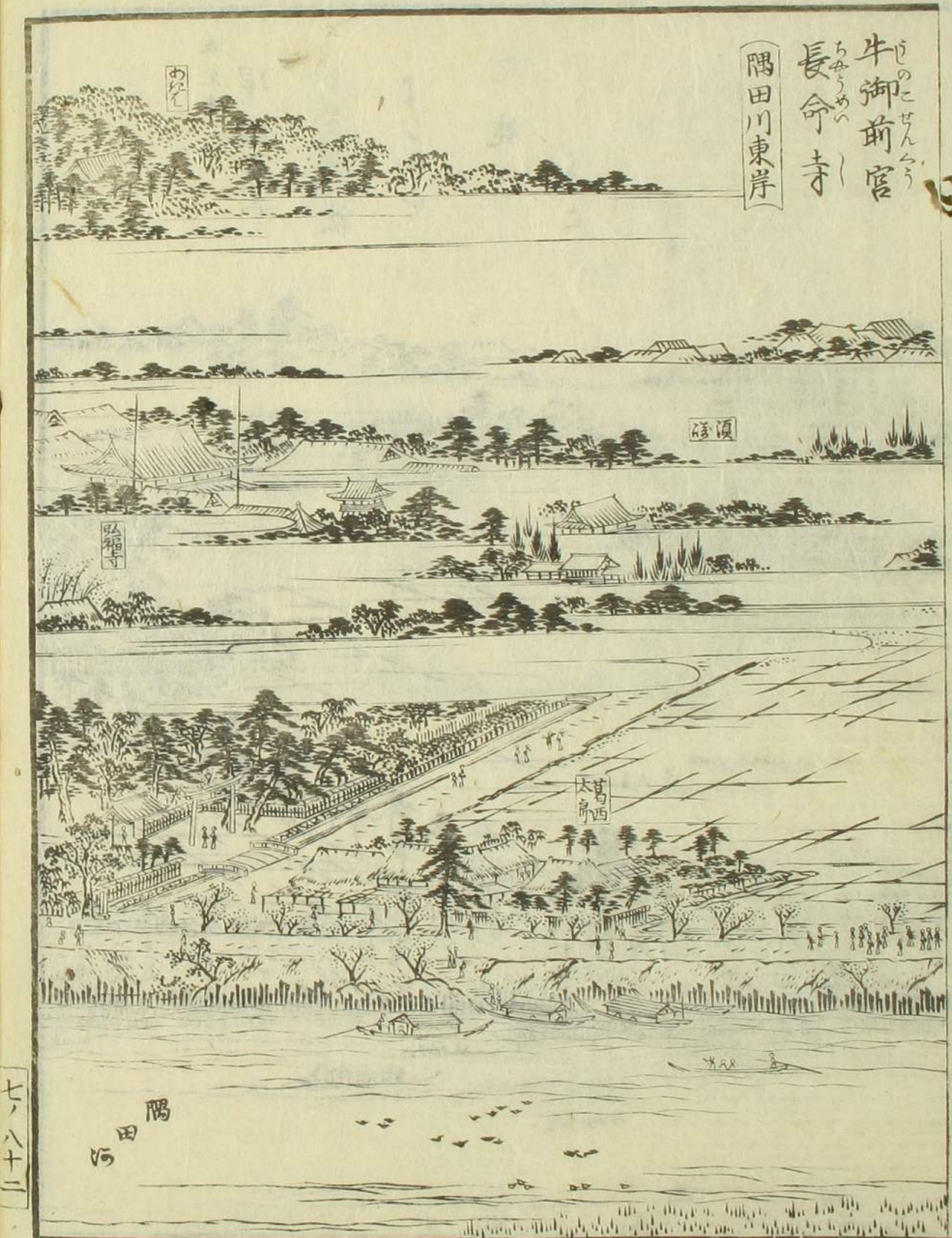
まつ川

姥(う)

と

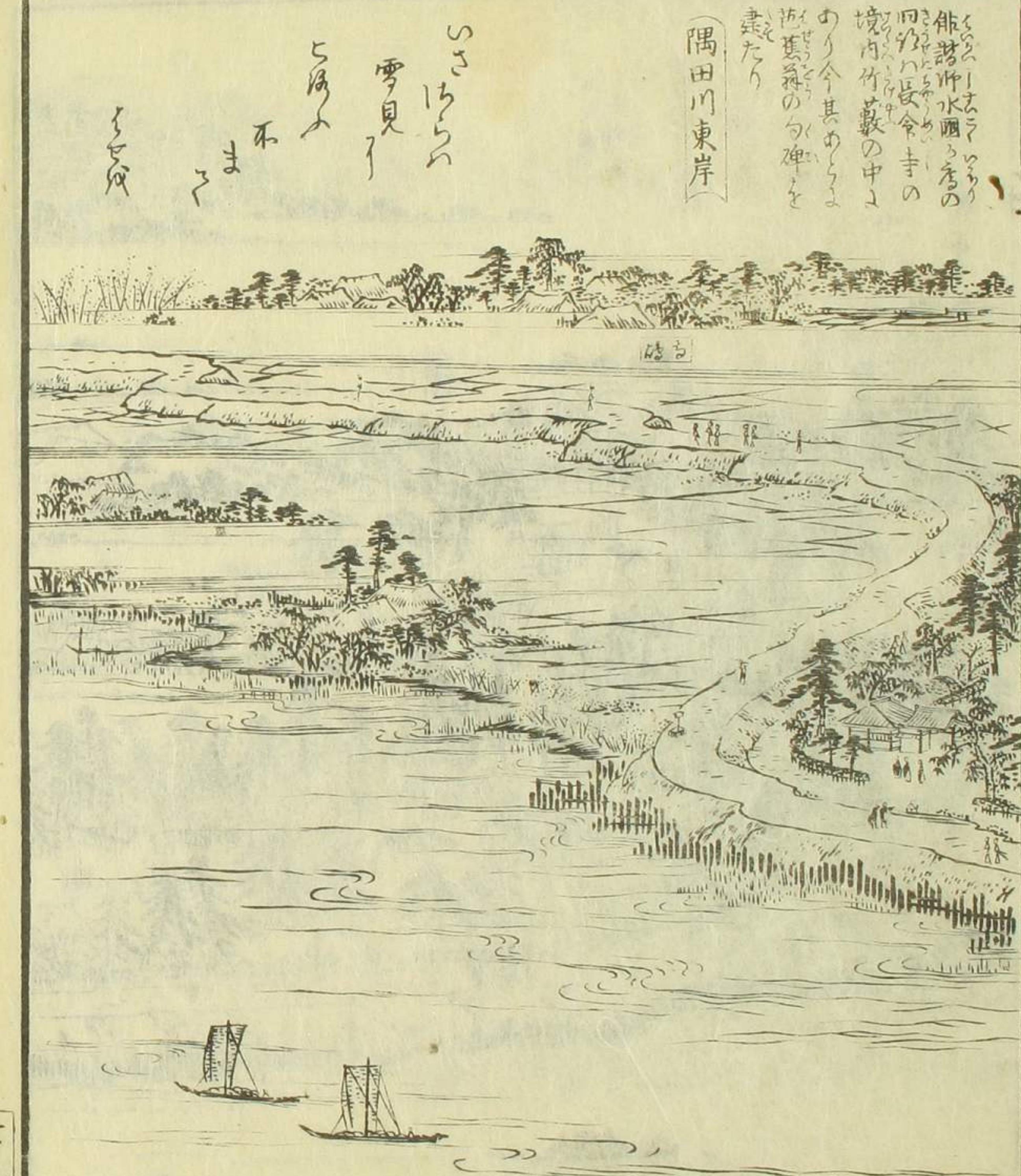
其角





能諸御水國の店の
四之長令寺の
境内竹敷の中より
今其めくは
甚羅の向碑を
書たり

隅田川東岸



皇帝玉祖權現共ニ坐り相傳清和天皇の御宇貞觀二年庚辰秋九月慈覺大師東圓弘法の頃素盞烏尊位冠の老翁と化現此地より跡を垂永く國家を守護せんと告ゆる仍大師一社ア奉之上足の良本門闇梨を留て是父守らしむ尚社の本尊佛大日如來又五十七代陽成院の御宇清和帝第セの皇子當國又延喜天慶元年丁酉九月十五日此地より依用山良本門闇梨にて葬を奉る牛御前の相殿よ合祭り奉ると云ふて假ニ清和帝の皇帝生を替ふをゆふと云ふ或入ヲ尚社を牛侍前と稱すからずすみに地つゝ牛鳴の寺號ありて牛鳴の寺號と云ふ名を異じて牛侍前と唱へたりしきんを後世記して書を前へ書あらたあきられを御前と稱せりと云ふと云リ

梅子供外瑞田御崎花前壇御侍其余相列の三寺大江戸の月岬等にて海に臨む地なり今尚社の邊を須彌村と名はくるもゆゑ海辺の別れにて其頃の文ある例がり作りたりとありてゆふへ極あらう蒼海又價一ノ年を歷て墮地してゆきしのみの寺舊蓮華寺の茶やよはまひちくうり其条りをゆりせ者ふる牛の御寺とする說も據るに似てうらはぬ御宿の假室の美を清と一崎の文字を前へ書あらうて再びサギの形を青み持てセムと呼しあえられと神号と傳前と称すりの又べのうるも風ひたりて御其側ありらるる參すより

法華經千部供養碑 今内陣又板があり長三尺三寸もあり高ハ壹尺六寸あり重さ
碑陰銘曰 二寸程ある

法華十部 貞觀十ビ奉造立釋迦像一軀 明王院

碑文 本殿の中より青石にて其質りて
碑へ社年當社境内の土中より富得りと今本殿の中より青石にて其質りて
壁一上下廻換して全からて碑面又立像の釋迦像の姿を刻し碑陰に直據る
數字を鷲等といふもの法華貞觀等の文字ある刹故して鮮明なり
千葉五郎胤道旗一流 別當最勝寺より移し東溫又治承四年庚子九月十九日
たすひ依千葉又常胤子息を相具てや總の西府又奉會などとて下に西府五郎胤道の
名を加へたり准后親房記又壽永三年二月六日謙倉より福原へり其の内常胤道が
西府五郎胤道同於東六郎胤道等の名あり胤道は常胤の同胞にて母ハ秋又左郎重弘の女あり

長三尺一寸三分
幅一尺九分
房幅九分

國分庄司 千葉五郎平朝臣胤道

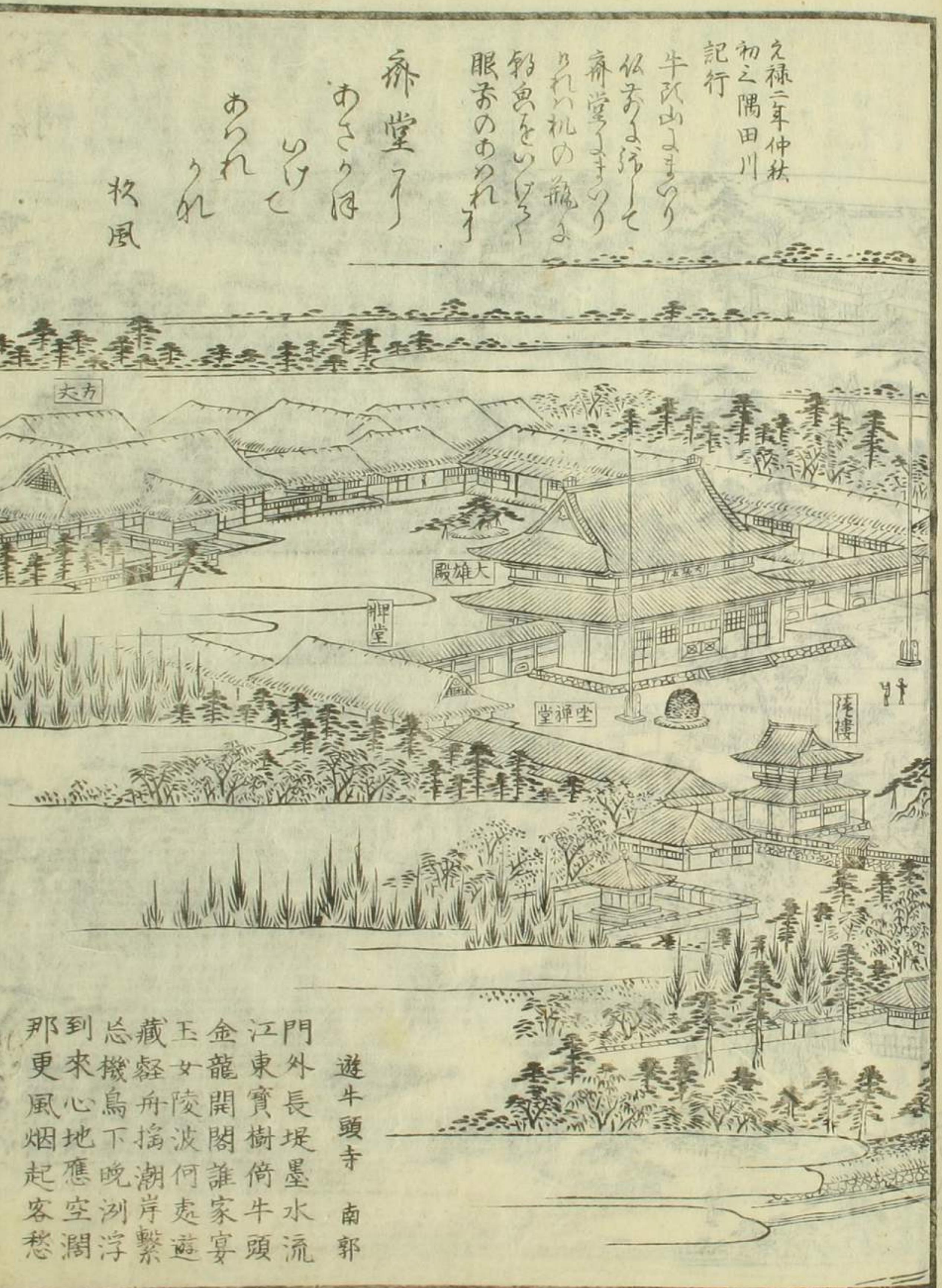
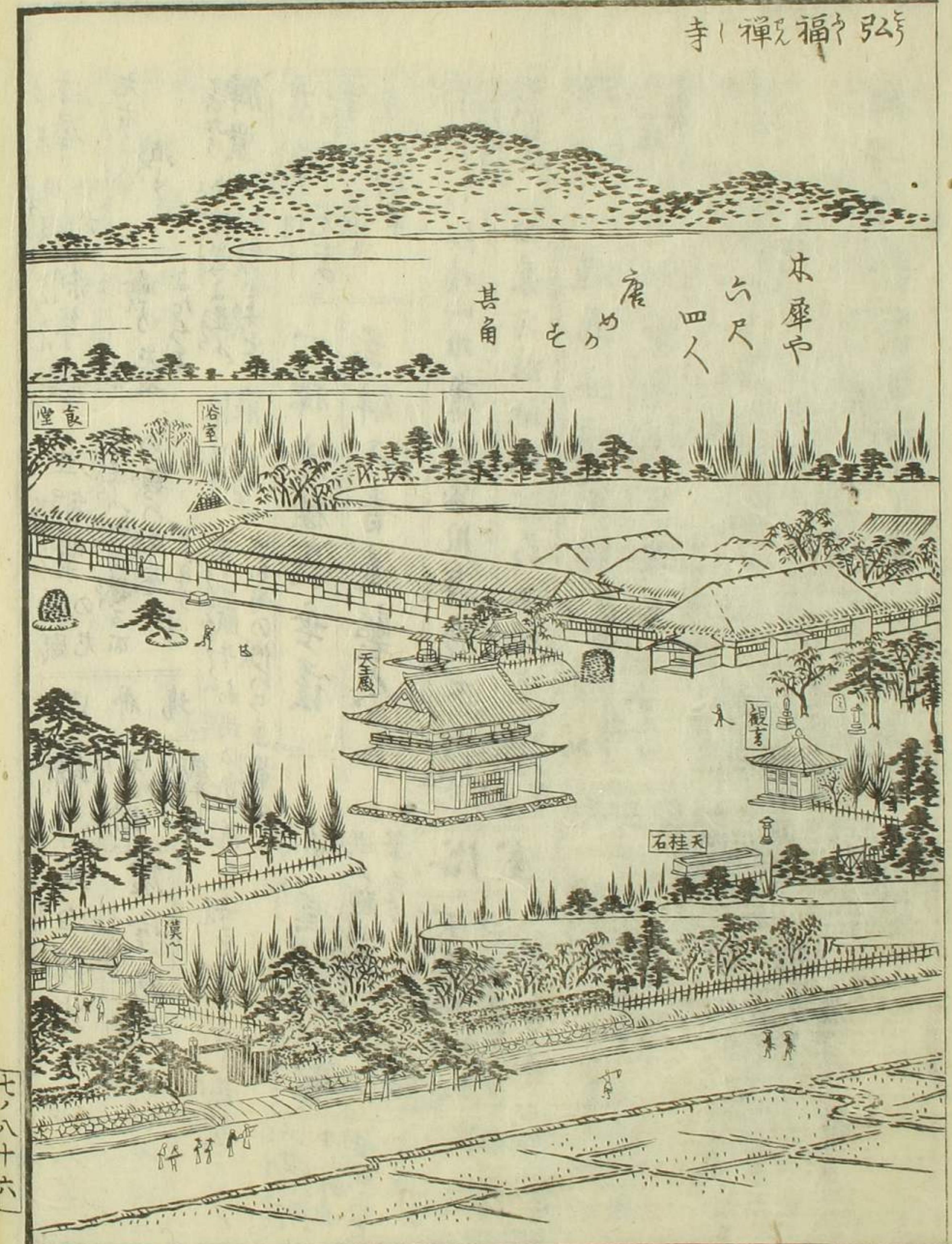
同添狀壹通 其文又西府八代古先祖千葉胤景再興の官社たゞよ依て是を收るゝを記せ
其文又西府八代古先祖千葉胤景再興の官社たゞよ依て是を收るゝを記せ
其文又西府八代古先祖千葉胤景再興の官社たゞよ依て是を收るゝを記せ
其文又西府八代古先祖千葉胤景再興の官社たゞよ依て是を收るゝを記せ

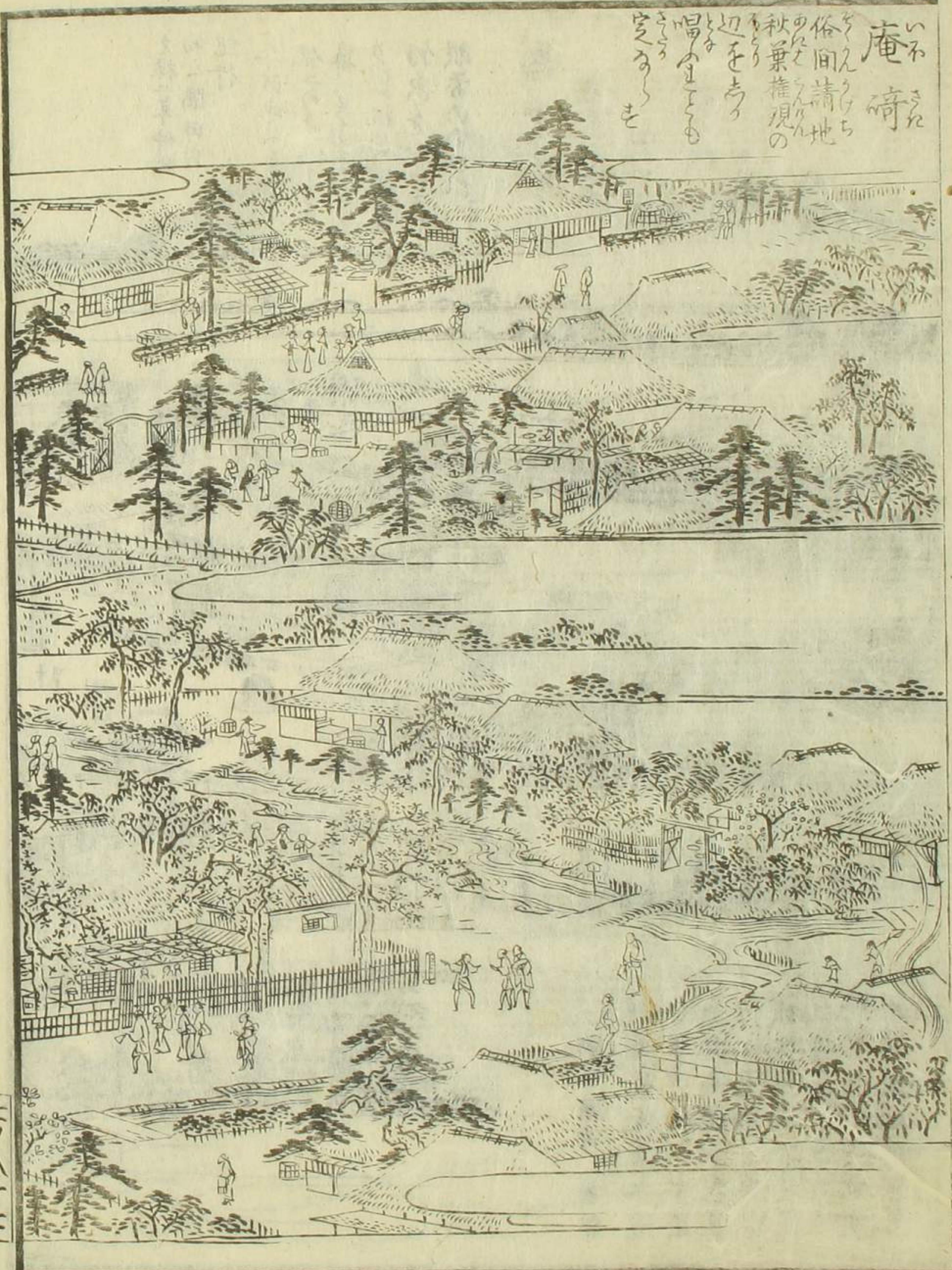
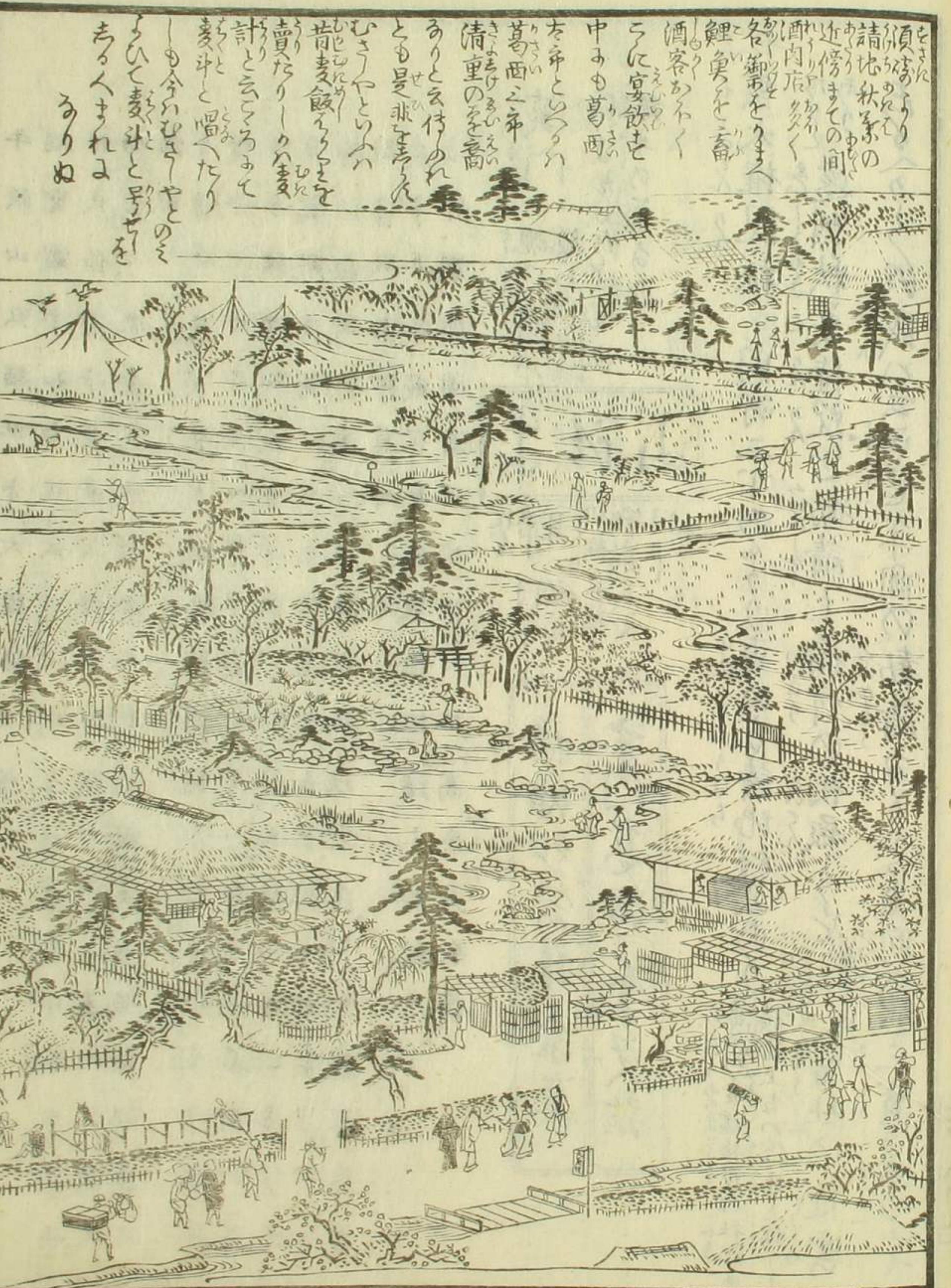
同添狀壹通 其文又西府八代古先祖千葉胤景再興の官社たゞよ依て是を收るゝを記せ

當寺昔のきの庵室よりしる寛永年間 大樹御遊獵の初め御不豫
小あらせられしる此寺内より体をなまひ庭前の井の水をりて御薬を服
ゆひ小須臾ゆて常小あらせゆひより此井より長命水の号を掲り
寺の号をも改じた旨 古今あり尔來長命寺と稱とと云ふ
殊更當ちる雲の名所にて前より開田河の流をうりて風色たらどいふとほし
牛頭山弘福禪寺 牛御前宮の東より隣る此辺を湧崎といふ 旧例或は之修る黃檗汎
の禪室内にて洛陽萬福寺を摸して本尊の唐佛の釋迦牟尼右の迦葉
門難より定山鐵牛和尚延寶紀元癸丑創造す每歲七月十五日大施儀鬼役行有
佛殿額二軒 揭る高泉の筆也
大威德 聯教 本尊の上本の筆也
大雄殿 聖教 本尊の上本の筆也
見相傾身敢保未忘詔お 拝金布比自然海界黄金
宝篋界上主弘福禪寺人を表す
聯教同柱よ掲る 鐵牛の筆也
聯教同柱よ掲る 高泉の筆也
聯教同柱よ掲る 高泉の筆也
聯教同柱よ掲る 高泉の筆也
聯教同柱よ掲る 高泉の筆也
聯教同柱よ掲る 高泉の筆也

弘福寺

本屏や
六尺
四人
甚角 唐
もり





瑞牛頭山弘福禪寺大鐘銘並序
伊氏伯耆守直武公與王心院太夫人壽林元榮大完井
貞擬歸豈牛銘師曰首之阜兮有大法將整飭琳官兮曷殊天正幸值
那亨書仁永守淺鎮兮母子全心乃召鳬氏兮乃簡赤金範斯巨器值
國五厥鑫鮮鎮兮禪母子全心乃召鳬氏兮乃簡赤金範斯巨器值
傳年勳斯用行祈林曉昏考擊兮以利幽顯曰福曰壽兮夫海毫
臨歲在莫禪一子主孫兮振振以千春億兆樂業兮密妻爲毫
濟正著宗雍執毛世四世林鐘上高泉激敬撰

漢門
總門
額
鐵牛の筆

山門
聯門
龍右
門
筆記上又

福地弘法集

玄門高仰雲漢弘

秋葉大權觀社

同所ニ下わやうり東の方請地村みわり
龜戸村吉幡權觀の社記又
請地上古の宿地と稱す

遠別秋葉權觀を勧請し稻荷の相殿とて
千代世當社の權輿
ありへくらひ或ひ云正應年間の勧請よりとも別當ハ三寶も未も小て

千葉山滿願寺と号し神泉の松と称すに社前より松の控より
清泉涌出するをゆふ諸の病氣驗りとづくと
祭れり毎年十二月
境内林泉幽邃にて四時遊観の地あり门前酒肆食店多く居
生例を構て鯉魚を蓄す

清瀧山蓮華寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

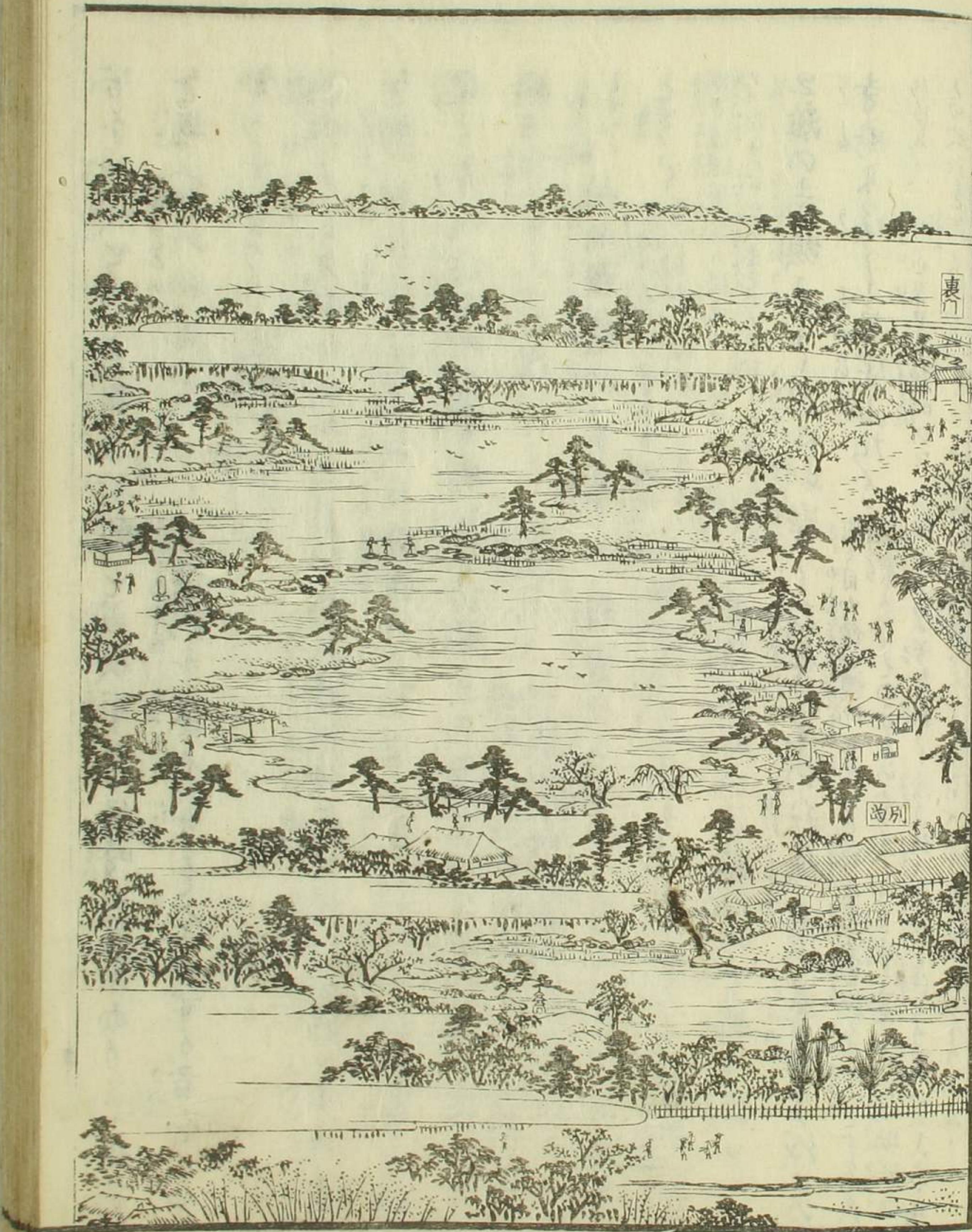
寺

寺

寺

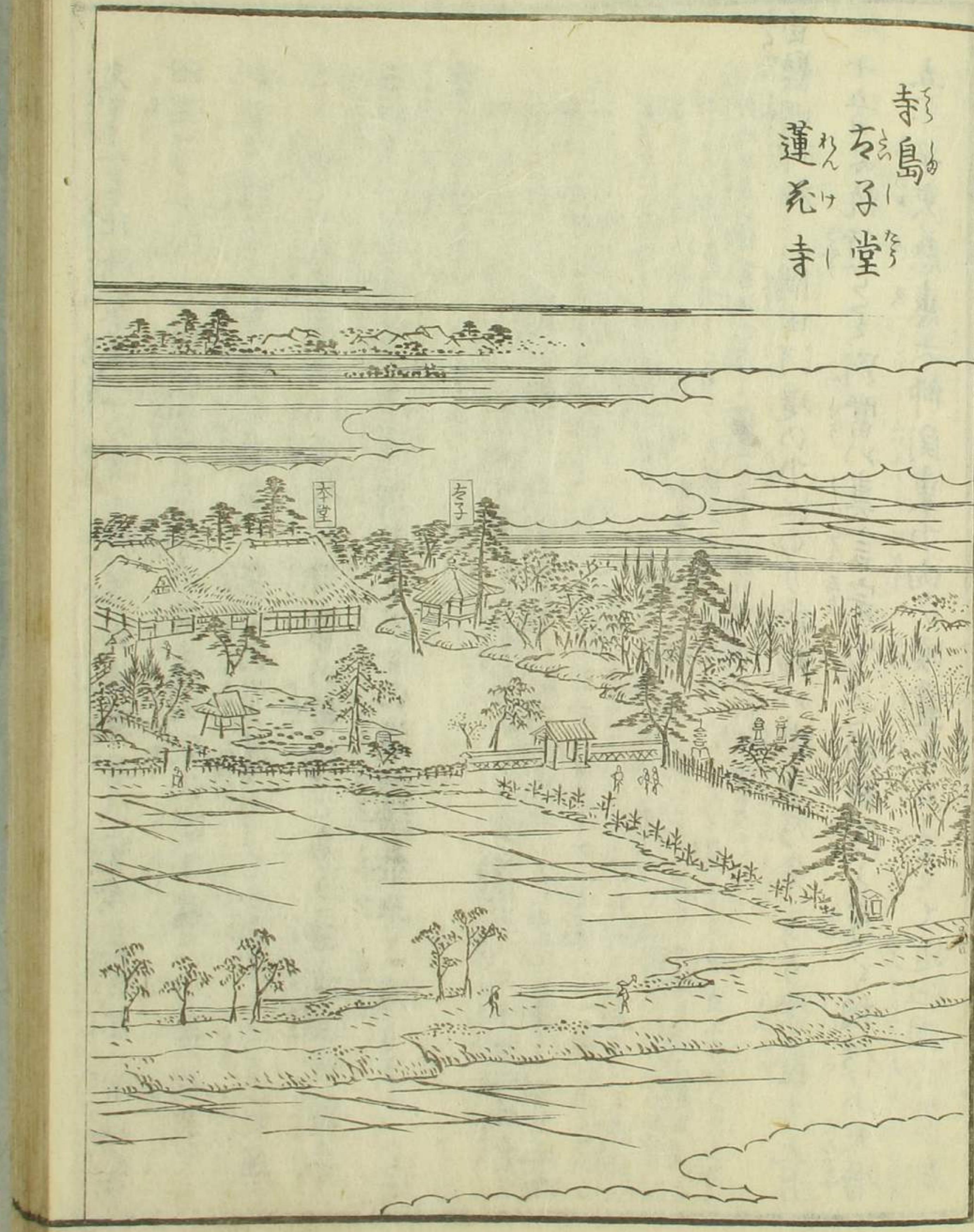
寺

寺



七八十九





寺島
左子堂
蓮光寺

若を消除せんとて懇々と祈願と或夜奉手の經時より靈尔而りて祕篋
を揭ひ即此祕篋小うりて其頃病を退す命を全すする者也く
からととく(今まにあらう)
件の祕篋をせし

相傳の寛元四年丙午二月下旬北條經時疾よ臨む其時舍才時頼
を側へ招ひて云く我疾難治うり死後よ至ら一宇の林苑刹を創
建一年頃念る處の聖徳左子の像を安置すべりといひ號て同四月
朔日享年二十八歳小一て逝去あり
東照公云寛元四年丙午四月一日今日入道立位下
行武藏守平朝臣經時奉手法名の安樂年三十三
とゆき證依時頼遺命を奉りて簾倉佐久谷よ一字を開き蓮華寺
と字すく此別号樂大禪定門と号す 即辦法印審範を以て尼山と
寺記云審範
深井法眼範守保さりと云されと簾倉
大日記云良忠とありてあらび行持詳く
又其後經時の子頼助此寺嶋を領せしり
出離の心頻り忽小刺髪弘安二年の秋簾倉の蓮華寺す代の
寺嶋少翁自尼山たり
佑同大僧正頼助と平セリ樹よ先よ審範と尼山とすとある
行はるべ一端家系是時のみ頼助といふと載す傍よ佑と本傳とほセリ疑ふべし佑の
ところれど恐りうるべしと頼助のことをりふん故あるをかくの處

え亨三年北條家滅亡の後も猶尊氏將軍なり官領基氏等崇教厚
田園等と附く御教書を錫し其後文明の頃下總の千葉両東と
別当時より寧戰止時より兵火の災屢々て當寺も方より荒廢
せり然よ天文年間小田原北條家の領地とすに頃遠山丹波守
奉行として寺領等を寄附せり天正の後四海泰平より

白鬚明神社

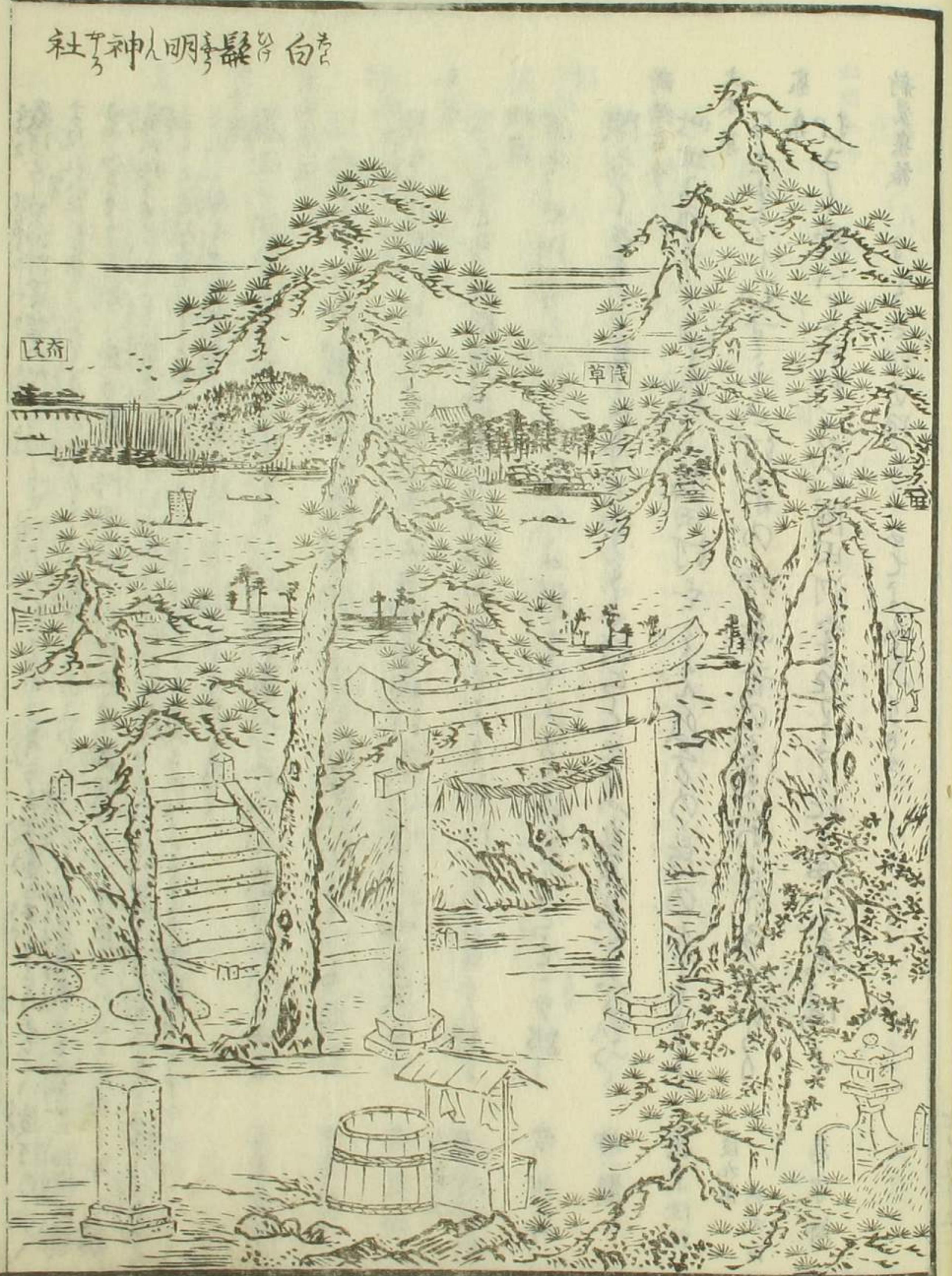
の後菩提の所より建立とあり則あるの權惠ある
隅田河堤の下にあり祭神の猿田彦命より祭禮を九月

八
行

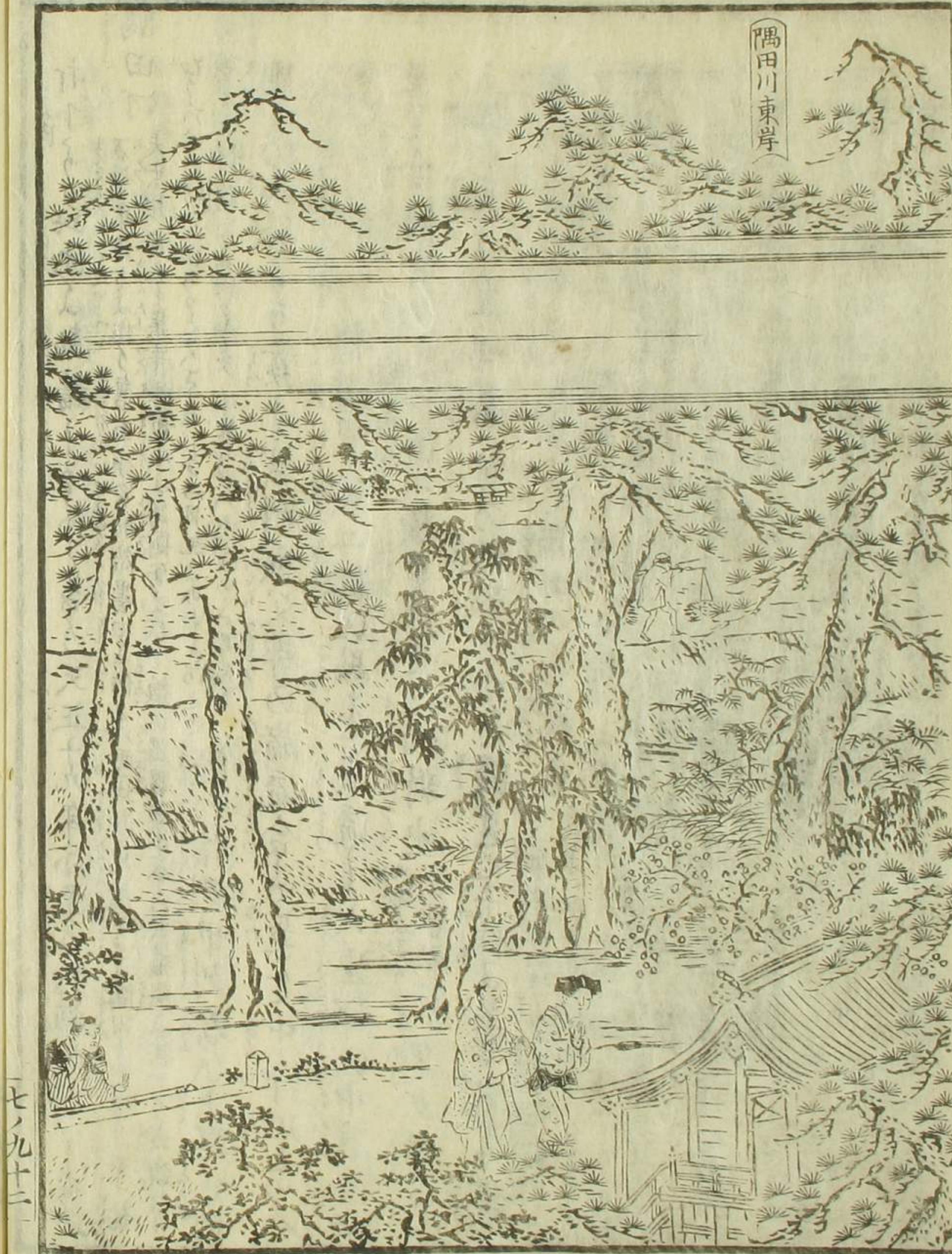
行せども別當の真言宗にて西藏院と号く板伊ノ天慶
えいこういんともうけいりふらうれい
慈惠大師閩東や向の頃靈尙よどみて近江國志賀郡

打下より此地の勧請一のみかとより天正十九年小至ア神領を附くのみ
隅田河夫本抄古今集井姓抄少よ當國をよりト總の國累と今ア武道國又属せり或說ア
モリオモリとひりとスミテトの日記あると云ふと源の信別甲別乃ヒ上野ホの
國の山谷より北流一武別林父郡の諸流域として是を中津川といふ
浦山川を又川あひら川標澤田今衣二郡の界を東流一大里郡の中懸谷小
至立分流と題を荒い流の横見比企入間新坐此地よりアめどちと
五郡小亘ア豊鳴葛飾の両郡の中を流れて千住より至る末より淺
草川といひ今是をさして隅田河と称シ
以上專並入の付ク不の説云々ふ
後て十一郡を経て周流する元廿四千里
或へ云隅田河古ハ千股又流る今中川と櫛瀬川との間に横たりて古隅田河と唱ふるゆア源
木の北の方にて其間へきたれ主今へ流れて小流と云れとも土人やうら古隅田河と平主里老云む
中川と流るて今ア源草川流合て流よ餘セトヨ依考ア古今大に違ひあらず一定
ありうるなりア既ニ利根川とも大河すて右より流るるヘトと云ふ又古利根川と云ふものあれ
是も後立ア水脈アリテ一然りうるに古隅田河の水流もあり古又違ふ事もありうる
按よ昔原考標の更科の記又武義と相模の中よりてめどく川といふ在五中川のいきことと云ふ
と云ふにけるアリテ中川の集水の角田河と云葉原家の集水と云
ありぬと云ふあられとも武義と相模の境より科坂あるゆえちるの坂と唱へてむしり河流あり
莫をきくと云ふ更科の記ハ婦女子の記行よりと云ふ詳るを以へて田まゐる所
たりまくを記したるまれにわからずまたゆるものもへてア元基法師り赤打山久誠行と詠せり并繕

白帝 明神人 神社



隅田川東岸



發行する。笑冲門署梨の紀伊の圓とと曰ふ者大和よりも考る。又矢基うそ子の後河のゆく
うちれ入だりしもらんを方葉集りと。より勅撰の體
かゆらるるを論へり。笑冲門署梨の代画記。又も隅田川のゆきとのべられ。又曰。師の書
寫れたり。中より方葉集の中全ての和子。四十八首。又草案のまゝの。書写。
正らさし放さし。とあり。本ねり。がいがいの集のまゝに。入られたり。ともも私撰する。と推知。之へ
されと論ふ。すと要とす。にてめらひ。其意をあくる。つ
古今稿

名の
おひつじと
お鳥かど
よしや

左系業半

あつらアタマ紙書て考験のすみに添付しておもむ

多基法例

五
新拾遺

權大烟云
画内佳

限ゆゑをあらすじ河とて鳥の名をともひ
新續古今

御製

夫木集
ことひすゑ河系の時鳥昔のさうのあとにあくひ

後九條
内大臣

も。里のやまの門の
新葉集猿すく河のほとりみてよみうりる

卷之三

すとひてゆくはとよすみて河鳥の名すもえことりりく
北岡記行 まほらたのちあ鳥城の翁巖 こういん
の 関田河内すひぬふるを

51
文貞公

古にこゑのよきらよ幽村わく西のみまらよ孤村わく水面
悠々と雨あゆひくや 晚あ曲江よ流と帰心行草を走ると
かくや荒波蒼穹のあよゆくり爲土堤落の西よあて孤頂もくよ

道のうの昔をとる開田村をめぐらし鳥のみの不
田畠雜記 ゆく陽田河の下よりにゆきそまゆく开田みく彼傳すととと轟
やうくゆきまく城とくれい夕の月あらありろくと舟をよしとあそ

竟憲

道與唯后

都鳥すゑ河ゑに舟のわれとた其人の名のをあらわす
むちひの安房上総のまのすゑりよしきさるト畠

古文氏序

追討の大役とて左衛門佐平直方右兵衛佐中原成道等を朝擇
應、一二萬三千余騎より發向と忠常其身の千葉の掛よ攝糸舍
陸奥權女忠頼を大ねど其勢二萬余騎を率ひすゝこの
南より陣を取同十五日官軍威道の合せ伊勢攻威侵直方の子
息阿多見四郎聖範共よ勢を合せ先登一方よ戰ひ故よ先陣の
左頼放走とされと忠常も残兵一萬五千余騎よ駆立られ官軍の
後陣ありす直方も本道の勢の落あくよ推立うとんあらと引
返り彼軍の兵卒を隼んとて隅田河原より陣を取と云

東鑑曰 治承四年庚子十月二日辛巳武衛相乘
于常胤廣常等之舟楫濟太井隅田西河精兵及三
萬餘騎赴武藏國豊嶋權守清光葛西三郎清重等
最前奉上又足立右馬允遠元兼日依受命爲御迎
奉向云云

北條九代記小文治五年七月十九日頼朝を奥別恭衡追伐の首途
ゆゑと云条やよ千葉の常胤八田右衛門尉知恵の東海道の大役と

して常陸や總両国の勢を率ひて宇吉行方を経て岩崎より隅田
川の溪より渡る邊下畠

須田河原 隅田河原み哉れ

夫本集

もとくとすの山原を躬行ひかひるわとて渡るるらん

西三位 李承

隅田河堤

深堀傍よもりあり然谷よ至る行程凡拾六里是と然谷堤と

云天正二年

小田原北条氏られを筑たりといふ

官府の余ゆくニ園籬芥の邊より本母寺の隣近堤の左右桃橘桺の

二樹を植えせられりれハ二月の末より孫生の末子を紅紫翠白枝を

交へされから錦鏽を晒し如く幽艶賞するに堪たまつて莖葉碎

木葉盛りの頃へ此上より花禮を敷り如く一時の壯觀たり

隅田宿

何れの地をりゆす今あるへかはと従古の奥別街道の驛舎

あるへ東艦よ治承四年庚子十月二日頼朝を左井隅田の両町を宿ら

そとりあわて今日武衛の御乳母故八田武者宗綱り息女改名を妻う

荒波根の

卷之三

七

卷之三

す

卷之三

卷之三

冷泉亭



陽田川渡

隅田川東岸

初
花

卷之三

八

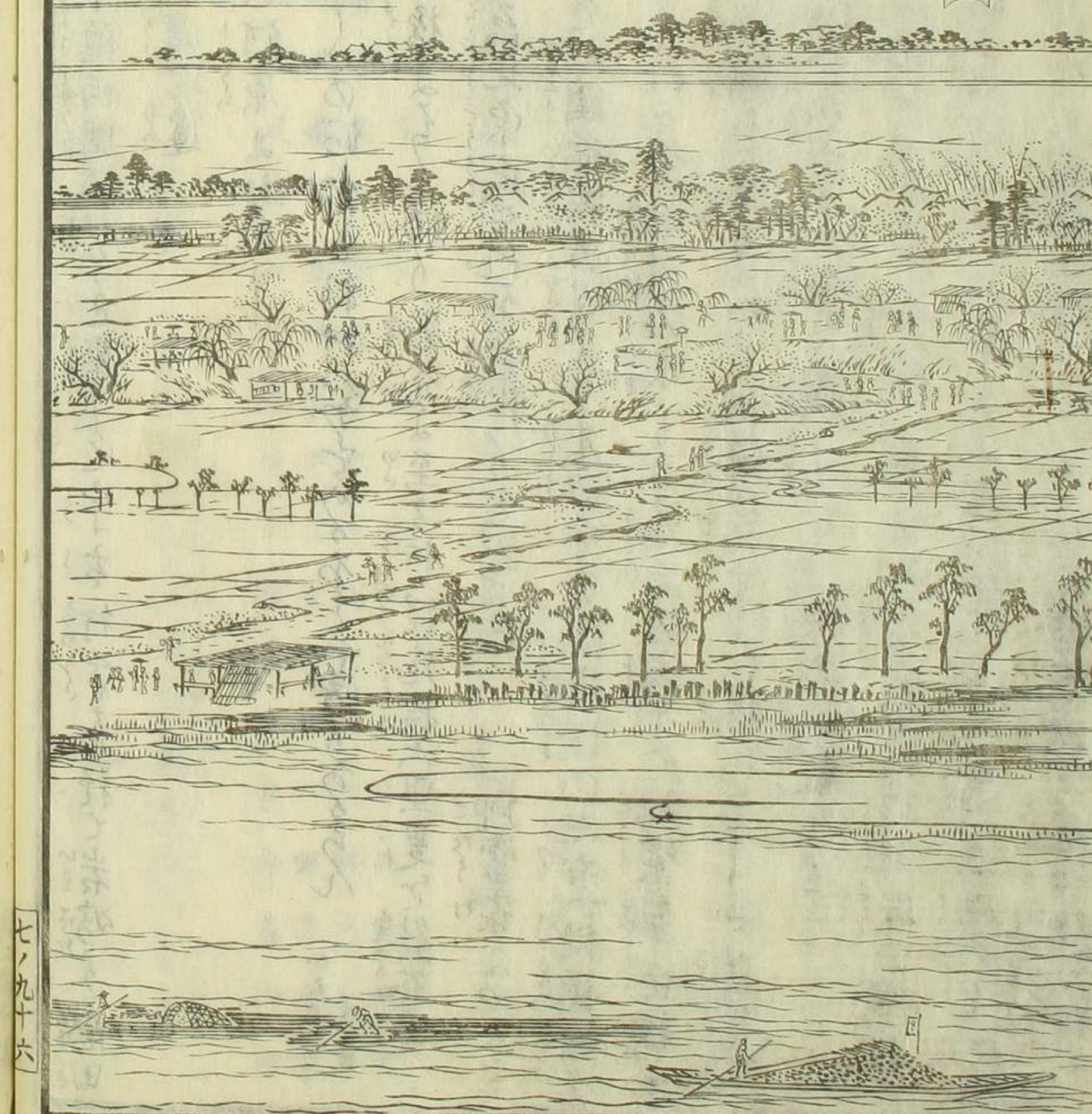
2

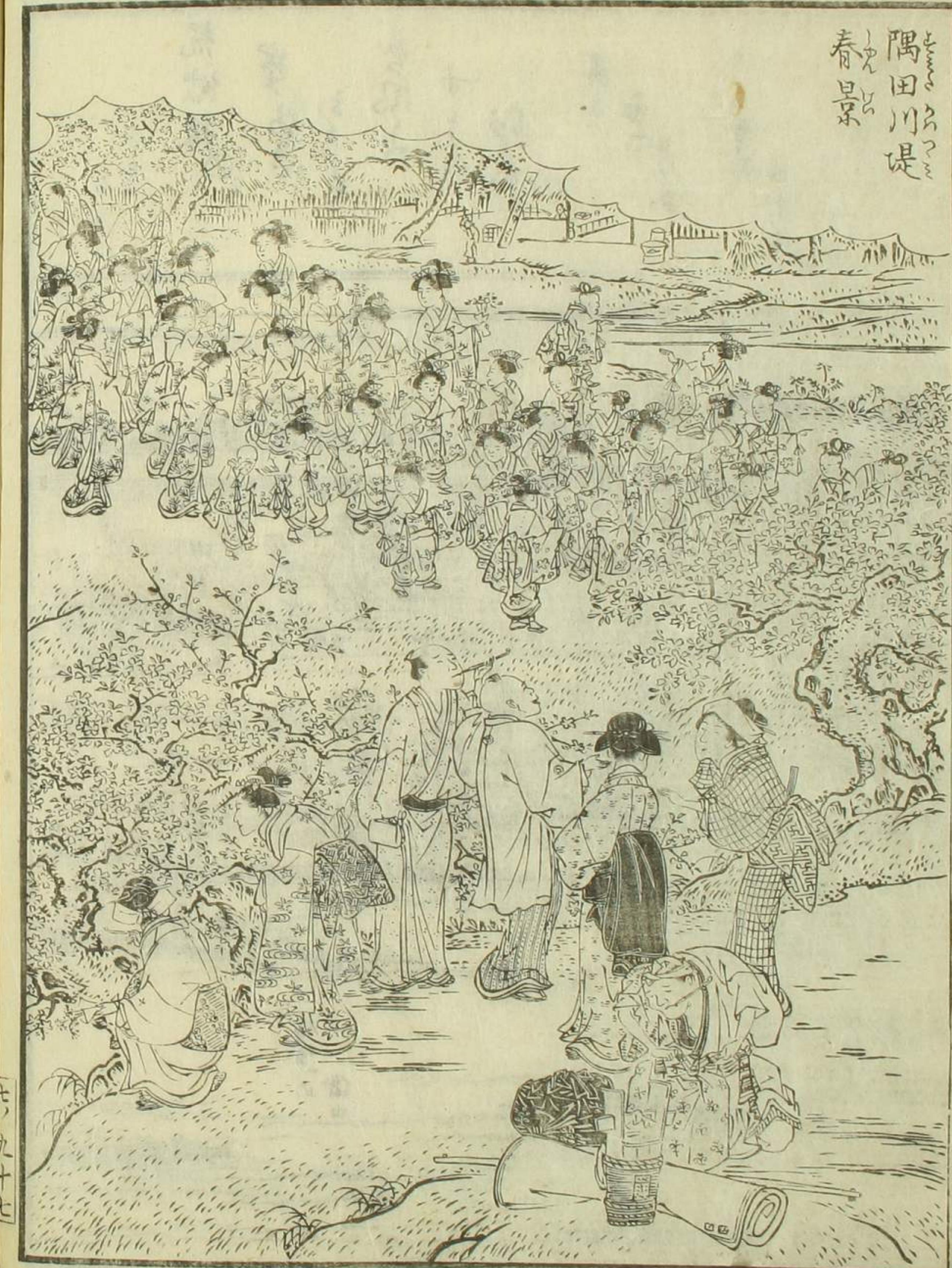
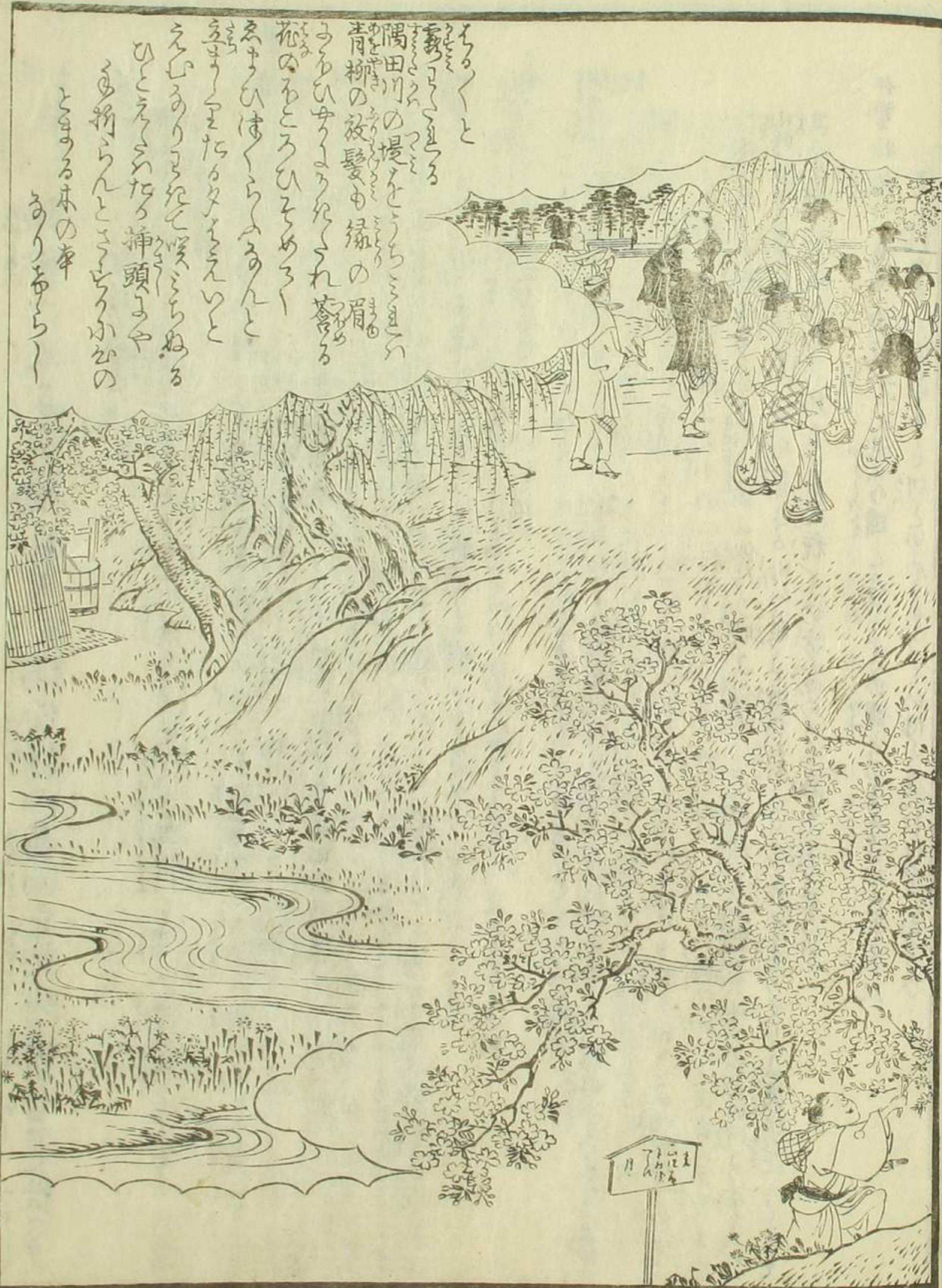
江家

卷之二

四

冷象
考文





寒江の尼
と號く 鐘愛の末子を相具とて
隅田宿小糸向と則御前よろて往す
を詠らしめりと云

鍾愛の末子を相見

辺あらん歎
舊本伊勢物語より京鳥薦塩草城鳥より作る真閑翁云く古本より鶴とゆふと草書より
講生のあらんとけも雲御抄薦塩草をうよ都鳥隅田町とも京をいたりけりもゆくとあるされ
たりこれに海深城の海志賀濱飾磨をうひ難波堀に高津宮輪田御跡より又みあらせり又和泉
式家より家集より和泉より又りてうきよ殿のものよ、やうりんへとあり又今著西集より院の御隨身秦
教子とくをあり殿上人よおせたるを成すよゆうけられてより又食物よりもあらそつうの虫をくくをせ
らすも本せぐあるて小河内作茂平くりとくすて飼せてと建長六年十二月廿日以前相団のあ小路の亭より
行幸あり一次の日相団主とくをせりて歎詠より傳へりるとしたかどく女房よりもうて
前二行をト取兼直もあれ、わおを上る

みどりの代よりひこうすく行するもの名とたうのは
隅田河のことをとくを賞めたりとえる處
飼てとくをうよまととくよ鷹と里とあら野の大さきのもの
按よがちく鳴の一名ゆて向鷹あるゆ決せり
毛冠の多く或人云此ゆよ大いの二種ゆ
海傍よあくて飛大るりの其声猫よ似たう好よ俗呼んて浪猫といふ則食料とてこの行よ虎の
小鳥あり常の海上よあくて風荒なるはれ島よほの教えりを求めまくとくよ浪ひをつゝと
其余不くにわれとも其地ようりて經くの方を言ひて名を異よせり

伊勢物語 あやめのす
と武が廻りちりふきの廻りのあくよとからん
ある。何ゆう夫をすまへ何とりのものうそのほどうにむれかもありひ

それ限りくとあても弟よりうれとひあつては廢すを無よのれ
田も教へどりのよのりてりくらんとするよ、まへおひゆ
京もあくよくうたすゆめくと餘時の向た鳥の箭と是と赤
鷺のあわせにあるみのうみあもひつひをくふ京都よりえある
あれはとあくよく後ちに問られ、豈うんとくとりふをきて
名み、あくひととくとくうんがるるあらふ人のありやれと

とよりりれり舟とそりてゐきにたり
真瀬島は都島のゆゑを向へありて云古今集み川の邊よもひりりとゆうてとそりてゆる
伊勢物語云ふものゝよもひりとゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて
元年も因よ在もあぐりれりの間の頃うれわくもやうとやらせんとも調を儀らん云々

脚雜記 やて隅田川の石とよびて中畠野原にて川上より
えどを都鳥取とぞとへまくひげのわにやうもんとうめ
すとらし鳥たよしきよ隅田川都恋一とありタ

通

あり人あらぬあれともすゞ河名もひづれんが多し
都鳥ハ所々よあれとも在五中ねの詠よくく
専此隅田川の景物
ととと故よせの詞人ひ客是を賞愛せらる其色向く嘴と足と赤く
と秋犬の見出准へるやふいゆりへり
あ

梅柳山本因寺
隅田村堤のりどにゆき隅田院と号を天台宗ゆ

東叡山小属を本尊の五智迦走より中より阿彌陀如来の像の至徳
ち子の作と云ひ貞元年間忠圓門署梨當寺を草創し 天正
合命ゆゑ依て 梅山影と 背の梅若寺と呼びを慶長十二年近衛國向信尹久武秀
國より之をひく時隅田河逍遙のやくて小當寺へ立すらせられ寺号を改
むつれひづみのり／＼小寺僧應羨と依本田寺の號を賜ひぬを纏ひて
本母寺と畫され 真蹟今修復あ寺オ一の什宝ととて
合老よえ／＼大虛名光院の號の本母寺とゆ頬もどりありと記す 庆安以後官府より
寺料若干を附せられ朱章を掲ぐ又寛文の始
大樹此也

北朝山濤字致遠赴召宋神宗問曰卿自山路來自驛路來濤曰自山路來上曰木公木母如何濤曰木

公方傲歲木田正含春
注曰木公松也木母梅也稱旨除中書云云
木母等緣起の跡ニ湖海新聞を引て梅を本母とするを舉り湖海新聞より支上の吏堅志の意より又青木氏著者草盧雜錄より此を載すり古今集の如く
雪うれい本海に花を喰ひりうらきを極と云ひてからま
千載集
妻の歌へ吹きの風のうなり音よ本海よ梅ともひひあるくれ
續古今集
年の内の事を本海のむとそぞ育を生とありふる事
崇徳院御製
紀友則

ひめこらまのす
梅若丸塚
木田寺の境内より塚上より小祠あり梅若丸の靈を祀る
山王権現と云ふ
御起ひ梅若丸山王の後より桺を植て是を印の桺と号く
御の枝と今若木
を強そくたゞ
例年二月十五日忌日故より大いに供養行わる此日都下の

四國雜記 わくくすゑの邊よりてまへおととを披講すと
よくの邊のあゆまれさ今はのことくにあわえて
古湯のゆけゆくみのすゑ汀まゝくらすもぬく袖
中頃一束戻ス向康道を國東ト向のこえ此ゆ
逍遙ゆ

田園雜記

よの嫁の
まめわざ
今のこゑに
あらえと

古様の
うけ行ひ

四百一十五

卷之三

道與准后



木梅水の着母神の官様

閨田川

隅田川東岸

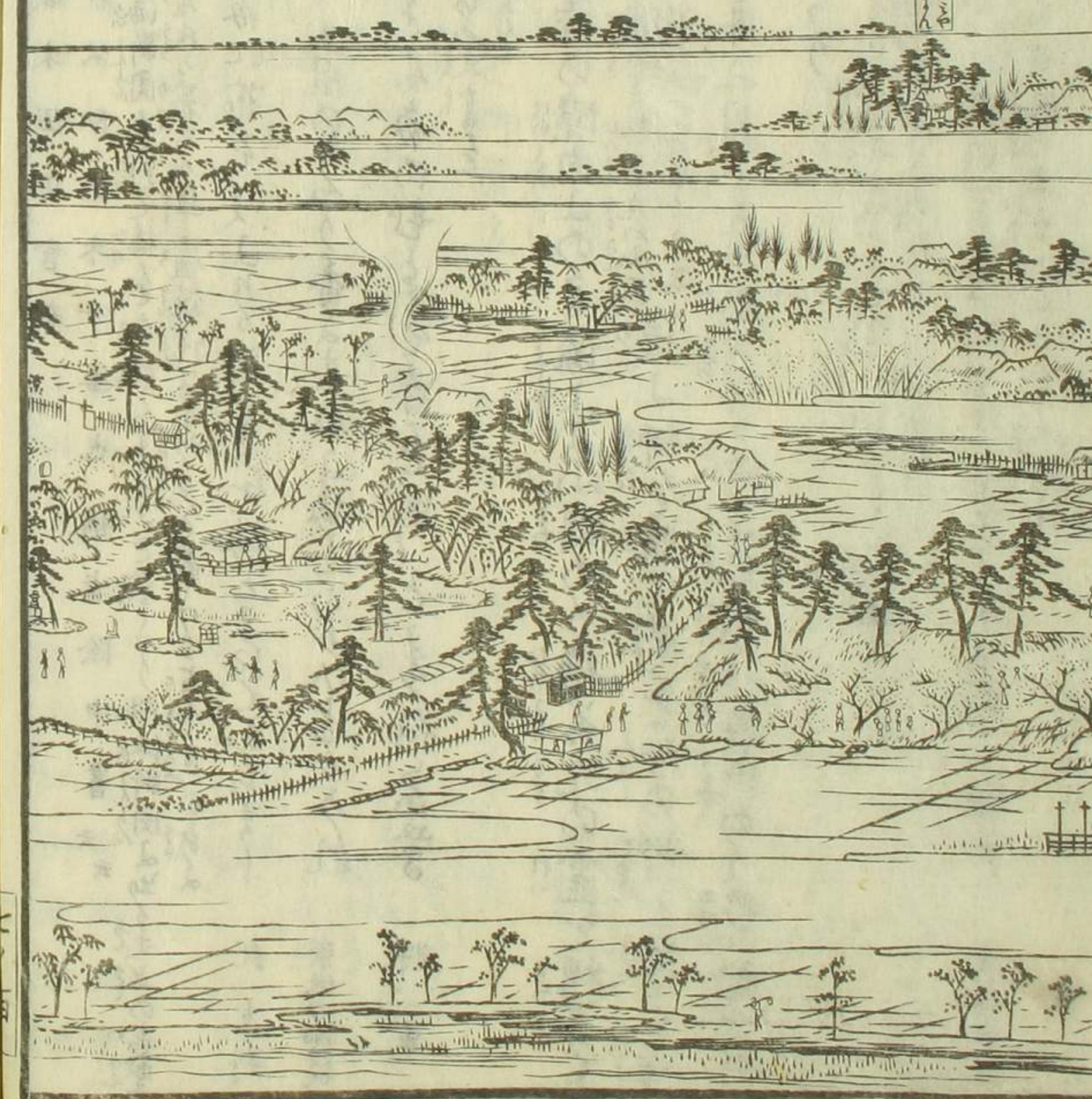
八
卷

隅田川東岸

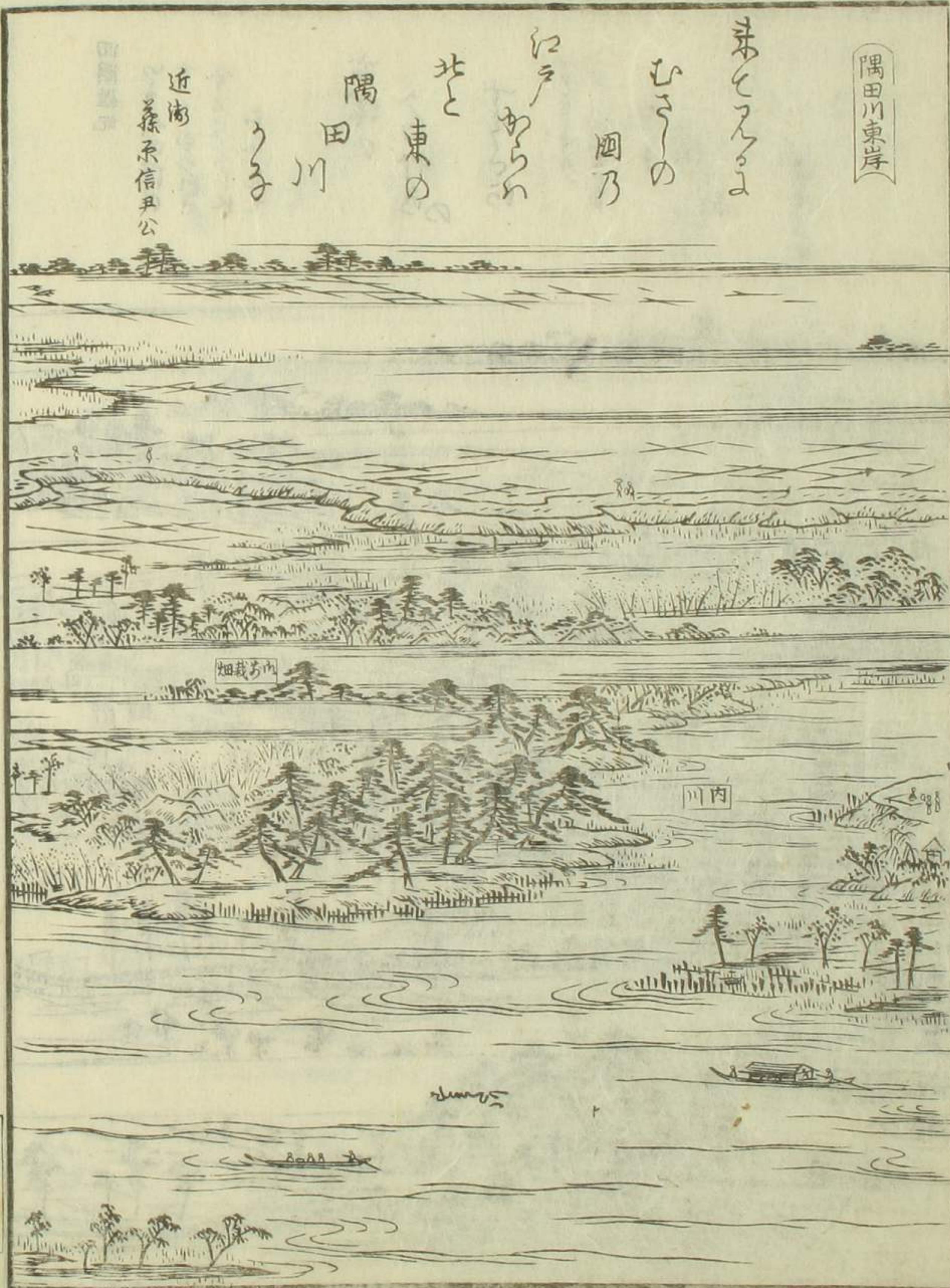
會の不

月の夕

其
卷



隅田川東岸



あそぶよ

むすの

ね戸 カらん

北と 東の

隅田川

うす

近海

藤原信尹公

まことにあれから一柳のちりのそを風流る隅田河をア

うたるを忍ひ坐て古塚よ都のやまとすすりの風の声

山体住人とあり

ちりゆとう一柳も朽くわかれくわくのそを古塚 良尚親王

此れがいは漫珠院宮冥東へ向ひて時既に移ひかへ頃の事と

つふ真瀬の絵冊今後木版に名書後人とのぞみあり

緑起

云梅若丸

ハ洛陽北白川吉田少将惟房卿の子

五歳めて父少

後生

七歳の年比叡の月林寺よ入て習業せり又其頃東門院といふも

松若丸といふ兒あつて日頃才の能を挑み争ひけれども梅若丸より

をとどもをとどもと彼坊の法師原に憤然とすむものと聞算の

事出未よれい梅若丸の潛小舟を遁きて北白川のあゆ帰らんと

吟ひて大津の浦小至る頃ハ二月廿日あすの夜うつ然よ陸奥の

信夫蘇ちといふ人商人小生のひ落ちうねよ欺きて遠近東の方

近海

信尹公

同緑起より惟房卿

嗣子を憂ひ因

吉の御神より後儲られより一見あれをめしめし梅若丸

寝坐すと一粒のこらすれとて梅若丸といふ號くらうとこそ

五歳めて父少

後生

七歳の年比叡の月林寺よ入て習業せり又其頃東門院といふも

松若丸といふ兒あつて日頃才の能を挑み争ひけれども梅若丸より

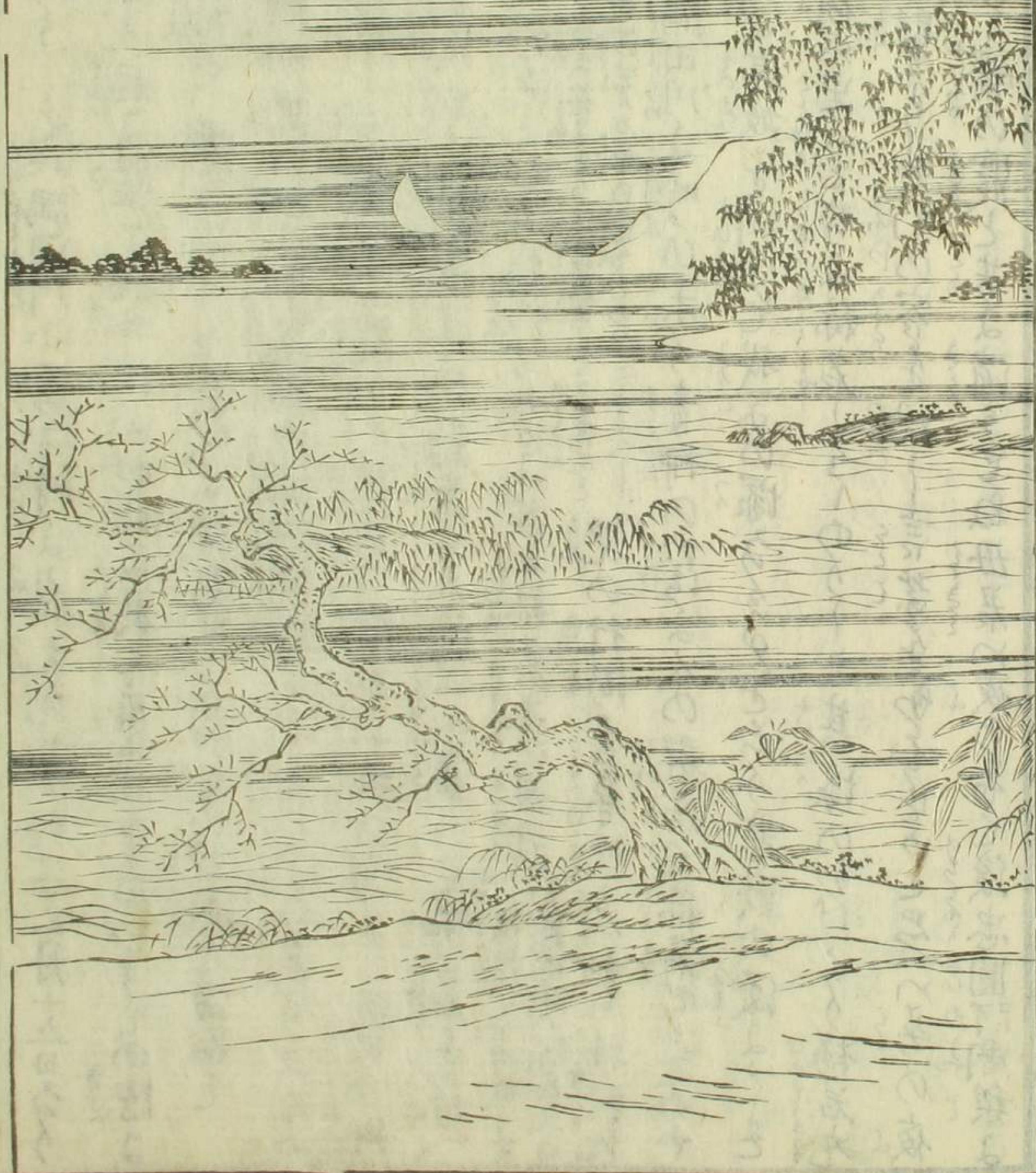
をとどもをとどもと彼坊の法師原に憤然とすむものと聞算の

事出未よれい梅若丸の潛小舟を遁きて北白川のあゆ帰らんと

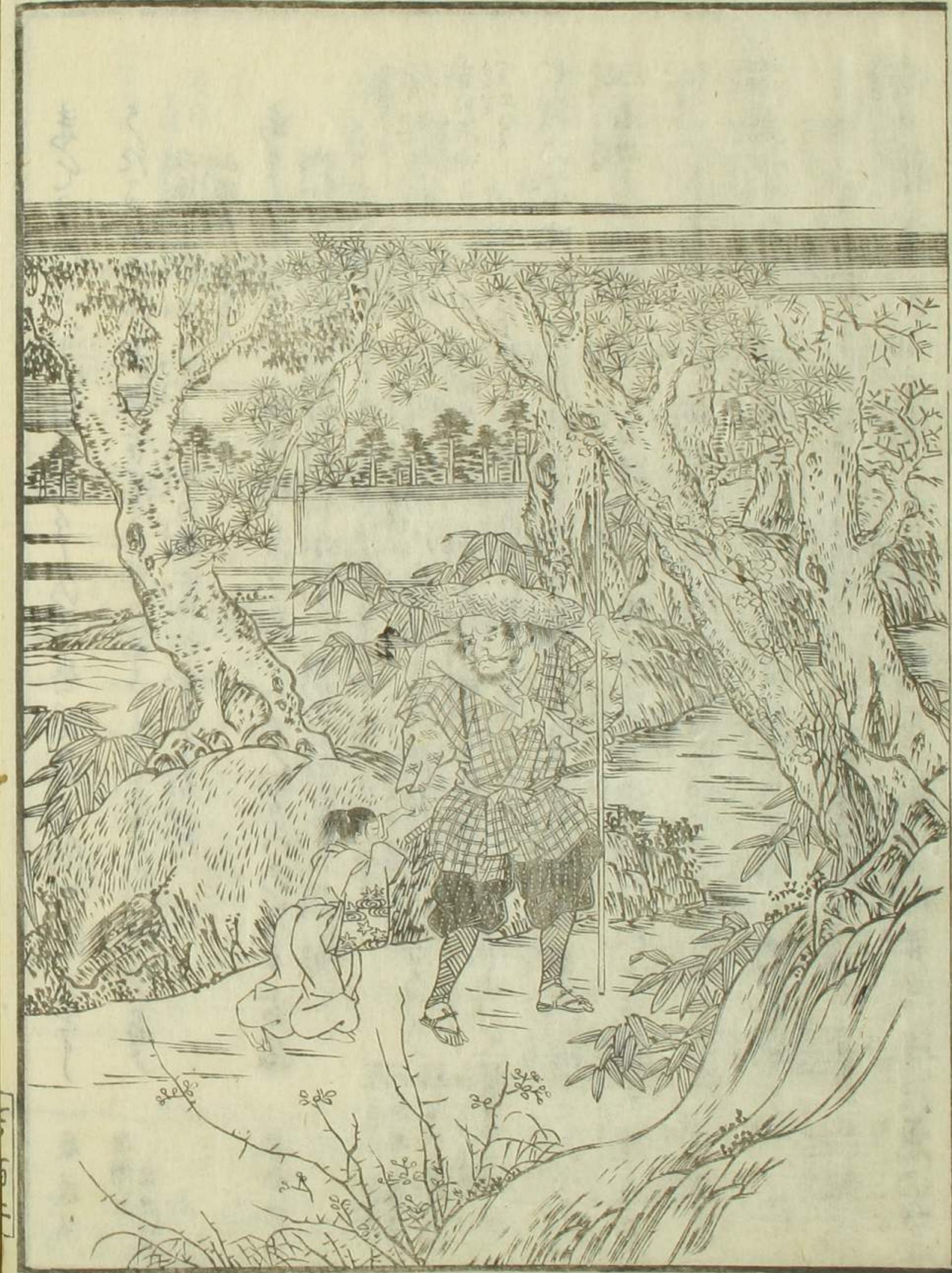
吟ひて大津の浦小至る頃ハ二月廿日あすの夜うつ然よ陸奥の

信夫蘇ちといふ人商人小生のひ落ちうねよ欺きて遠近東の方

梅若九七郎のう
比叡の月林寺を
のうれ出で花洛北
白川のあめぬえ
浦よ御りなう
輿陸の信夫のあお
とらる人めひとの
なめよさうあまむ
うれとくことの
閑田川よあゆる
ことのなえよ
詳より



國云人買蓑され
陸奥南故の産
ありと今も南
故の人其怨靈
ゆきとあむす
至らと夫はの
田形作に云氏の
人をすて
詠する如也



わきをからみて此隅田川小至る時より貞元年丙子二月十五日より
路の程より病より罹り此日殊少此地より旅してゆすりぬいまとの際よ
和子を詠と尊きとともうらへよ都鳥すゑ河原のあと消ぬと
此時出羽四羽黒の山より總坊忠圓阿闍梨とて貴き不ぞありくる
適とくに會へ土人と共よ謀りて兜の亡骸を一堆の塚ア荒あた桺
一株を植て印とて翌年の弥生十五日里人集りて佛名を種へ
児のうれむをとむらひ竹りて其日梅若丸の母君日彌起又花前と
さすりとめ或云花すとも後難髮とみ龜尾と
弓くそ六巻あさかの巻の巻かとありせむるへ美濃國野上の長者の
弓くそ六巻あさかの巻の巻かとありせむるへ
様して此隅田川より吟ひあす青柳の花よ人の群居て称名せりをあや
く舟へよ其故を向ゆて我子の塚うるをあす悲歎の涙よくも
りりか其夜の里人と共よ称名よのつみ其塚のかけより梅若丸
の髪髪髪と幻の容を況へ言葉をあもとりとくの夜ひめりくま
の晴天ゆけのとよきえの明易く囁の震と共よ消うとね母君の夜あもと後忠圓阿闍梨よ

見（あ）る。すとを告りて此が小草堂を嘗て阿闍梨をして小居じめ
常行念佛の道場とうて児の亡跡をそ吊ひある。
秋夜長物語といふ草紙の題くらかの本母寺縁起より其畧より後塔院の御宇北嶺
東塔の元徒は勸学院の寺相律師けいとより道學兼備の例あり（後西院の勝）
利養（りやう）のえつらして出離の勤勉りぬるを海（うみ）とありひはり罪就せんりのあい石（いし）よまくまく道（みち）とまづの
たゞ七日（しちにち）すす夜（よる）の寝（ね）み美（うつく）美（うつく）年（とし）をも後（ご）くわれゆ（くわれゆ）
これへ垂（たれ）護（ご）院（いん）の侍（し）坊（ぼう）の庭（ばしら）の門（もん）より入（い）る（ま）る名（な）安（やす）
御（ご）がよ住（すむ）て三（さん）象（ぞう）京（きょう）極（ごく）の花（はな）室（むろ）をたおほのすよ（すよ）梅（うめ）着（き）
律（りつ）師（し）のりとをすと（と）わらと（と）うよ（よ）が（が）をさま（ま）い（い）せ（せ）（せ）（せ）（せ）（せ）（せ）
くらひ（ひ）一（い）夜（よる）の笑（わら）を（と）ひ（ひ）り（り）う其（その）後の恋慕（こい）の心（こころ）（こころ）（こころ）（こころ）
御（ご）がよ住（すむ）て三（さん）象（ぞう）京（きょう）極（ごく）の花（はな）室（むろ）をたおほのすよ（すよ）梅（うめ）着（き）
律（りつ）師（し）のりとをすと（と）わらと（と）うよ（よ）が（が）をさま（ま）い（い）せ（せ）（せ）（せ）（せ）（せ）（せ）
くらひ（ひ）一（い）夜（よる）の笑（わら）を（と）ひ（ひ）り（り）う其（その）後の恋慕（こい）の心（こころ）（こころ）（こころ）
御（ご）がよ住（すむ）て三（さん）象（ぞう）京（きょう）極（ごく）の花（はな）室（むろ）をたおほのすよ（すよ）梅（うめ）着（き）
律（りつ）師（し）のりとをすと（と）わらと（と）うよ（よ）が（が）をさま（ま）い（い）せ（せ）（せ）（せ）（せ）（せ）（せ）

又謡曲橋川と/orもられよ似たり其異合ひ云後朱雀院の御宇長慶年中荒紫深よ橋と/orる
美が未ゆり一入高人よ勾引され常陸國儀形的神の社傍神宮寺ヨミサツクとあり今より其母
うくともあらてちひふの江邊を乗すまゝへ後ノ犯乱ノ時ノ寺生の煩也アリ余生の煩也アリ常陸國橋川よ
至ノ岸花煙漫と/or藍波ヨ漂ハシモと見え水中有子ありと流石ノ花をひきあけみをつとま
しれり里人等其故を向ひい念する事あれハとて彼犯女を神宮寺へ住ひ行橘あると遙
うれしこのあすゝ物うひの心よりとよもよかにそぞろくそぞろく母子の対面ともよ後もぢたわくとて枕傍り
より慈悲深りうれい直さま橋子の眼をとらせ母子ともよすくとくされりうれり東國院記云

按又橋在九の事蹟ハ先よ奉たる如く秋夜長物語多ひ謡曲の橋川等よ併相似く

捨花無盡藏詩註曰

隅田在武藏下總兩國間路傍小塚有柳

又同書曰 河邊有柳樹蓋吉田之子梅若丸墓所也其母北白

人云云

此謡曲の隅田川よと本母寺縁起の意よ相似アリト先よ起せり四國雜記等の
書云々右協とあり圓圓雜記ハ文昭十八年の記行すと寛政の今から凡三百余年を隔たる
昔うる其須え右協と唱へたりしきれハ其傳説のさうらぬものあり

内川 本母寺の後の方の小川をいふ或人の説よ徃古荒川後瀬川み投

流ヨリ時の古址なりと/or

御苑裁烟 同所内川を闊テ北の方の出側をりと作松の木立ありテ

頗美景あり

丹頂池 同所堤の下より池の中よ小島を築く往古 台命にありて

一日四一

此北の中嶋に丹頂の鶴と放ち飼しめゆひとより故小名とぞりとそ
庵崎 本母寺の北の方とも又い請化村秋葉権現の辺よりともつて

澄月お松又武藏國よ加へま木抄蘆葦草等よ下總國よ入たり同
名駿河てもあり紫の一本と/or方冊子よ小梅村の出側をす。後と云へり

是も怪奇うらぎと云々又同書よ昔本所の地入海よて刎崎殊小駿一

より一故よ五百崎よ作り一といふがれとも未考

新後拾遺

建保名研百首

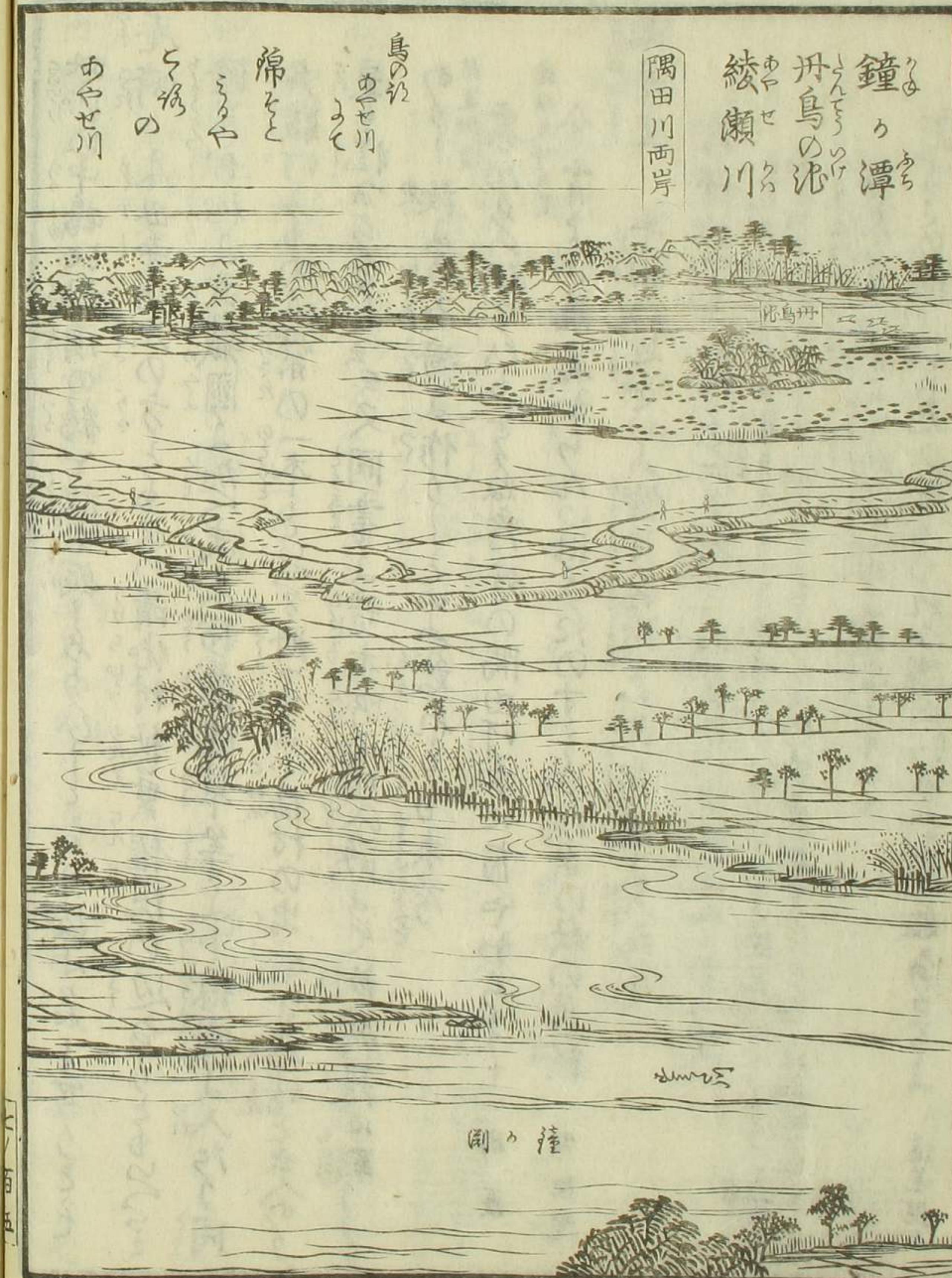
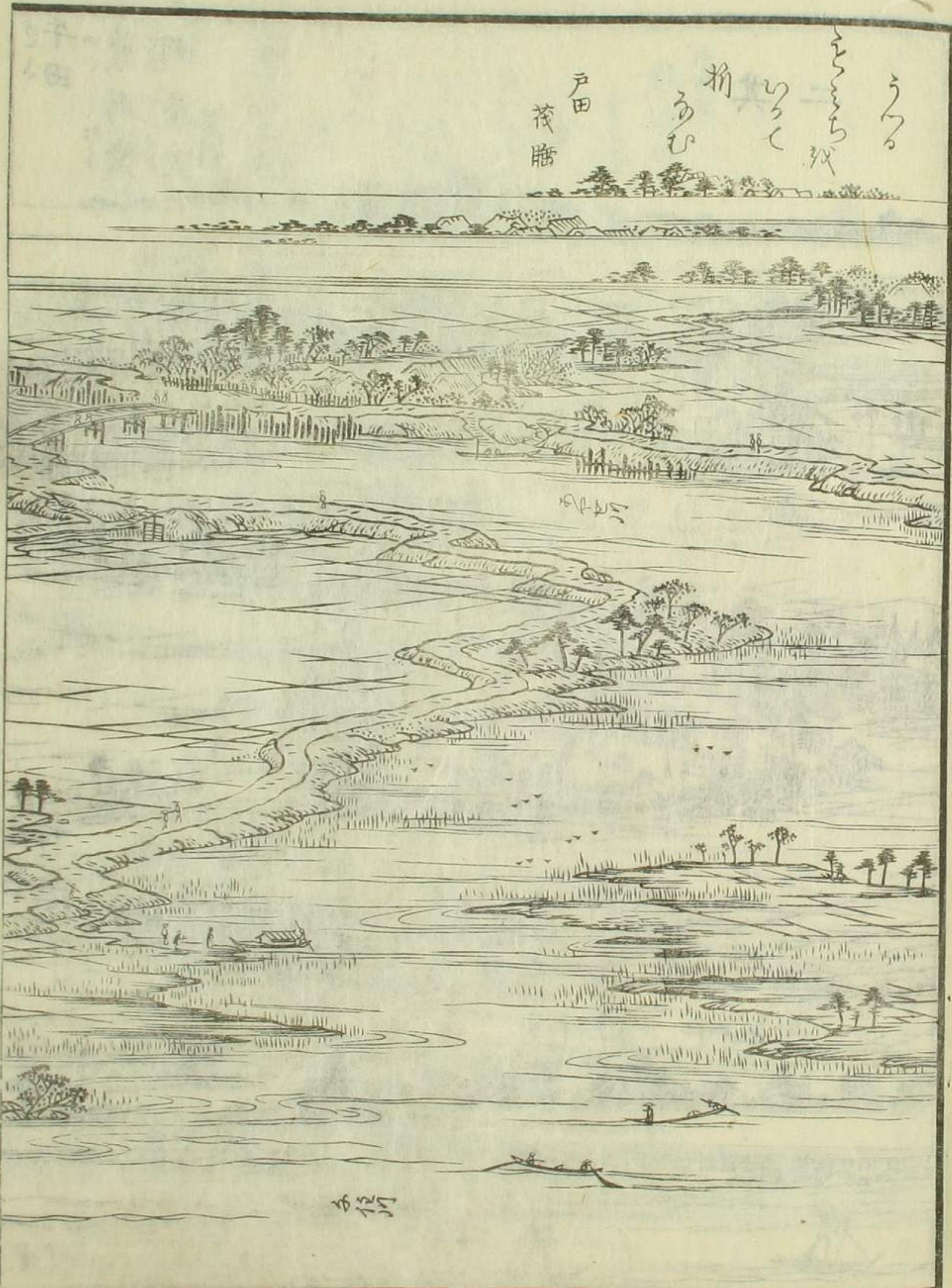
今宵やく誰翁やうんのゆきたのすくい京の秋の月新 順徳院

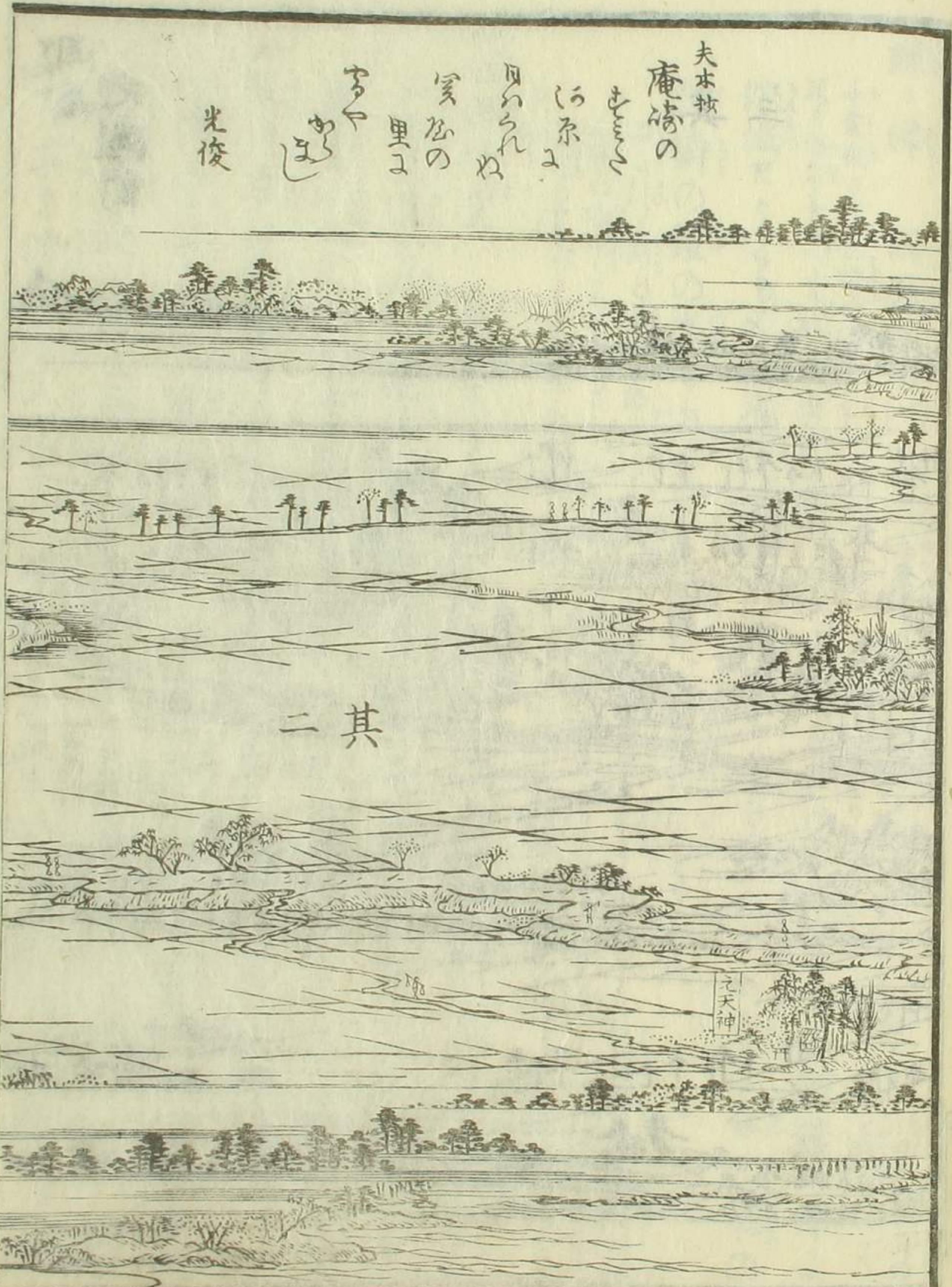
尚長

居屋里 牛田の辺をり澄月お松又武藏國よ入らる

居候のすくい河並に日のくまとね室の里よ有ややらま
あらわがお集よりか康永年九月鹿鳴の社よすうそりよ隅田川の下アリとて此渡の
上方よ河の傍よつだり里のありと云ひれりの室の里とぞうと有よハ海船もあらゆ海
至徳院の宮室東海下向の時此地よ逍遙一あひて

わるこの道よ室の里もあれゆ隅田川のあくぬあくめよ 道見親王





二其

光俊

夫木村
庵宿の

もとく

見れぬ

はる

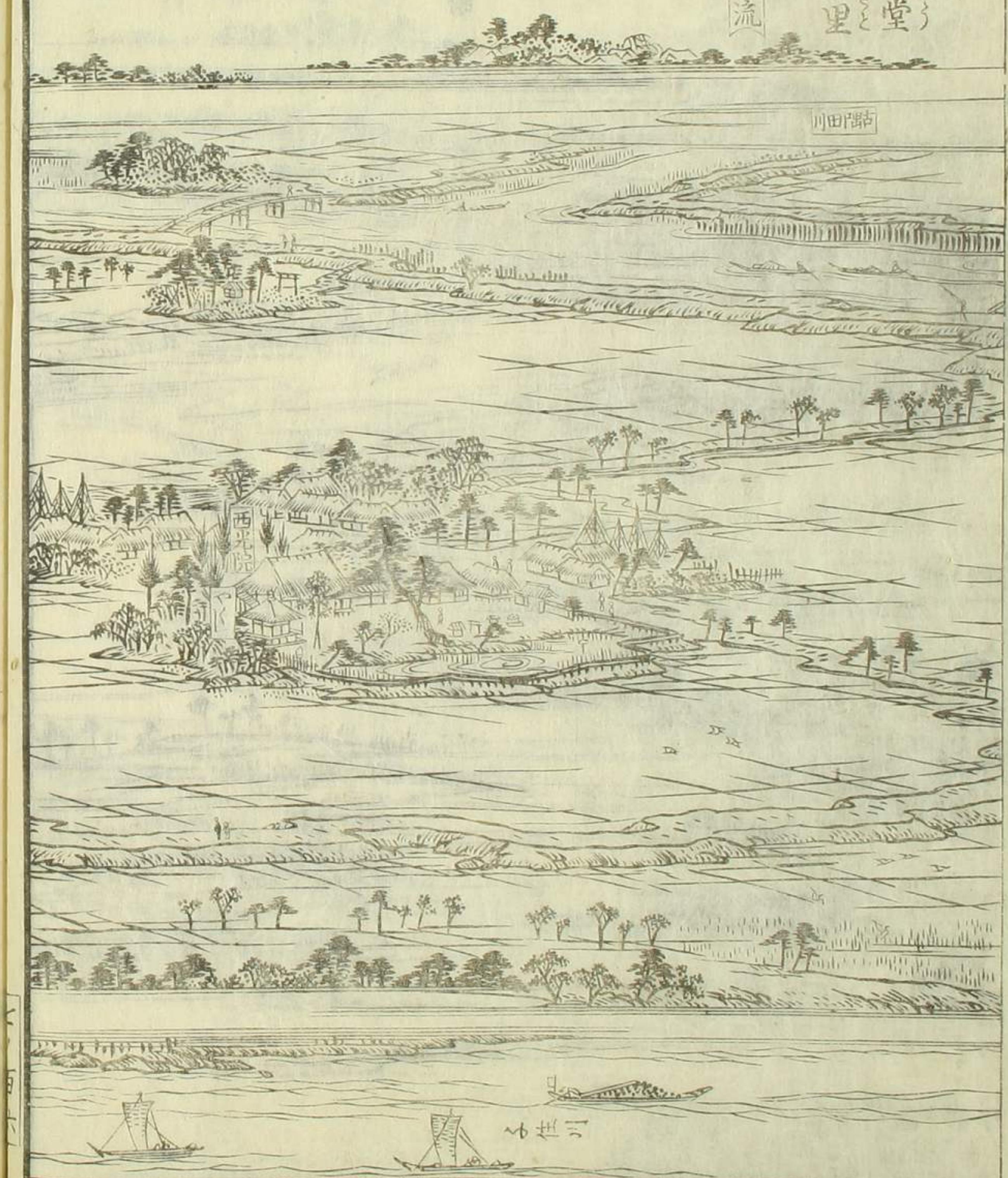
冥松の

里

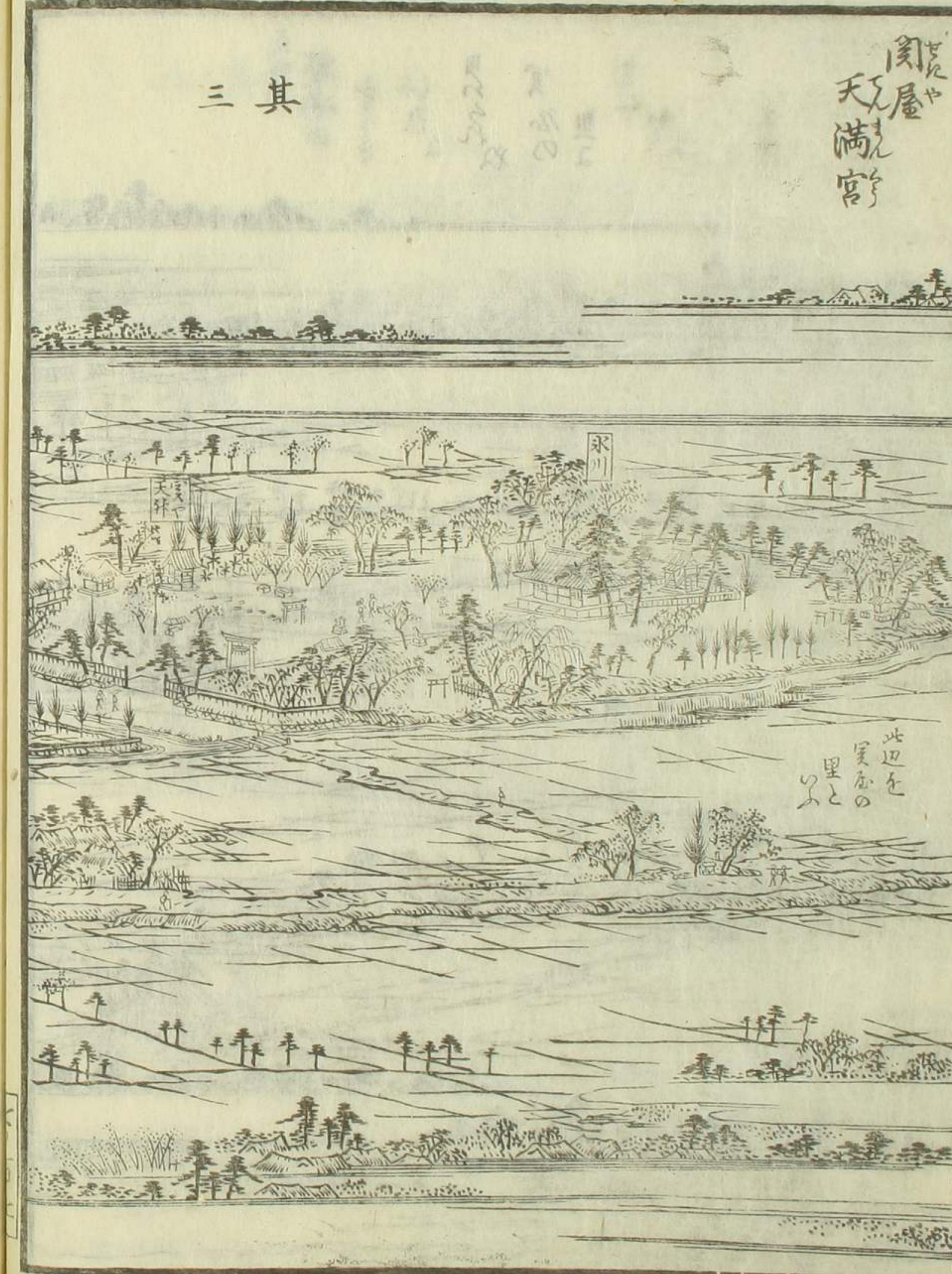
ちや
あほ

其二

牛込田
薬師堂
隅田川上流
川田門跡



其三
天滿宮



其三

鐘の潭

同所隅田川荒川綾瀬川の二保の石を立てて名づけ葉殿とあり不領の中下足立三保と

地名をかげ接するある傳云昔普門院といふ寺の鯨鐘此潭よ

沈没せりとも又橋場長島寺の鐘うりともいひ今兩寺又存する石の

新鑄の鐘の塔より此を載たす竹見是あらん

掛川側と名くる地同川と岩側の五徳巖とて石もゆじとそ往昔普門院隅田河

三勝の跡中よりと元和二年佐野崇眞地をゆくと今の龜戸村より移せり

甚頃事まつゝ萬鰐を地中に投せしと土俗傳へ橋場法源寺の鐘とするものと謂う

修くり

牛田薬師堂

本母寺うり三四丁北の方牛田村よりも真言宗よりてみ葉

山西光院と号く徳治二年丁未當國の領主み葉氏の草創岡山を

覺音法印といふ本尊の落成光如未來弘法大師の作といふみ葉久常

觀崇尊の靈像うりと云ひて靈驗著

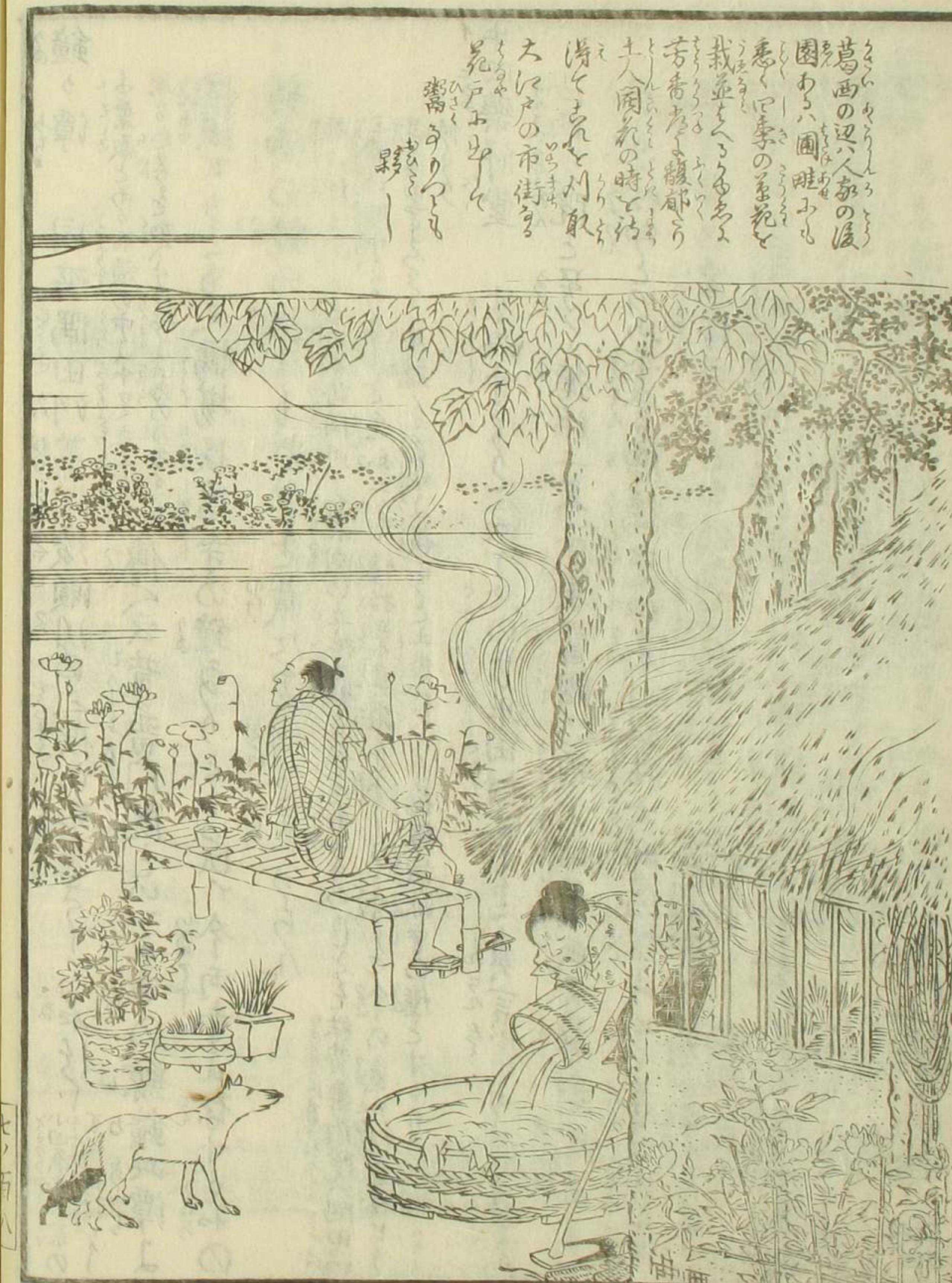
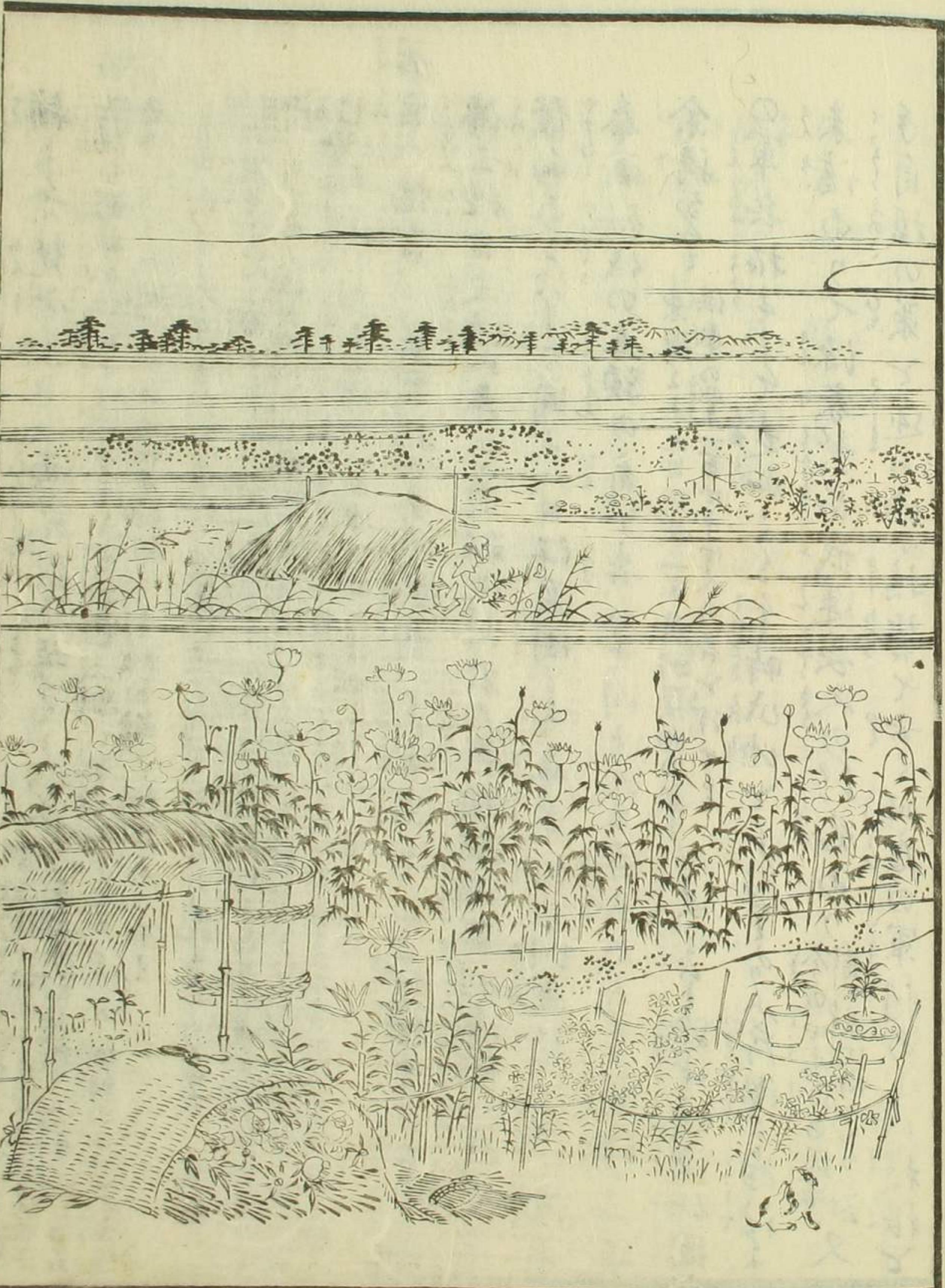
ゆひてらこの寺にひだり相傳のみ葉久常胤の寺裔又同五郎胤朝といふ者ありト總國香取

郡石出といふ地より居住し石出日向守と唱へ

此牛田村へ胤朝別業の地うり永和

隠栖もあらうとえんじうたうを

其末流修雪入道吉深よりて此牛田村よりれ位竟莊園の地を



轉て梵宇と西光院と号くといふ。吉原始小田原小糸方よ仕小浜森も
と楊ひ御獄令の官士に命ぜられ生質二原く大かしてりより圓教の学派好之

私共よりも延宝中牛田村よ隠栖一軒と号く私共あり云く

子たるぬオトムあり。一室の戸又同もゆりり花もありあり。常朝
戸麻ふとひる冊子をひし戸呂燈等よお学者牛乳を拂ひ又連あ師の牛乳經
へりみ人漁民物語の解七十余卷。名を名づく竈原也と云。元保二年己酉春三月
享和七年八月卒て葬と表葉の嘉慶寺。小糸もむじ同に年辛未。子師源慈父の功と頤て
主徳美と記す。寺の境内小石碑と建て後世より傳とあらわせり。

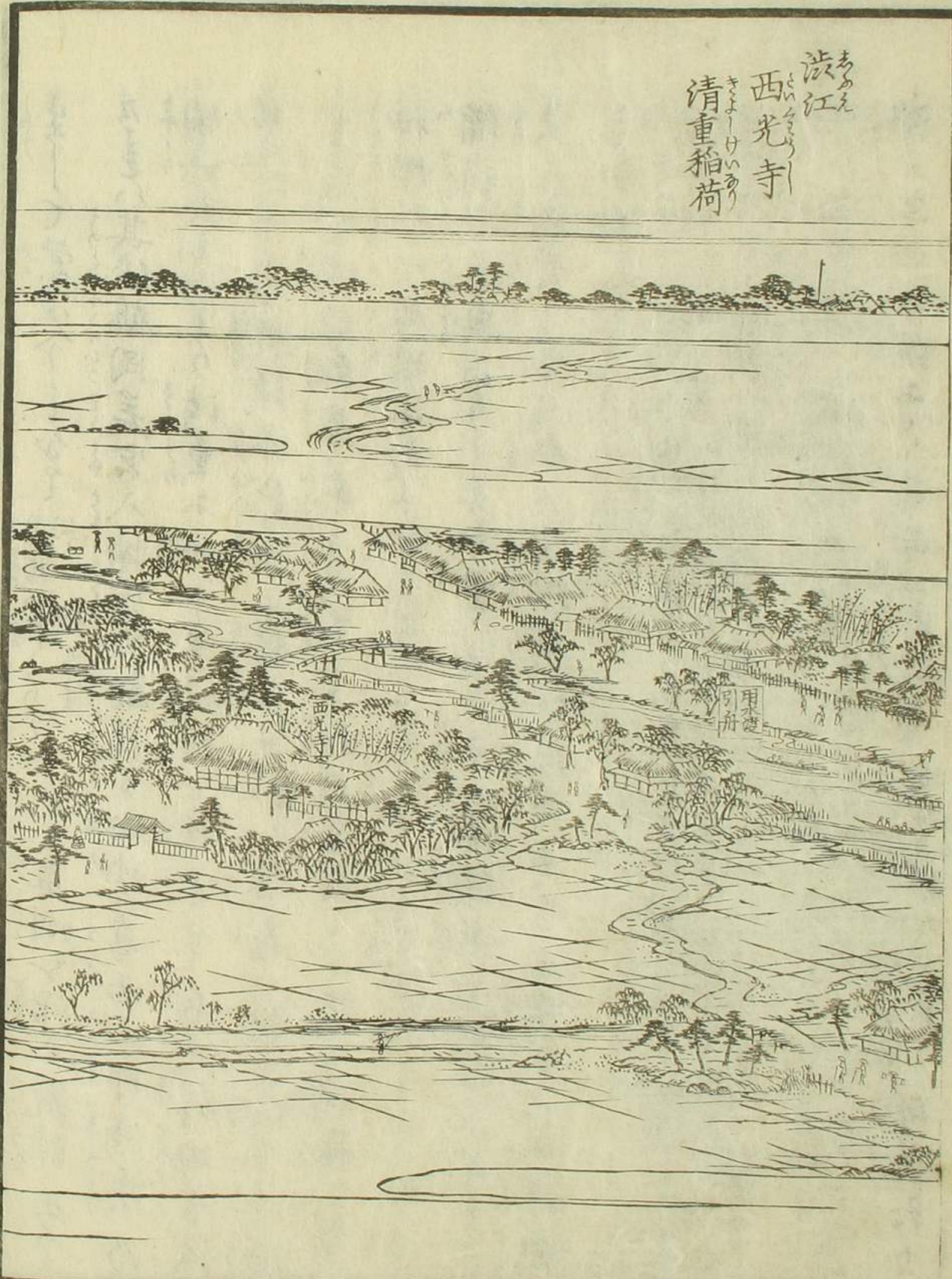
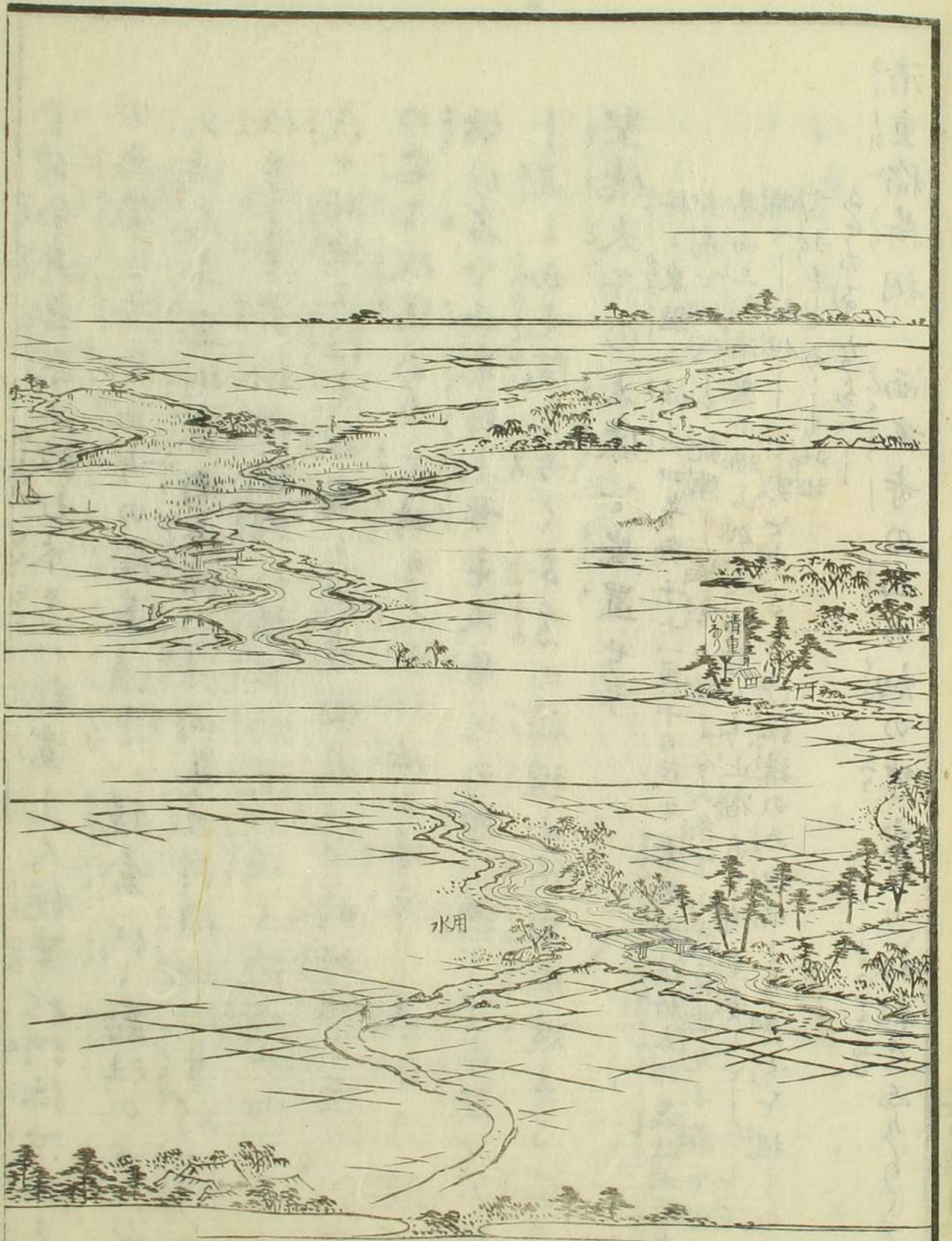
若宮八幡宮

若宮村もあり別當ハ高言宗子にて善福寺と号す。社

傳云往古文治六年己酉秋七月右大將頼朝卿奥州泰衡征伐とて
發向あり。同十八日伊豆國より專光坊の阿闍梨と立て渭よ
泰衡征伐の立願の旨と告ら。同十九日途出あり。至勢強よ。子
余崎も供奉の繫一百四十人の名と銘せり。支もと途中近國化圓
の軍兵折もとて走加もとを時ひ地とし。ひまゆの序澤よ高社
余崎ありて源家無昌武運長久の祈念あり。今之日本道の通済ハ
手自複の策と述小地小指撃て云く。此度の軍利あらハ枝根と

生て紫少く。其損が極うと竟ふ奥州を治く凱陣ある
乃き其後鶴岡若宮八幡宮と勧請を此地ハ葛西三郎清重乃
頗れたり。其後年代遠く隔まつてハ瘴霧ハ軒と侵し淫雨
寄附せらる。其後年代遠く隔まつてハ瘴霧ハ軒と侵し淫雨
神措朽て破壊ふゆびと天正の後。台命ふとひり伊奈
備前守再興あり。より重神く朱の玉籬光と章。アラモロ
夫も又昔とあり今ハ古松老杉矯々と寥々とる社頭
とある事ある

法華經一部一巻。其丈漸く字をうりありて巻くる。圓山房。渡一八九分
甚奇吉あり。寺僧の説。金泥。金泥。細書。サム物。書。書。本
ひへとえ是非ともも。所領小淵江の村名と云。一加へてり。往古、
超越山西光寺。涉江村ふゆり。小田原北条家の古文書。小山中内通介。五位下壹岐守豊島
淨土宗の寺院ゆく葛西二郎清重。權頭清光の子あり。岡基たり。



一今天台宗小改む本尊ハ親鸞上人親筆也阿弥陀如来
の画像と安坐當寺の開基清重ハ鎌倉代勤仕の士みて
文治五年奥州泰衡平治の後同年九月彼地の寺に藏ふ
任せき實朝卿鶴岡八幡宮拜賀の頃も隨兵ふかくゆふ
代々此地より住む親鸞上人東圓遊化の時此地より至る清重
の宅より投宿ありて時上人の弘法より歸依し弟子乃禮と
儲け名と西光坊と号を又居宅の地と轉じて寺院を營建し
一直より西光院と号く本尊の脇壇を清重彫造する所乃
聖德太子の木像と安置せり

按小東盤小治義と伐して凱陣小歸是年庚子十一月十日戊午常陸國佐竹太郎義政同冠者
葛西三郎清重小錫山今夜宿泊止宿あり清重妻女と一寺塔と申すと清治構の外所より青女と招くの由
言上まことあらず此地

清重稻荷祠

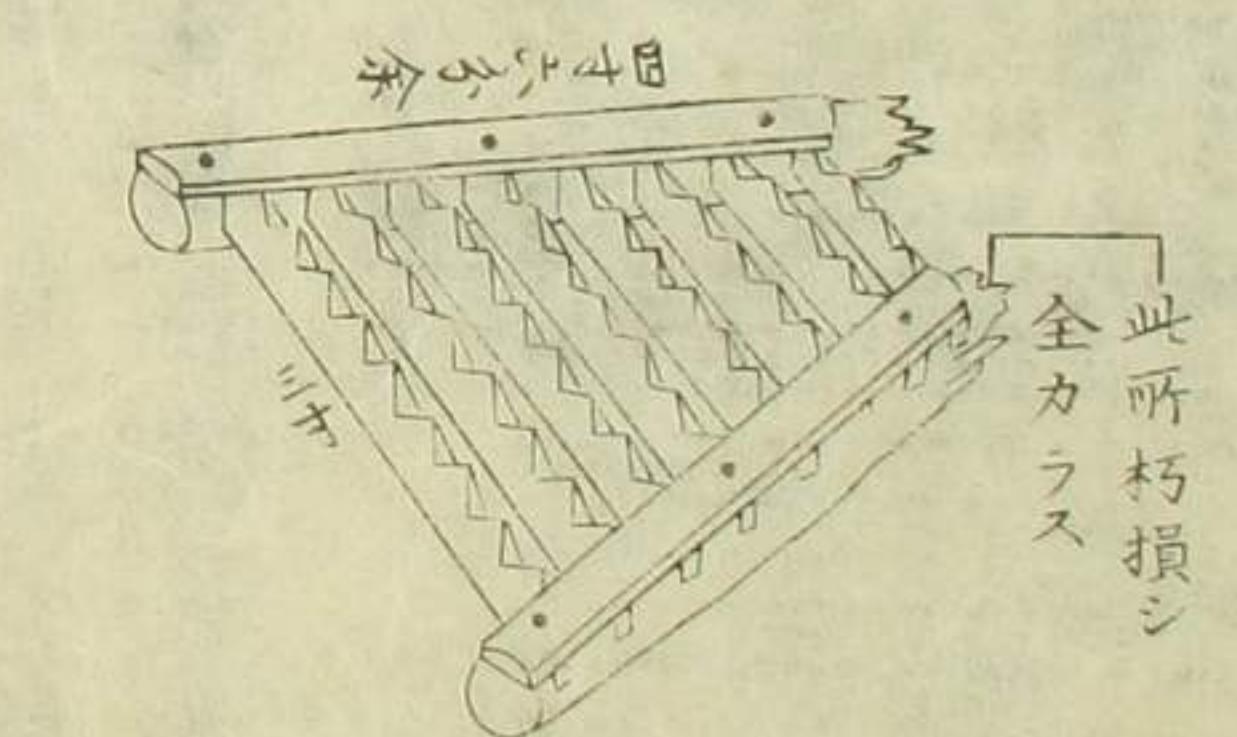
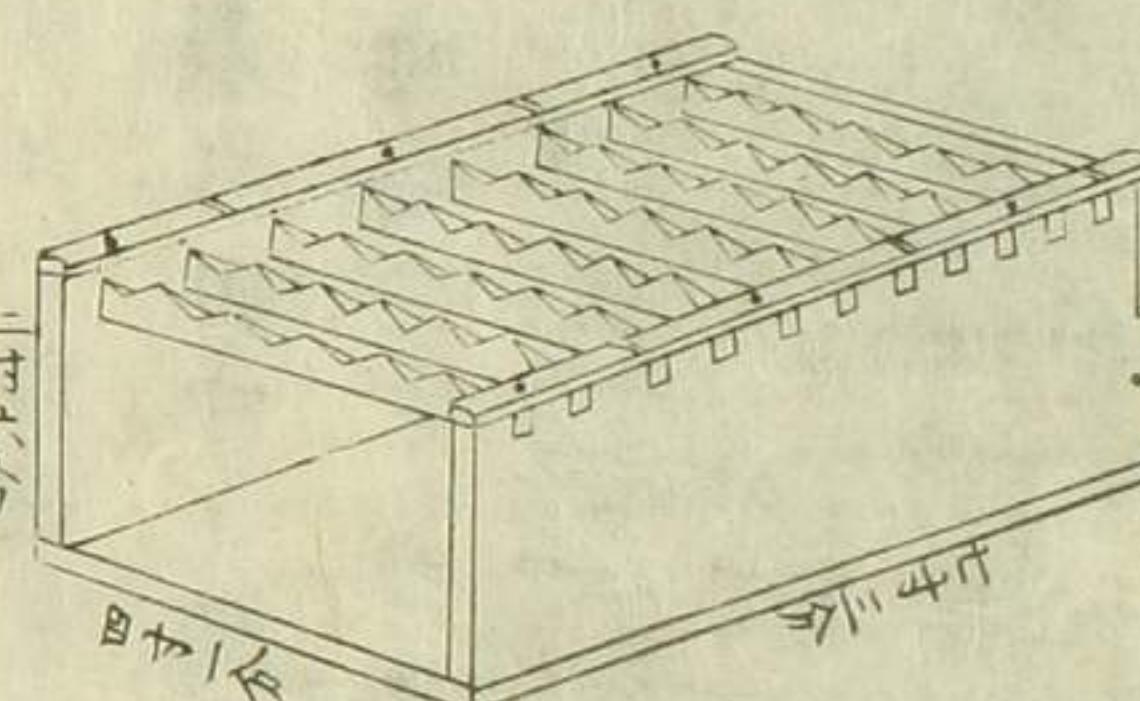
西光寺の西の畠の中より松杉生焉り

按小北条九代記より太平記等の書小青底左衛門伊豆國の住人大場
十郎近郷の後裔か近郷某の乱より逃亡ひ入て勳功ありられ
藤綱ハ藤満の妻腹ふ生れて京子なりと云ふある所に青底莊上總國から此地城
上總モ青底莊より東洋小見あれしを坂東者へもとより定め此地城
青戸と唱へ来るも既久して藤綱うやしき跡と称する地かと現然と
それへ是れは此地の農民淺右衛門とよぶりの是と傳傳へ賞まきりのふもあり
古製山葵擦此地の農民淺右衛門とよぶりの是と傳傳へ賞まきりのふもあり
さきとた上古質朴の風俗と想像するに依る所也

古叢下此所ハ葛西三郎清重の墳墓の地とし今稻荷祠
勸請も一年の其が子此塚廟より土中より石碑有れ主蓋と
争り當時樋の中より丈三尺五寸余りの弥陀の木像あり胸中は佛あり
丈八分ちうの座像あり今西光寺より收もる餘武具のたぐひもゆかりといふ
底左衛門尉藤綱第宅舊跡 青戸村少振り土人云昔ハ青底子姓と
永祿二年小田原北条家の所領役帳小遠山丹波守所領の内
葛西青戸の号と注せり今割く二村と西青戸表青戸と唱
御殿跡とも称を今猶四方五六拾歩の所除地にて老杉矯々
たる中より小祠あり此村農人の中より廊の誰陣屋の何某ると
字小唱ゆるやうて皆其時世より呼來りと云ふ
十郎近郷の後裔か近郷某の乱より逃亡ひ入て勳功ありられ
藤綱ハ藤満の妻腹ふ生れて京子なりと云ふある所に青底莊上總國から此地城
上總モ青底莊より東洋小見あれしを坂東者へもとより定め此地城
青戸と唱へ来るも既久して藤綱うやしき跡と称する地かと現然と
それへ是れは此地の農民淺右衛門とよぶりの是と傳傳へ賞まきりのふもあり
古製山葵擦此地の農民淺右衛門とよぶりの是と傳傳へ賞まきりのふもあり
さきとた上古質朴の風俗と想像するに依る所也

舉るの土人此番と青底に工夫ふせりと云ひれども其可否ハ論をあり
たゞ今も陸川邊の農家是と用ひる所あり其圓左の事と

全形圖のとくねとりゆ
製を竹の厚きと鋸の歯乃
ちも横板の上より同く竹の
縁と打付て動うねすみ
物たり或人乃説
菖蒲革よかのあとき
紋ありと俗よわきひあらーと
此器の形と借てひ
生せしゆんとはあくん欲
又下よ圓も木毛川ふ作
用うして形まことく異なり



「此所朽損シ
全カラス

木下川藥師堂

木下川村小あり土入キ子水と唱ふ或ハ井水とじ又龜毛川又

作る小田原北条家の所領役帳より朝倉平次郎

トの入の所領の内此地名

青龍山淨光寺藥

王院と号す天台宗

二十六分

木下川藥師堂

傳教大師の作昭土日月十二神將の像ハ惠心僧都乃彌造ナリ
本堂前左の方ゆあり廣智達尊の如翁とまつる来由ハ本尊綠起の條下詳

記

本堂不動明王の像ハ慈覺大師の作垂迹の姿ハ老翁の木像乎て荒木作

りた異相

あり

木下川

村

小

有

り

て

は

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

る

事

な

い

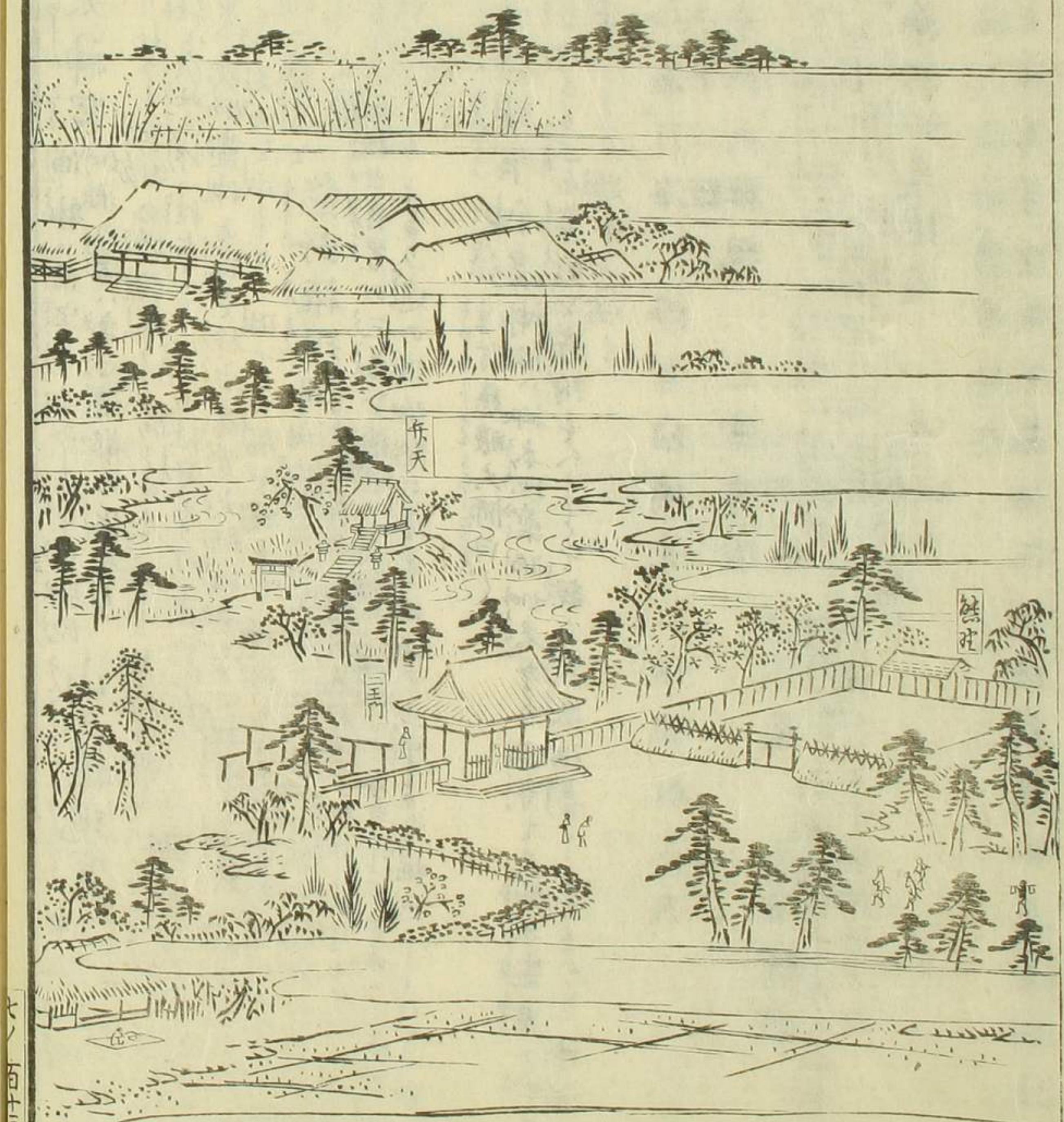
る

事

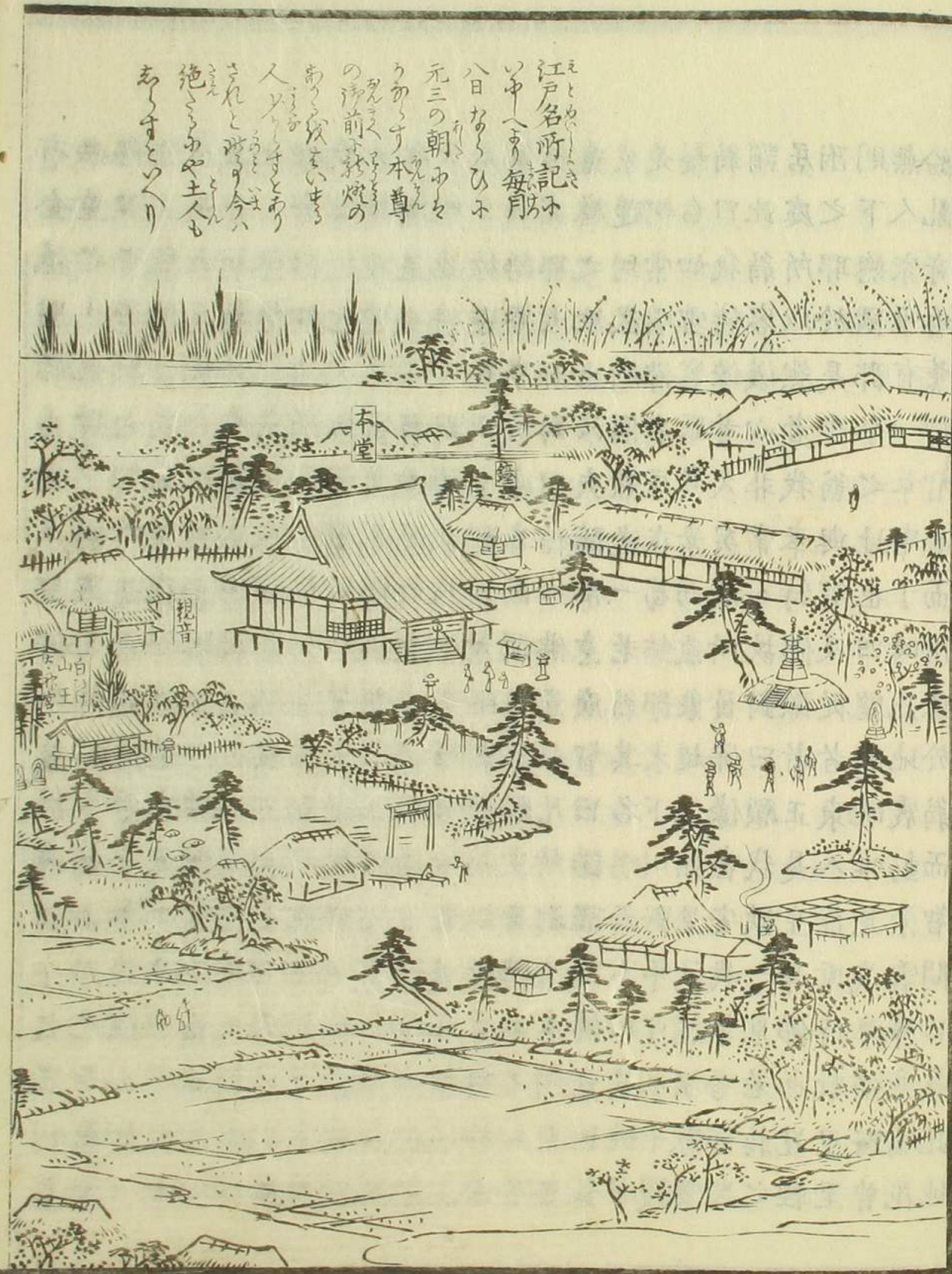
な

い

木下川歌や
薬師堂



百十三



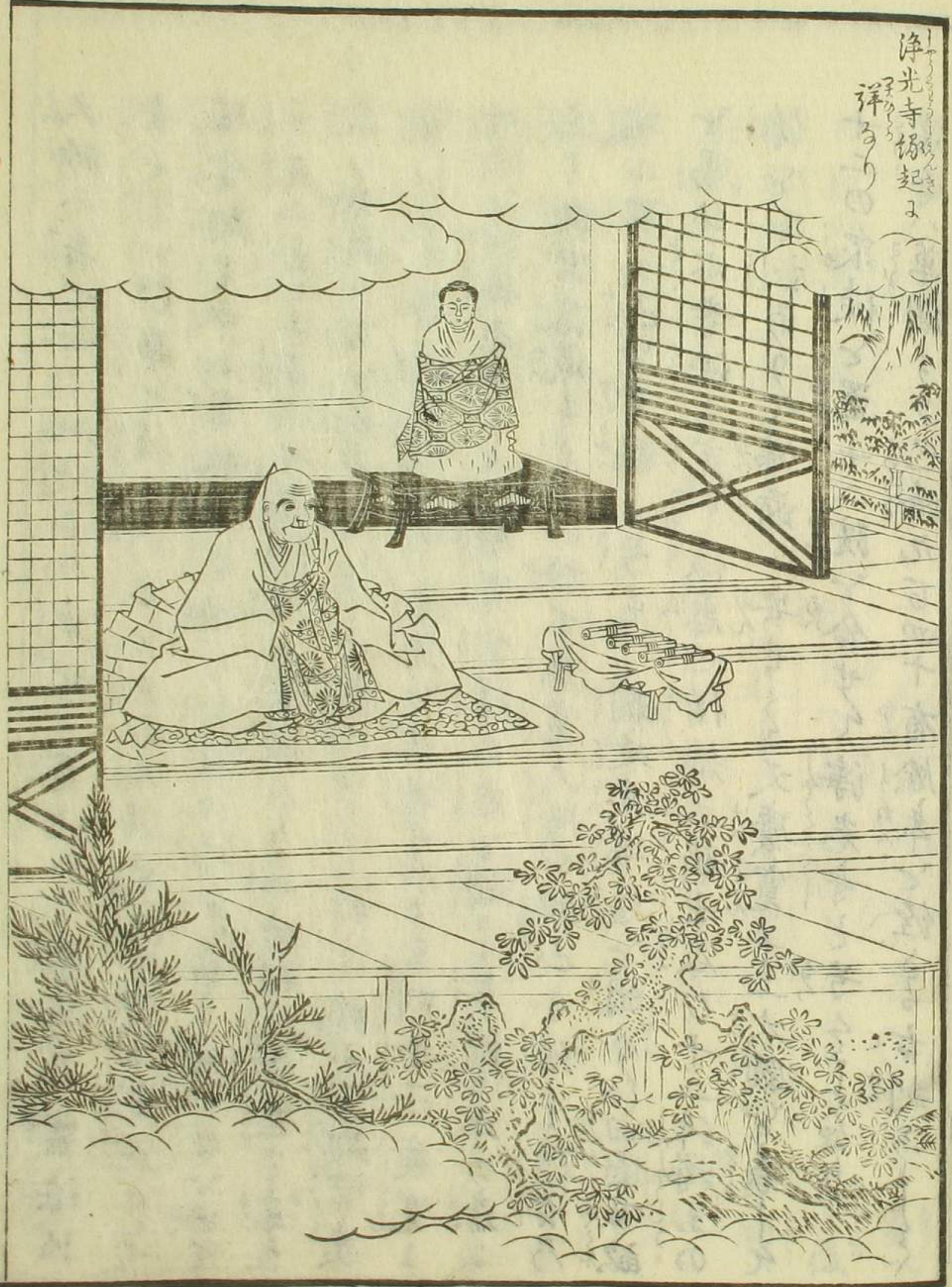
江戸名所記
第一へり毎月八
日かひ不
元三の朝
うかくす本尊
の御前本尊
あらはちゆ
人よすとあ
されとせり今ハ
絶えゆく土合
あすとぐり

當不時官知語等力等曰宿山龍雲尋出靈留傳去識果汝恩思
寺動放吏識唱言營獻今草以不能告青臨像淺被村必汝等而建
居院光及來翁是之供夜庵青動加青龍東彼草現里來等若還伽
既之覺富而之我此耳夢漸龍垂護龍到北像寺益道此暫能爾藍
而像大民建更之地覺或至至頭之日庵忽傳一者俗營合至後如
告是師等寺曰願伐大人清今而莫吾所然教日多目練心心翁何
村也恩傾於翁也木師告且時聞令有拜起大有矣送若護歸語答
人此必財此聖師交告曰里時言不一佛瑞師白其天吾此請村曰
曰時靈戮聖者能荆村貴人有己祥言像雲所髮後際若此必民時
堂覺材力語也企新人入數龍龍自神而青造翁慈追遲地有曰緣
字大自于不翁造為曰寓輩燈形今龍青龍也來覺共歸亦感過未
未師刻時虛欲營靈我草捧奇隱以聞龍現言曰大深傳好應日熟
成或不庵師去我場欲庵珍瑞覺神之猶雲已東師信吾建也吾汝
雖時動中其告等則建予膳者大龍吾現中形北東誓語練我已且
然在明有人衆誓不寺等而其師為欲在覺隱有方首語若有得還
吾淺王尺也曰努亦於盍至此為護建覺大慈靈行自畢後西安去
志草像餘於後力空此餉問謂吉伽寺大師覺地化是凌時州靈於
在寺今靈此時村乎汝焉其乎徵藍於師潛大吾之靈空有之像是
弘或堂木合有人村等故故其即神此向出師安時感而善行自智
通時西時郡善亦人合我對夜名青神瑞寺便置暫溢西知未今止

紛無則附居謂翁髮是東靈何智是天像大我像之故尊乘佛無布
亂人下之處此曰白何還應處而日明腰師當告日再是止像量金
奇家總耶所翁我如常到之耶語欲此見曰行曰佛刻也觀者之祇
香唯國於以容待雪唱武地大夢還時今像也如像藥其院傳生園
薰有郡是然儀像容佛州也師事野下不已大汝已師後自教也始
郁一今乎者心者眼名偶汝對智州野拜靈師所成佛大刻大肆焉
智草之翁我非久廢居然夫曰感告國像異俄念但像師等師下爾
喜庵地與奉常矣素在逢隨信喜別大腰不覺我未今思身所總來
而于也智特人汝而葛一佛知而耳慈者煩時欲琢青念藥造國佛
附時四及佛故所氣飾老意佛問大寺蓋復四利彫龍彫師也葛像
像此望從像對負象郡翁廣意曰師有由彫更益像山刻佛初飾仰
於地瞻者者曰佛超木其智非然默釋之乃也東腰之一像延郡藍
翁震眺東正願像凡下名曰凡則然廣也止便國其本佛安曆青徧
而動唯入是我當相川唱諾所生而智而因起之夜尊像置七龍滿
智紫見荒生欲安見野翁謹測身知者大之拜衆大是當之年山三
間雲茂原身一我欣年不隨只佛佛來師自像生師也化今於淨千
日降草行佛見草然可知佛東也意在不以感明夢大益中叡光之
我垂曠數也老庵傾九其意州不附叡知錦歎且所師東堂山寺界
此瑞野里豈翁智慰十姓因自知於山便綉恭有刻彫國之創藥利
地花曾至輕之思唱鬚字負有安廣至到纏散便佛刻以本一師益

嘉叙二十都延地重菩色境視造至顯子所
曆紀院二自聞殷罪薩見奔道營貞密慶期
淨二時名神刻其重有聖赤起俗畢觀之寬未
光寺二十六變光寬士賜遂人有五日盲其三汝以得
十月懼寺表及田得教全色有人志月其此久
一十其實十數見使不祿數積焉本勗山停
一世住日本鎮大神畠種到者或佛目觀並遂汝日
持沙門義純謹書
藥師佛と彫刻を漸多か頃一夜此像大師の爰小告て曰く
汝う念之所の如く我東國の衆生と利益せんとほ明旦便あり
我西より下と大師誓を爰覺ぬ然よ明日下野國太慈寺の廣智

本尊縁起曰延曆年間傳教大師東國化益の為叡山小於て
到今木下川の時又偶然とて一の老翁小逢つて姓氏詳く今白鬚
明神翁依然として云く我靈像の到ると待ひ久しよろしく我某庵
ふ安主へと云智喜んて彼像と翁よ附一又此地ふ伽藍と建ひゆ
と告翁云時縁りよく熟せし汝且還と去き依て廣智を此ゆと
思ひ止て郷里小歸る爾後翁村民小語て云く後善知識ありて必
あふ來て練若と嘗ん我今西州小河より西去あり天の道俗
うんゆと此語と傳ひと云畢と空と凌く西ふ去まう村里的の道俗
天際と見送る其よ深信誓翁を至後慈覚大師東國化導の時
武州小河より暫淺草寺の觀音堂小河より一日白髮の翁來て



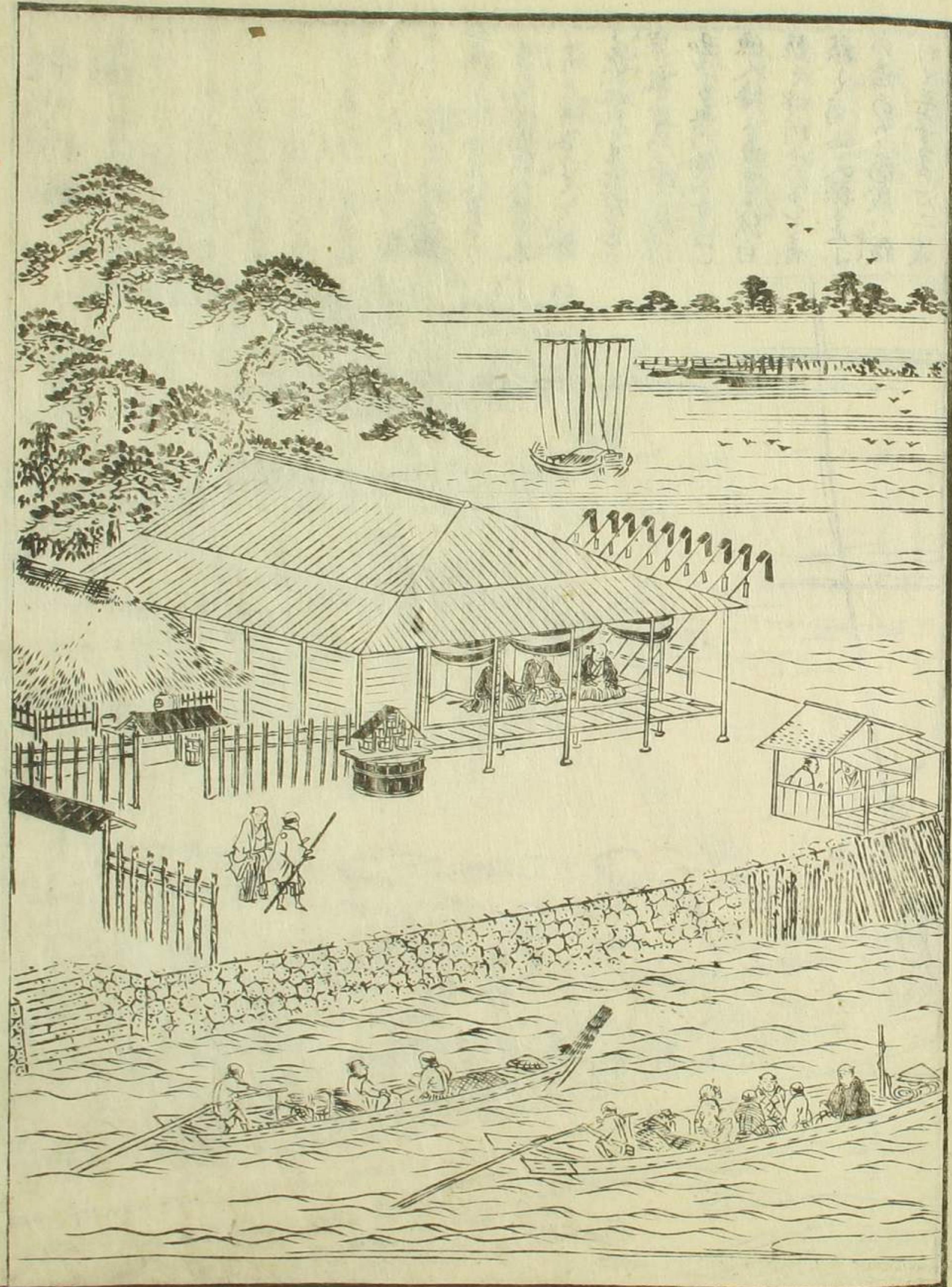
淨光寺縁起
詳より



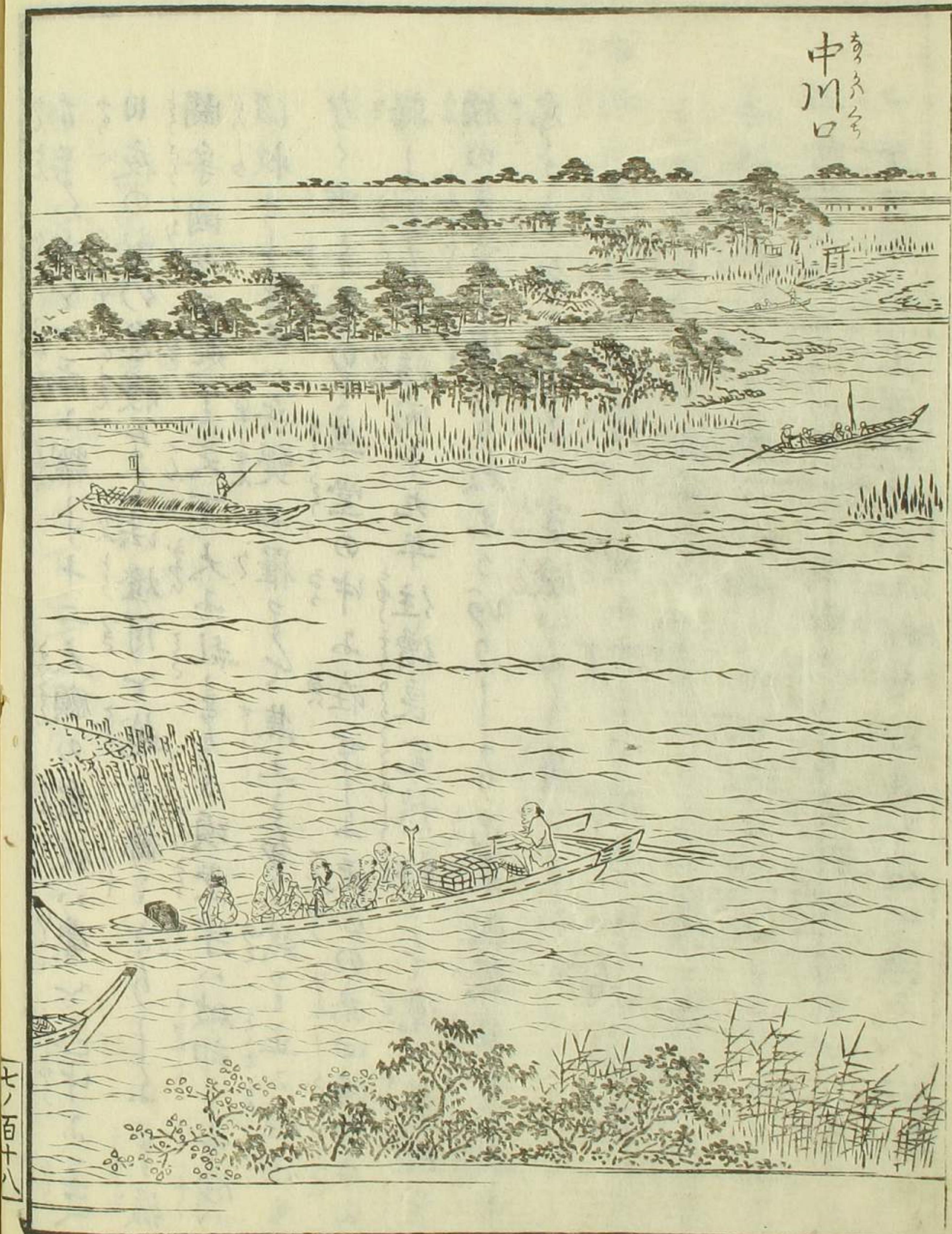
本下川薬師如來の
靈像ハ延暦年間
佛教大師獻
化盆のたま形
在せ一にはある
造されや
此まるの美
利あるを以て
竟よその像
腰と刻られ
しと錦繡成
りてうんと
纏ひ下野國大慈寺の
彦智といふ沙門乃
あふるゆんとすま
付属ありてスハ
も有縁のゆきと
ひて本下川より置
き奉り——

大師小告て云く此所より東北ニ靈地あり藥師乃靈像弘
安寺とひ畢て後至河方と失ふ大師東北を望ふ忽然にして
瑞雲起ミ中少青龍現を依テ奇異の思ひとる一清小寺と號
主元少玉小果して藥師佛の靈像あり此時村人等集まり
前の唱翁言を告大師とて其人ありと称し終ふ合郡官吏
及し富民等財を傾け寺院と建立せんとも則弟子慶寛よ
此地と附屬あり一々慶寛嘗構の志と勵一貞觀二年の春
至モ諸堂落成をあしに於て慈覺大師と同山と稱一法古乃
瑞小因く山と青龍と号す朝廷其瑞應と聞タシ田園百畝
と賜ひ永寺供ふ充モ後惠心僧都二脳士及び十二神將主の
像と影刻ありて佛前少安せん又慶寛十二大願と表して
十二の衆徒と置十二院と合せて淨光寺と号すとあり
當寺ハ草創より已降九百四十有餘年と經る古刹也

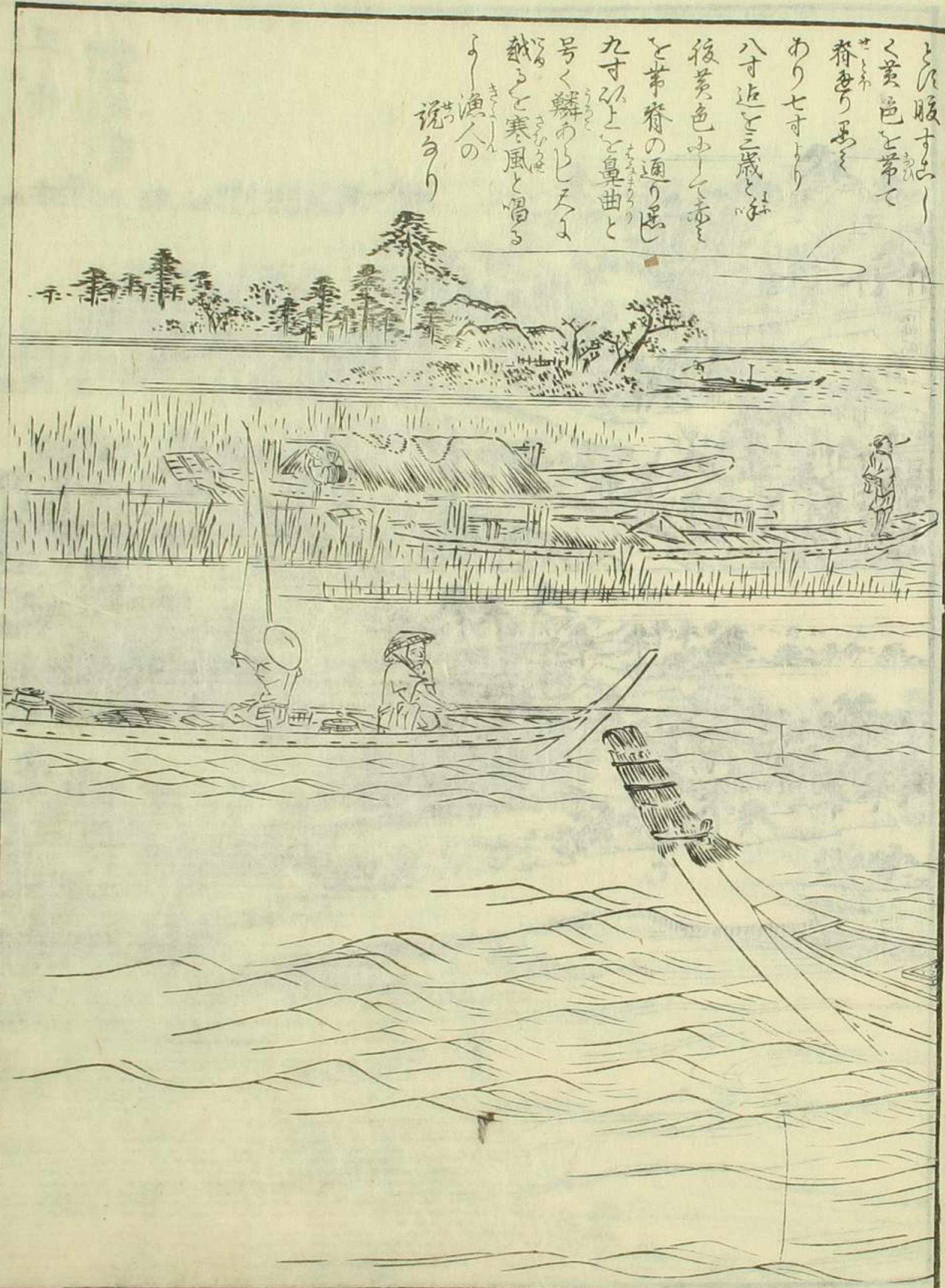
本尊ハ光と一天少耀一十二大願の衆徒ハ甍と山中少並
日夜の勤行怠慢少く法燈日と越く赫く一ふを後
鬪爭國々少起ミ天下大小亂きる頃堂宇ハ破却一寺頃
没收せしと又ハ兵燹ふ罹るて焦土となり残らず止る住持も
なく唯本尊のみ草堂の中少在せしふ天正の末四海昌平又
領の朱章と錫杖ねあらひり一少り已來國家泰平の行念
急ぐ少ゆるく本尊の靈驗いと著一とあり
中川隅田川と利根川の間少夾まて流るがよ中川の号あり
とくと荒川の分流熊谷の邊より少く遠く埼玉と足立
とく兩郡の合と流利根川の分流も川俣より少くすり
二水接う保の邊少て今一飯塚大谷龜有新宿等の地少添て青
戸奥戸平井本下川及び小村井逆井と経て海ふ入
未を中川と



七百十八



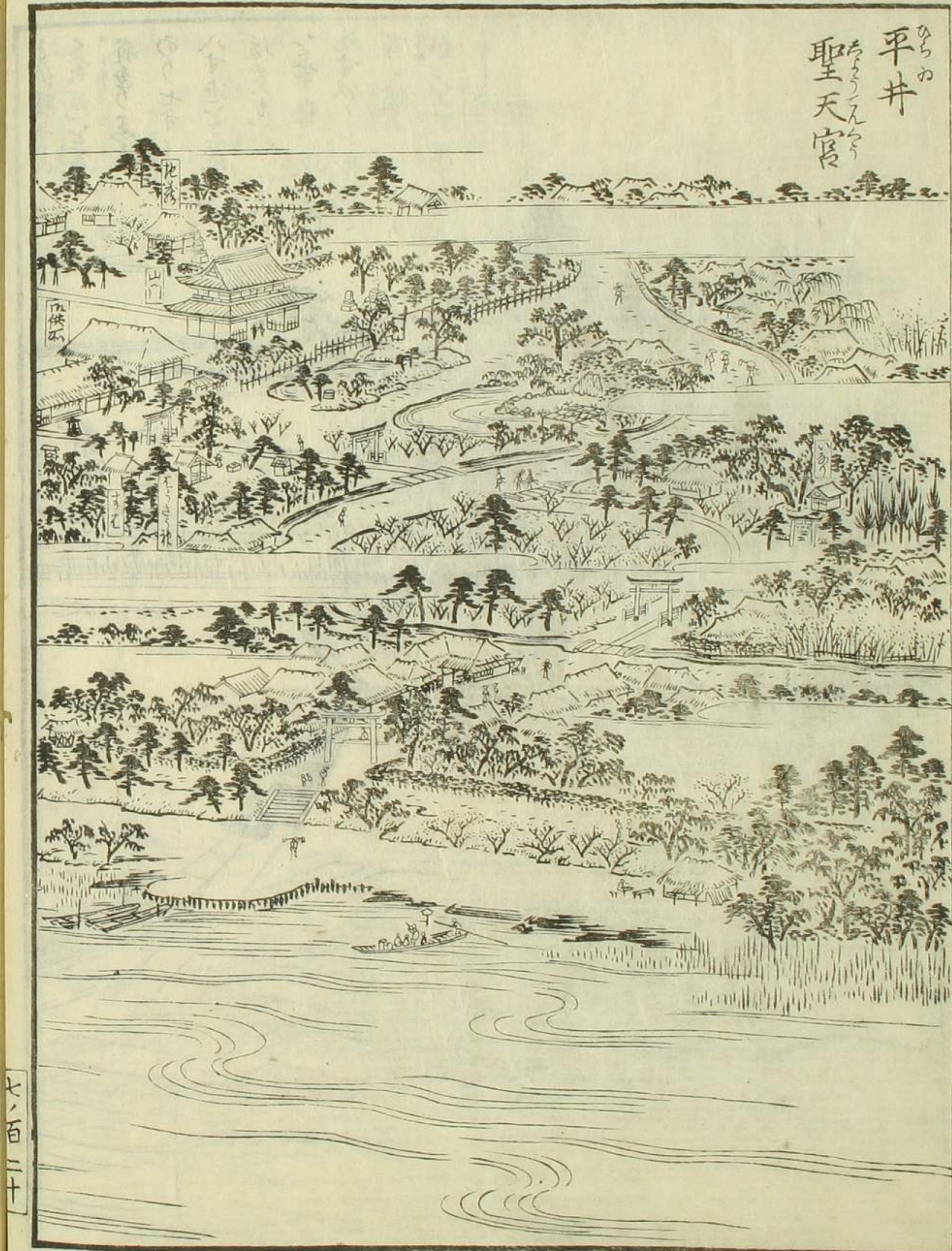
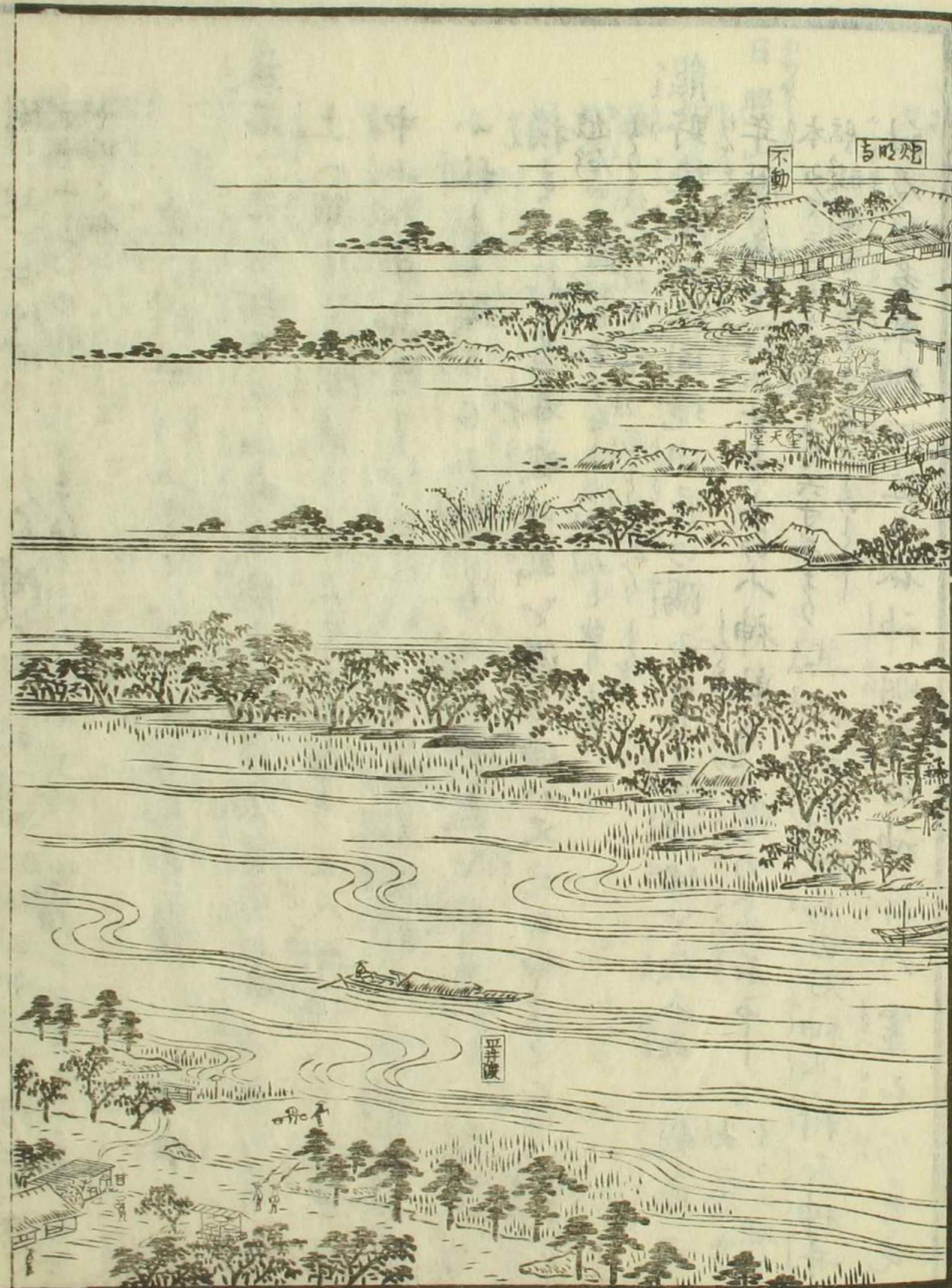
中川口
なかがわぐち



く黃色と常て
脊きりゑ
わり七すより
八す近と二歳と
後黃色少して赤と
と常脊の通り風
九すひよと鼻曲と
号く鱗のじそよ
哉ると寒風と鳴る
漁の



春鱠ハ三月の末より
四月小入と盛り春
尔と云ハ寛文の正南總
伍大刀の船頭仁童^{じんどう}が
たゞものとて岩^{いわ}崎^{さき}兵^{ひょう}左衛門と
ソノ人是小姓今岩崎流
とツハ則^{そなへ}ば入^{いり}始
リミ先^{さき}り後春鱠
と云^{いふ}うゆ世^よ小姓^{こせ}より
と云秋鱠ハ八月の末
より九月うちもと節^{せつ}
と云^{いふ}茲^すれとも十月まで
寒氣^{さむき}ゆうれを津^つ
ゆるり海^{うみ}川^{かわ}沟^{くち}水^{みず}幸^{さい}也^じ
漁人^{ぎょじ}海^{うみ}産^{うぶす}する波^{なみ}白
鯵^{しらめ}と呼^よ川^{かわ}小^こと青
鯵^{しらめ}と呼^よ川^{かわ}又^{また}鯵^{しらめ}と青
の差^ありあり歳^と後^{あと}
白く五六寸^{さん}と二歳



上と古利根川とくら御古水戸黄門光圀水府入船の邊此中川乃
外中川と命ぜまくり

中川や曰くもひても妙いと自 嵐雪

立石 立石村五方山南藏院とのてる真言宗の寺境みゆり地
上へ頭きくる而後又壹尺もくりあり土人相傳へく石根地
中小入る其際もとあくにとのへり石質弱ゆて至色世間
小称まゝ鞍馬石ふ似くり此石寒氣と帶きハよかと欠
換もされとも春暖の氣と得る時ハ又元の如くと云々古此石
近々四五箇村の名より候ハ此村の名立石と云々

熊野權現祠 同境内艮の隅みゆり今旧地と失ふを鎮座乃
年歴等と詳少せもとく神躰ハ一箇の靈石にて長二尺八寸
本末二尺九寸未満六寸有り其餘武州練馬の石神井村石神井
社及び多摩郡阿佐谷神明等の神体乃靈石也

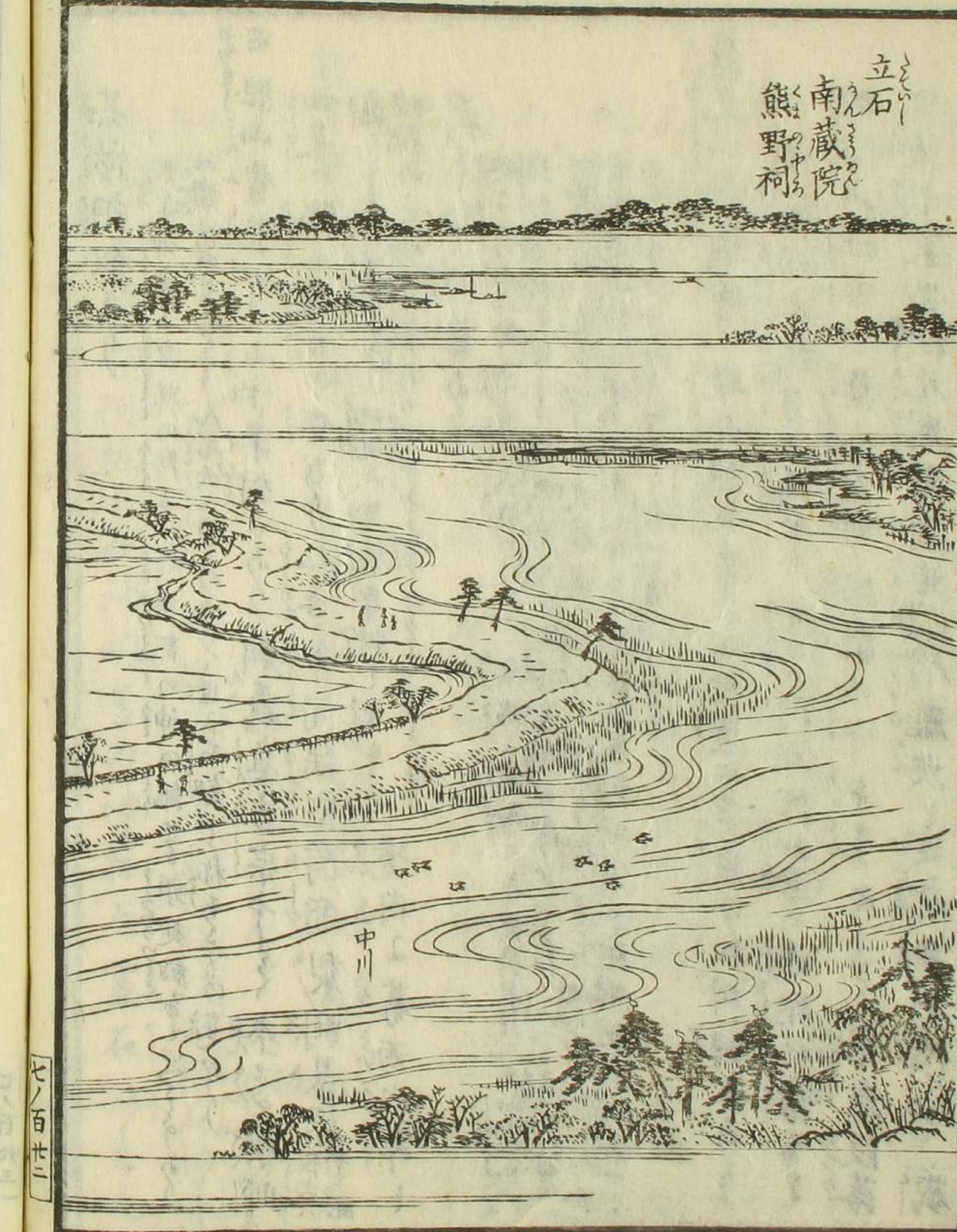
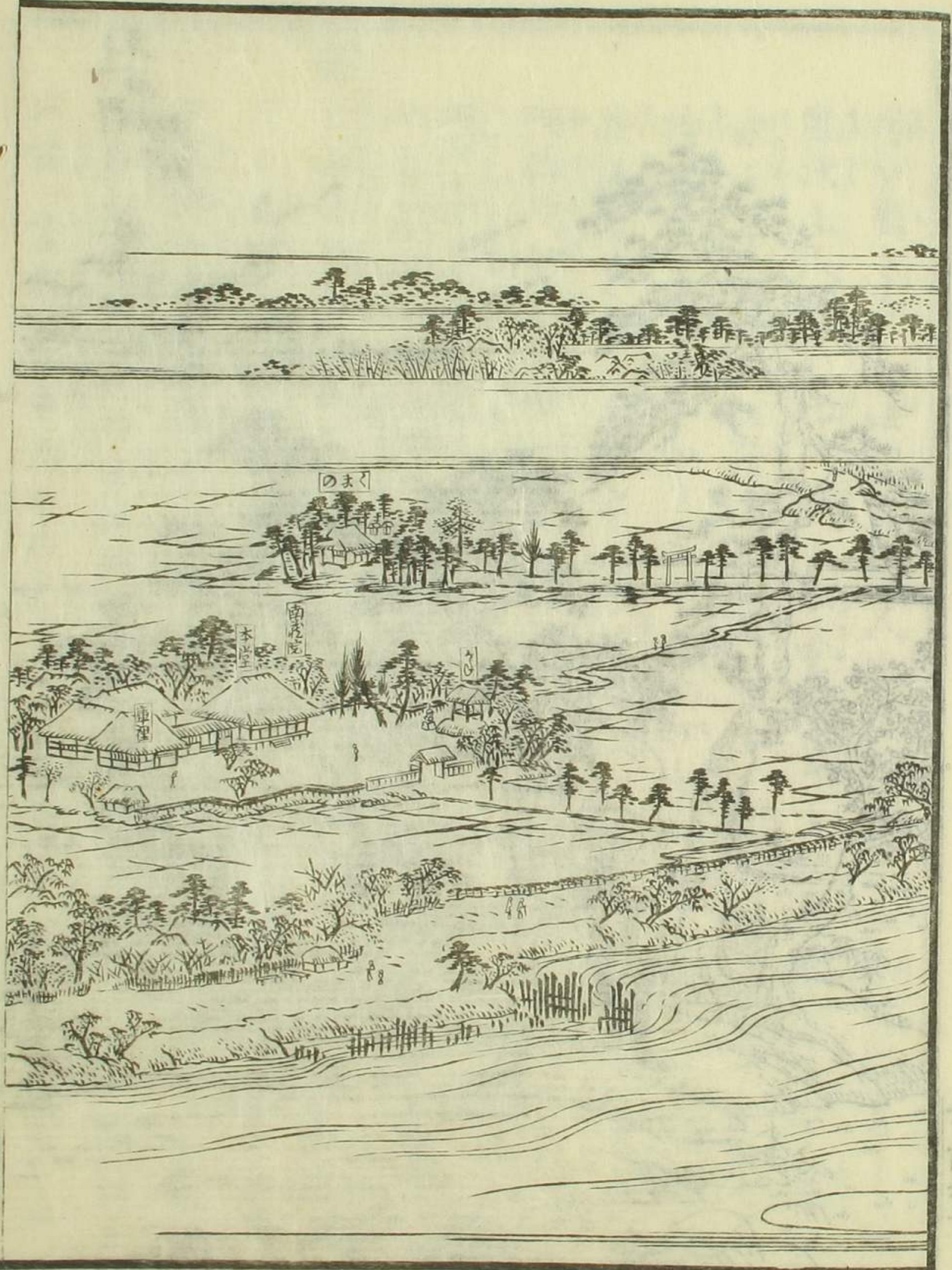
其形相似く

被ふ神事玉皇孫の降り時諸部の神の佩サヘ頭槌劍をとどりあり
此類ひのものあん尤天工のものうく世よ石劍と稱もるの是なり
日照山普賢寺 上千葉村みあり新義真言宗やく本多薬師
如來ハ佛工春日の作なり弘安年間法空阿闍梨開基は往古
魏と廣大なり此辺ふ普賢寺村と号もる。境内よ葛西六郎と
地名あし當寺食邑の時跡あるをもつてりとあり

人の墳墓あり

按葛西三郎清重の氏族がくへ東鑑は建暦三年癸酉五月三日和田左衛門
尉義盛兵を起く將軍家及び執權義時の事を記して下に葛西
六郎とある名を以て武藏國の住人と注せり恐らく此人かくん然
當寺過去帳は建暦元年三月廿日葛西六郎常則卒榮照院常山大居士と
あり當世の法号をめむ不審也

真光山善通寺 遂井渡口より八九町東の方東小松川村ようり
一向宗西本願寺より属せり本多阿弥陀如來ハ来迎の像ある
相傳へ往古千葉介太郎宗亂の守本多やく宗亂没落
の後多臣秋元刑部左衛門尉胤次と云者是を傳へて歳



立石材
旅石



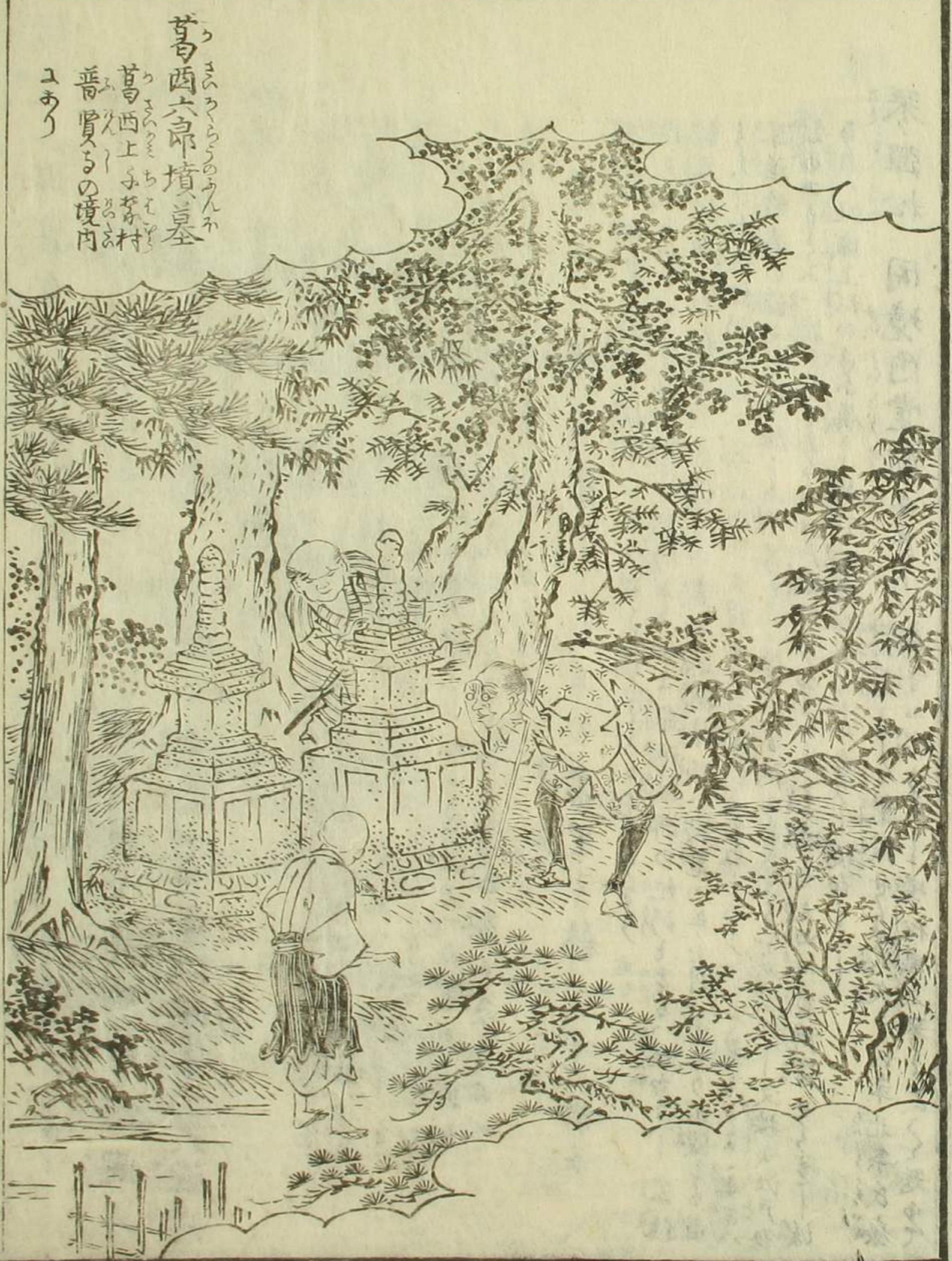
月と歴りを後親鸞上人胤次う家小止宿せらま
胤次上人の宗化小帰一室と嘗て此本尊と安す然
永正年間兵火ふ罹るく堂宇悉く焦土とありと本尊
持退て恙無とあり天下承平の時ふより終々一宿と歸く
善通寺と号くとつて
阿弥陀如来画像一幅 中將姫秋元刑部左清の子孫今も此村の住民四十有八
八日より同十日迄此像と御く諸人よねせむ往古
賊難小逢とくとも威徳のありて失牛とあり
十字名號一幅 観音上人の真筆たり昔上人胤次う家小宿まゆ一
夜
醫王山妙音寺 東一江村小ゆり真言宗ゆて建久元年秀宗
上人開創するの精舍なり阿弥陀如來と本尊とて高寺小安置
の薬師如來ハ立像やて佛工春日の彫造なりと云傳又古鍛世
安房守某ゆる人の念佛やて靈感の多像ありと云辨天
北宮ハ堂前池の中島ふありて寺記小寶治元年丁未効讀もと云

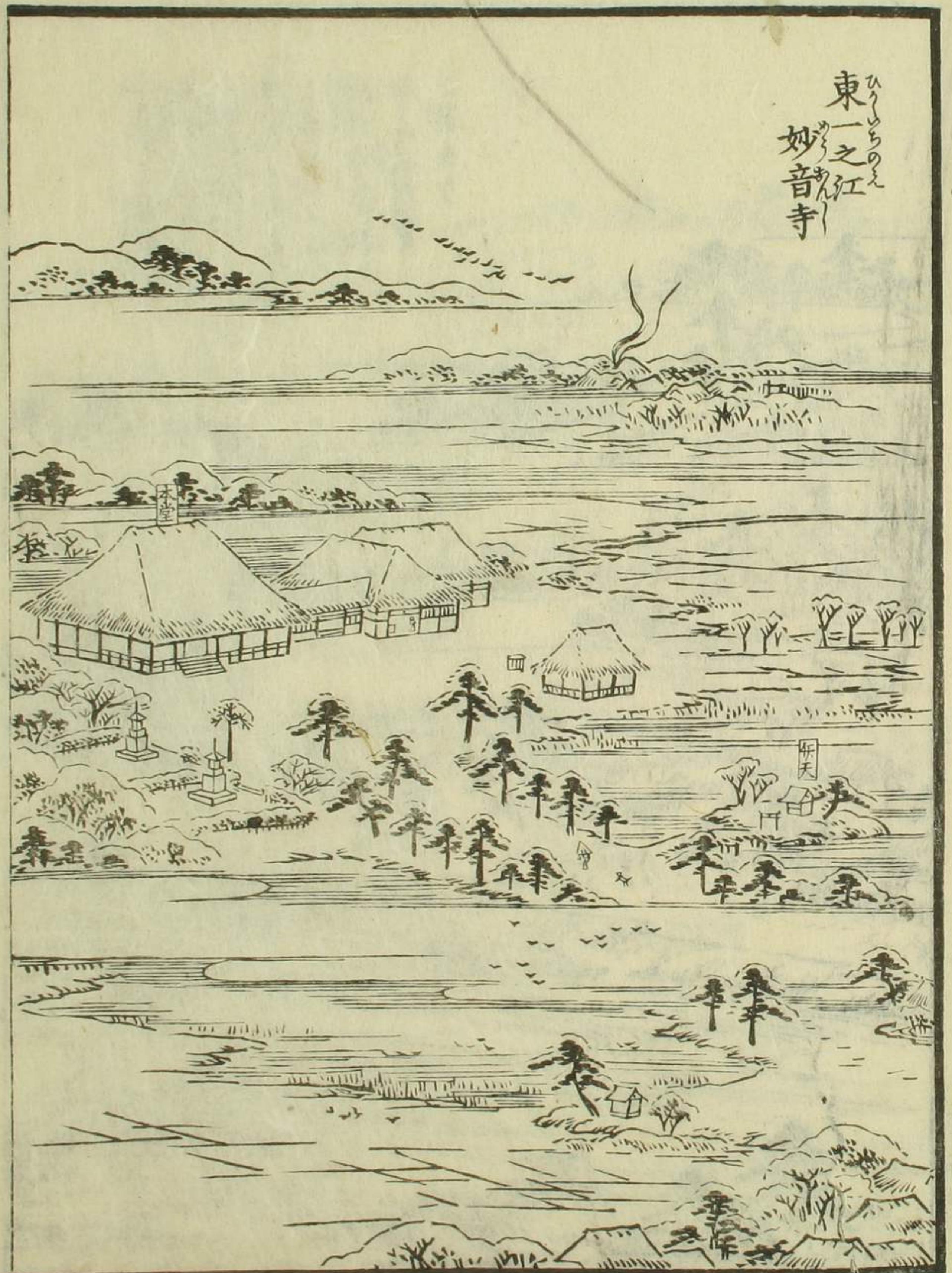
賓頭盧尊者像

堂中小安置寺僧侍へて
佛工春日の作なりとひり
かくて容貌甚異相あり



本覚山妙勝寺 西二の江村古川の通りより 日蓮宗にして中山
の一鵠寺葛西の觸頭あり 弘安年間 或ハ德治二年 丁未開創も云
草創みて 宗祖大士の像、日祐上人の作なり 日祐上人、中山の第
水神宮 日尚上人、嵩寺開創の主にて平氏の水神ありと云
十四歳立年の裏のうるかくや洞舟をして流され舟の堤江の浦 小漂島せり此浦の
漁人五郎何某なるもの助り出でて其生来と用て自通家何某らかくふせん
遂不中山の日高人とおもて弟子のれとりうけ出家得度を依此地妙見山の
傍小草巻とつゝ廣宣流布の志頗り此水神宮、日尚上人初洞舟來此海上ふ
漂蕩あり一頃深く水神不祈誓して波浪の難と遁きて報恩のこも此本尊と周刻
時上人の慈眼と見て後不退小乘の法味と見て身づらまことあり





東一之江
妙音寺

龍龜山淨真寺

清泰院と号ひ上今井村渡口より二丁北より

西北より淨土宗にて縁山小属を鎌食光明寺乃岡山

記主禪師良忠當寺と草創を中興ハ增蓮社頓菴上人源清

和尚と号を本尊ハ阿弥陀如來なり

東庄産或人安房の清澄と一見せよウトミタヒテ江戸の該の所よりとて一宿して角田川の河舟みと
思ふ世うれ立つて江戸の該の所よりとて一宿して角田川の河舟みと
下流玉敷西の府のうちと林日ちりりとあゆく移りて
剥竹を経て浦ヨウリしてかきえて住一里いもえくり李

より極ひのこちて今井といふ浦よりアリて淨土の寺海無る

みく遊へ誰人泊難ふまじふ候はくまじの居ふ發向松

ありととくすまに櫻子立る

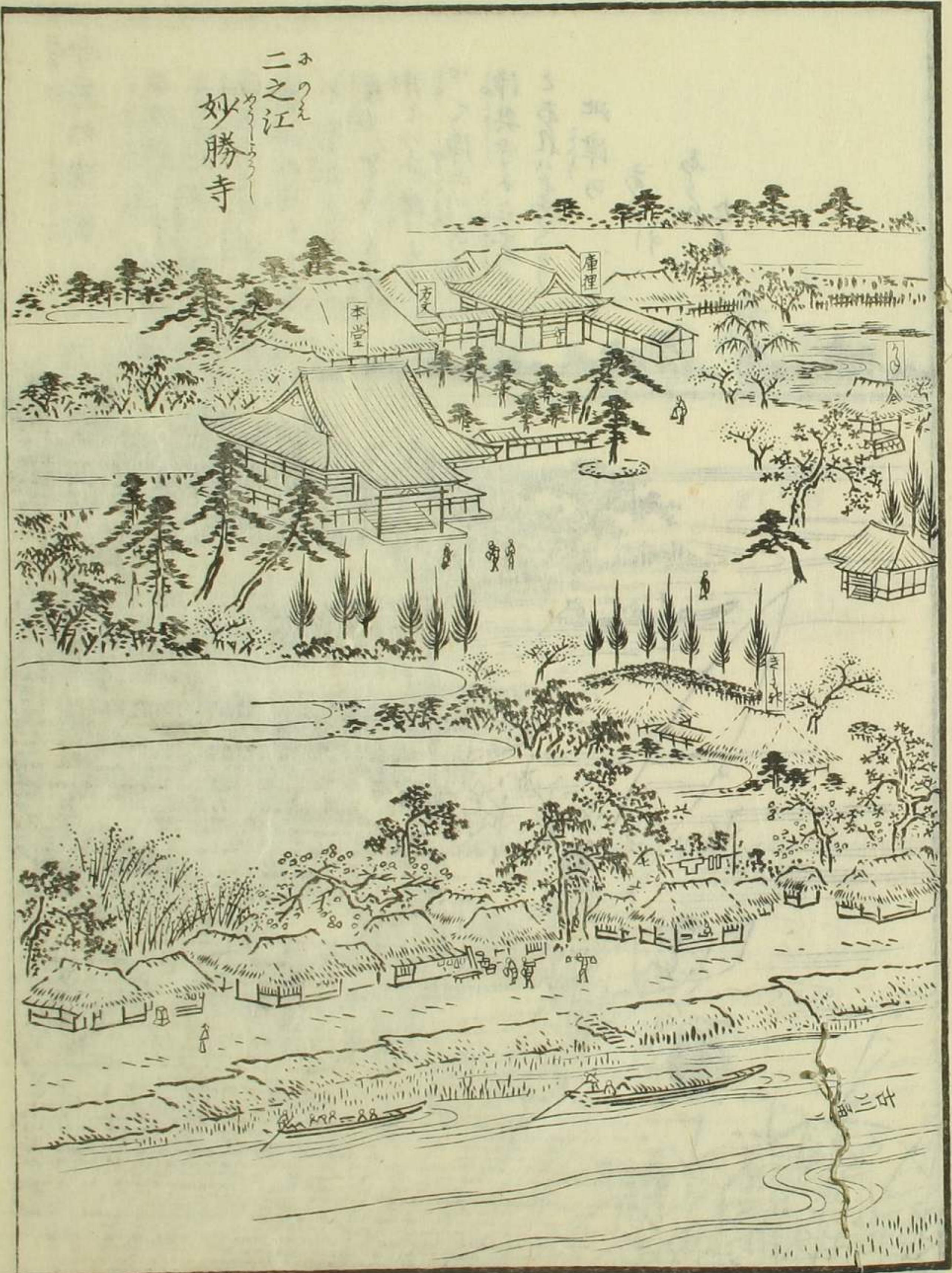
富士の根を走りぬ君の千里う那

宗長

方丈の西よりひしき高きよりかく見えらるたりありあり云々^{云々}
按此あつまつとく宗長の紀游あり世よ宗法師の紀游とある。櫻が一个室底
修馬記ありひ扶桑隱逸傳等の書ふ宗祇起師ハ文龜二年七月つゝり小没する由
より此紀行の始ふ永正六年五月十六日思ひもねとあくどりて考ふも永正八
宗祇修馬の後七年と經る年影なり僕く宗祇みあくとあくへー又按江戸の
館の西より一宿してとある江戸城の下をへー至るで太田持資篤寒せよモー渡
られハ此城上木の事ふ屬し朝良朝良かとくふあり一頃あくへー

當寺五宿うち一頃松風入琴と題す

七百九五



今井の津頭

柴屋軒宗長(いえやかん)永正六年
年の紀行東土産(とうさん)すくはる
隅田川の河舟と
葛西の府のうち

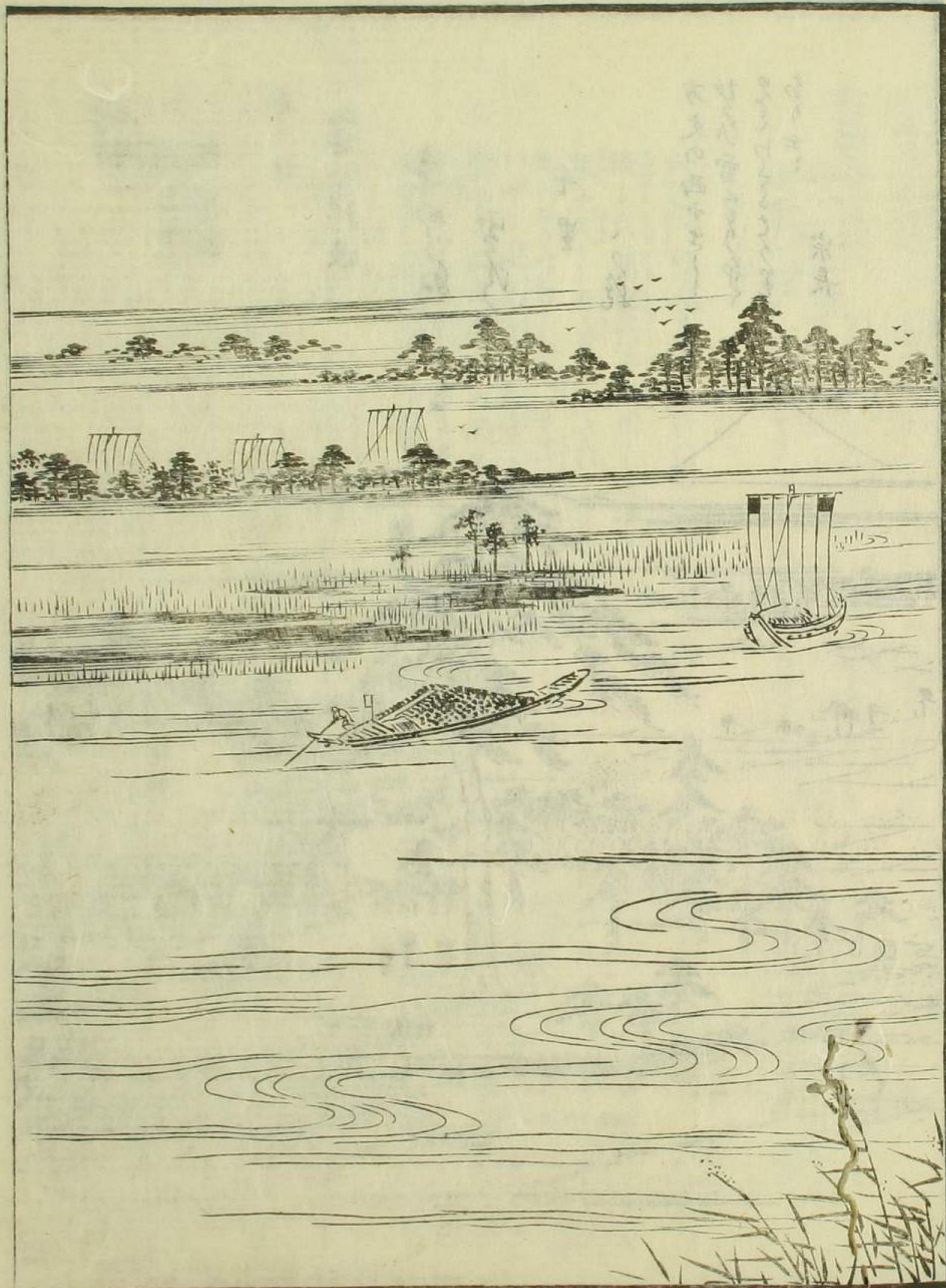
あれ
あり
たり

葭芦(よし)をあさき今
井と(い)ふ津より

下(おと)て淨土門(じょうどもん)の寺

淨真寺(じょうしんじ)が立(たつ)て
とあれハ(あれは)

此津(このつ)の



今井
淨興寺
琴彈松

東土産

弓士根

雪の
さくわぬ

千里

方丈の西
かうひ雪
見る
あり云々

宗長



和歌を詠せり是より後琴ひき松と号す
武藏野紀行
按ふ氏康記かみ不名の准津勝の年八十あまりふ
既ふ久一寺号ハ仙人文字淨興小作
共ふやうかく文字與と光との違ひあり氏康より宗長の御
下川の淨光寺ハ慈覺大师開創の精舍ゆゑ天台止觀の法燈赫
當寺ハ記主禪師の開基ゆゑ旧より淨業の仁利うり庭前琴彈松と称す
古株もあり又東土産よ述るゆゑ當寺ハ西南の於遠くひそむ芙蓉の峰ふ相對
眺望する所宗長の句意ふたりすなり然る時ハ此より御絶景を明燈とす

北条氏康

松風の吹きすげばよしとあへことひゆふをかくね

天川山妙福寺下鎌田村ふあり淨興寺の北二町半と隔て淨土
親鸞上人御影堂本堂の前左の方にあり相傳六昔親鸞上人東國遊化の頃
宗中上今井村金藏寺より属毛中興岡山ハ德誉炭公和尚と号す
本尊ハ阿弥陀如来なり
親鸞上人御影堂本堂の前左の方にあり相傳六昔親鸞上人東國遊化の頃
三年帰洛の頃自身の肖像を造りくこく小残一置すあり毎歲四月八日より
ある上人清氣の祈念ありとく教日の間雨降り百穀登るを後上人ふ止む
ある



北條氏康



天文十五年秋小田原の
北條左京太夫氏康
野小鷹狩の時葛西の
淨與寺より一夜のやうりと
ことられ松風入琴と
つる和奇と題
かく詠せまし
武藏野
紀行

帝

同十日追佛龕を開き親鸞上人の鏡と池本堂の後にあり上人自ら肖像と御影を安置因道俗群集す。同傍より曰樹太子堂本堂の前右の方より木立今善木ヲ植え云傳へ毎歲二月廿一日忌あり御懸堂は相對せり聖德太子の靈像を安置太子自ら作らせと云傳へ。當寺ハ寛永二年間の草創なり。

縁起云當寺第九世日敬師在住の頃堂宇大に破壊せし師深く是を歎き普く四方を行乞々再興の志を励め終ふ其堂舎を改改んとする時梁上より此板を得たり。曰當寺は高祖大士手刻の祈禱板と称するものあり由云傳へるの通り。此時より至る空。此板とあると則ち左とある。長二尺五寸幅一尺等厚サ五分半ある梨板なり片面ハ中央より首題あり。左右より兩面四菩薩又病取消滅等の数字を刻。其下より五月日とあり。大士の号。花押と印せり。又序面帝釋天王の影像。右の序面に鉤と持て左の序面に忿怒の相と能く。是除病延寿の事も慈悲降伏の事も。信願の事よりは是を取。又與入黒畫。是庚申の日なり。當寺の板を取出現も又庚申より是を因縁。此日と

早稻田大学図書館

011688985015